

之險阻。臣請以萬人扼國府嶺。擊挫其先鋒。先鋒既挫。後軍必退。頓南都郡山。不能輒進。吾因其變。以制其勝。至受大軍於曠原。臣所不知也。從之。授基次兵一萬四千。陣平野。又遣薄田兼相渡部尙繼之。兩將軍使人誘基次。曰。苟啓東兵。則封以播磨。基次拜謝。曰。今東西決戰。使西強東弱。則歸東矣。今東強西弱。去弱就強。臣之所耻也。雖然。東旨之辱。亦不可不報。報以速死。臣速死。城亦速陷。所以報也。

訓讀 兩將軍既に京師に至る。大坂の間細之を狙撃す。皆成らず。乃ち大野道見を遣はし、火を界浦に縱つて東軍の據資を奪ふ。大野治房を遣はし、萬人を以て大和に入り、郡山を攻めて其守將筒井定慶を走らす。淺野氏、紀伊の軍を擧げて至ると聞き、因つて其國民を誘ひ、虚に乗じて兵を起さしむ。紀伊の軍乃ち還り救ふ。治房之に尾す。先鋒塙直次、榎井に戰つて戦死す。治房赴き援く。及ばず。既にして東軍、大和・河内より来る。水野勝成・藤堂高虎・井伊直孝・伊達政宗前鋒たり。諸隊長、前議を執つて之を南郊に迎へんと欲す。基次可かずして曰く「野戰の勝敗は衆寡を以て決す。今寡を以て衆を撃つ。之を險阻に邀ふるに若かず。臣請ふ萬人を以て國府嶺を扼し、撃つて其先鋒を挫かん。先鋒既に挫けば後軍必ず退き、南都・郡山に頓し、輒く進む能はず。吾れ其變に因つて以て其勝を制せん。大軍を曠原に受くるに至つては、臣の知らざる所なり」と。之に従ひ、基次に兵一萬四千を授けて平野に陣し、又薄田兼相・渡部尙を遣はして之を繼がしむ。兩將軍人をして基次を誘は

しめて曰く「苟も東兵を啓かば、則ち封するに播磨を以てせん」と。基次、拜謝して曰く「今、東西戰を決す。西強く東弱からしめば、則ち東に歸せん。今東強く西弱し。弱を去り強に就くは臣の耻づる所なり。然りと雖も東旨の辱なきも、亦報いざるべからず。報ゆるに速に死するを以てせん。臣速に死せば、城も亦速に陥らん。報ゆる所以なり」と。

通釋 兩將軍が既に京都に到着した。大阪方の忍びの者が二人を狙ひ撃ちにした。共に成功しなかつた。そこで大野道見をやつて界浦に放火し、東軍の兵糧を奪ひ取らせた。大野治房をして一萬人を率ゐて大和に入らせ、郡山を攻めて守將の筒井定慶を驅逐せしめた。淺野氏が紀伊の兵を擧げて攻めて來るとき、その國人を誘つて虚に乗じて兵を起させた。そこで紀伊の軍はそれを救ひに還つた。治房はその後を追ひかけた。先鋒の塙直次が榎井に戰つて戦死をした。治房は援けに行つた。併し間に合はなかつた。その内に東軍は大和・河内の兩方面から押し寄せた。水野勝成・藤堂高虎・井伊直孝・伊達政宗が先鋒であつた。大阪方の諸隊長は前に定めた相談を主張して、これらの東軍を南郊に迎へ討たうとした。基次は反對して曰ふには「平野に於ける戰の勝敗は多勢と小勢といふことで定まります。今小勢で多勢を撃つのであります。險阻な所に迎へるのが最も宜しいです。一つ私に一萬の兵隊で國府嶺を抑へ敵の先鋒を打ち破らせて下さい。先鋒が挫けたら後軍も必ず退き、南都の郡山に駐屯して容易には進むことが出來ぬでせう。かうして我軍は敵勢に變化の起るのをまつて勝を制することが出來ます。大軍を廣い平野に迎へたりすることは私として、その何處に可なる所があるか知りません(不可なり)」と。一同はその意見に従ひ、基次に一萬四千の兵を與へて平野に陣取らせ、又薄田兼相と渡部尙に續かせた。兩將軍は人をやつて基次を誘はせて曰ふには「もし東兵の手引さへしたなら播磨の領主にしてやるが」と。

基次は禮を述べてそれを斷つて曰ふには「今東軍と西軍が決戦に臨んでゐます。もしもこの際西が強く東が弱かつたならば自分は東の味方につきまます。今は東が強く西が弱い。弱い方を離れて強い方に就くのは自分の恥とする所です。けれども關東方の有難い御沙汰にも報いねばなりません。私は早く死ぬることによつてそれに報い度いと思ひます。私が早く死んだならば、城も早く陥るでせう。それがお禮心です」と。

〔語釋〕 淺野氏長政第二子長晟 ○櫻井(和泉) ○前議(七隊長の主張した説) ○國府嶺(河内大和の境) ○東官之辱(關東のあり難い思召)

五月五日、基次勒兵夜發。失道出古市。軍士恟懼。基次曰「此地據林臨水。戰守皆便。宜飲馬以待旦。旦日治長出助基次。幸村陣道明寺。重成陣若江。盛親陣矢尾。基次不知敵有後繼。不告衆而進。至片山。與水野勝成遇。擊破之。尙兼相來援。連戰未決。陸奥・美濃・伊勢諸軍夾擊基次。基次盡亡其兵。以十一騎在山腹。使使訣兼相曰「子勉之。吾將死也。乃復進。中銃殪。還至柏原。死。兼相恥前役之敗。亦奮擊而死。治長來援。大敗。大谷吉胤戰沒。」

〔訓讀〕 五月五日、基次兵を勒して夜發す。道を失つて古市に出づ。軍士恟懼す。基次曰く「此地、林に據り水に臨む。戰守皆便なり。宜しく馬に飲かひて以て旦を待つべし」と。旦日、治長出で、基次を助く。幸村道明寺に陣し、重成若江に陣し、盛親矢尾に陣す。基次、敵後繼あるを知らず、衆に告げずして進み、片山に至つて水野勝成と遇ひ、撃つて之を破る。尙、兼相來り援く。連戰未だ決せず。陸奥・美濃・伊勢の諸軍、基次を夾撃す。基次盡く其兵を亡ひ、十一騎を以て山腹に在り。使をして兼相に訣せしめて曰く「子、之を勉めよ。吾れ將に死せんとするなり」と。乃ち復進み、銃に中つて殪る。還り、柏原に至つて死す。兼相、前役の敗を恥ぢ、亦奮撃して死す。治長來り援け、大に敗れ、大谷吉胤戰沒す。

〔通釋〕 五月五日、基次は勢揃ひをして夜中に出發した。道を間違へて古市に出たので、部下の者共々騒ぎ恐れた。基次が曰ふには「此の場所は林を控へ、水に臨んでゐる。戦ふにも守るにも共に便利な所だ。馬に水をやつて夜の明けるのを待つがよい」と。朝になると治長がやつて來て基次に加勢をした。幸村は道明寺に陣取り、重成は若江に陣取り、盛親は矢尾に陣取つてゐた。基次は敵に後繼の有ることに気が付かないで、他の隊に黙つて單獨に進み、片山まで行つて水野勝成と出會つてそれを撃ち破つた。尙と兼相が援けに來た。連りに戰つて勝敗何れとも定らなかつた。陸奥・美濃・伊勢の諸軍が基次を夾み撃にした。基次は全部、部下の兵士を死なせて終ひ、只十一騎をつれて山の中腹にをつた。基次は使を兼相の許へやつて、別を告げさせて曰ふには「貴公一つ奮發してくれ。吾が輩は討死に定つた」と。そういつてまた前進し、銃丸に當つて倒れた。柏原まで返つてそこで死んだ。兼相はこの前の戰(冬の陣)に敗けたのを恥ぢてゐて、これも亦、奮撃して討死した。治長は援けにやつて來たが大敗し、大谷吉胤は戰死した。

〔語釋〕 古市・道明寺・若江・矢尾・片山・柏原(河内) ○前役之敗(磯多崎を守り被樓に遊んで敗けたことをいふ)

幸村聞急馳至。尙使人迎而告之曰「吾衆創殘、子請承之。」幸村諾而進、橫邀陸奥軍。陸奥軍長騎戰、勁騎八百、馬上發銃、乘烟馳突、無不摧破。伊達氏每以此得志於東國。幸村諳知之、乃引兵上譽田、東阜。阜中有凹處、就布陣焉、命其兵皆脫胄委槍、坐以埃指麾。陸奥軍稍近、幸村令曰「胄及相去數十步、令曰「執槍敵發銃、且馳至、遇槍而沮。又令曰「皆起敵兵大潰而走。幸村轉陣南阜、收兵與尙更殿而退。盛親上矢尾堤、望藤堂氏旗、乃退伏堤下。敵先鋒二將以爲走也。徑田上堤、則盛親大呼起、擊走之。重成游兵亦來援、遂斬其二將。

訓讀 幸村、急を聞いて馳せ至る。尙、人をして迎へて之に告げしめて曰く「我が衆創殘、子請ふ之を承けよ」と。幸村諾して進み、横に陸奥の軍を邀ふ。陸奥の軍騎戦、長ず。勁騎八百、馬上銃を發し、烟に乗じて馳突し、摧破せざるなし。伊達氏毎に此を以て志を東國に得たり。幸村、之を諳知す。乃ち兵を引いて譽田の東阜に上る。阜中に凹處あり。就いて陣を布き、其兵に命じて皆胄を脱ぎ槍を委て、坐して以て指麾を俟たしむ。陸奥の軍稍、近づく。幸村令して曰く「胄せよ」と。相去ること數十歩に及ぶ。令して曰く「槍を執れ」と。敵、銃を發し且つ馳せ至り、槍に遇つて沮む。又令して曰く「皆起て」と。敵兵大に潰えて走る。幸村轉じて南阜に陣し、兵を收めて、尙と更と殿して退く。盛親、矢尾堤に上つて、藤堂氏の旗を望み、乃ち退いて堤下に伏す。

敵の先鋒の二將以て走るとなす。田を徑つて堤に上れば、雖も盛親大に呼んで起ち、擊つて之を起らす。重成の游兵も亦來り援け、遂に其二將を斬る。

通釋 幸村は急を聞いて馳せつけた尙は人をやつて迎へさせて曰はせるには「我が勢は最早散々の手追故、貴公一つ引き受けて下され」と。幸村は承知して進み、陸奥の軍を横合から迎へた。陸奥の軍は騎戦に熟練してゐた。八百人の勇敢な騎兵が馬上から鐵砲を放ち、その烟に乗じて突進し、向ふ所打ち破らぬものは無かつた。伊達氏は常に此の戦法を用ひて東國に成功してゐた。幸村はそれを兼ねてよく知つてゐた。兵を引いて譽田の東側の岡に上つた。岡の中に窪んだ所があつた。幸村はそこに陣を布き、部下の兵士に命じて皆胄をとり、槍を下に置いて、腰を下して待たせた。陸奥の軍が幾らか近づいて來た。幸村は號令をかけて曰ふには「胄をかぶれ」と。それから距離が數十歩になる。すると又號令して曰ふには「槍を執れ」と。敵は鐵砲を放ち、且つ同時に突進して來たが、槍の立ち竝んでゐるのを見て氣おくれした。すると又號令を下して曰ふには「皆立て」と。敵勢は散々に崩れて逃げ走つた。幸村は東の岡から南の岡に移り、兵士を引き纏めて、尙と交代に殿をして退却した。盛親は矢尾堤に上つて藤堂氏の旗を望んだので、後に退つて堤の陰に隠れた。敵の先鋒の二將は、西軍が逃げたのだと思ひ込んだ。田の中を横切つて堤に上ると、盛親は大聲にわめいて撃ちかかり、敵を追ひ拂つた。重成の遊撃隊も援けに來て、遂にその二將を討ち取つた。

語釋 遇槍而沮(坐つて槍を構えてゐるから馬が腹を刺されて進むことが出来ぬ) ○二將(藤堂高刑、同良勝)

重成與井伊直孝相距若江堤、擊破其前隊。重成揮槍挺進、所向皆靡。斬敵將山口

重信等三十餘人。而其兵死傷略盡。乃據隴而息。敵以生兵乘之。飯島某扼重成曰：「盍還城。」重成掉頭而進。遂死之。直孝部兵取其頭獻之前將軍。前將軍檢之。冑纓無餘。而頭髮有香。前將軍歎惜曰：「是預決死也。」重成伯父宗明戰于山田村。敗退。井伊氏藤堂氏合勢逼盛親。盛親亦敗退。增田盛次止戰。盛次長盛子也。嘗仕尾張。前役從東軍。東軍勝則憂。敗則喜。是役入城屬盛親。以父猶在不名而死。盛親與幸村等自平野退。縱火聚落而入城。

訓讀 重成、井伊直孝と若江堤に相距ぎ、撃つて其前隊を破る。重成、槍を揮つて挺進し、向ふ所皆靡く。敵將山口重信等三十餘人を斬る。而して其兵死傷略盡く。乃ち隴に據つて息ふ。敵、生兵を以て之に乗す。飯島某、重成を扼めて曰く「盍ぞ城に還らざる」と。重成、頭を掉つて進み、遂に之に死す。直孝の部兵其頭を取つて之を前將軍に獻す。前將軍之を檢す。冑纓餘なくして、頭髮香あり。前將軍歎惜して曰く「是れ預め死を決するなり」と。重成の伯父宗明、山田村に戦ひ敗れ退く。井伊氏・藤堂氏、勢を合せて盛親に逼る。盛親も亦、敗れ退く。増田盛次止り戦ふ。盛次は長盛の子なり。嘗て尾張に仕へ、前役には東軍に従ふ。東軍勝てば則ち憂へ、敗るれば則ち喜ぶ。是の役に、城に入つて盛親に屬す。父猶ほ在るを以て名のらずして死す。盛親、幸村等と平野より退き、火を聚落に縱つて城に入る。

通釋 重成は井伊直孝と相對して若江堤に防いでゐて、敵の前隊を撃ち破つた。重成は槍を振つて抜きんで進み、向ふ所、皆ひるんだ。彼は敵將山口重信等三十餘人を斬つた。自分の兵も死んだり負傷したりして殆んどなくなつた。そこで岡に上つて休んでゐた。敵は新手の兵でそこへつけ込んで來た。飯島某が重成を引き止めて曰ふには「何故城にお歸りになりませぬか」と。重成は頭を振り立て、奮然と進み、遂に討死を遂げた。直孝の部下の兵隊がその首を取つて前將軍に獻上した。前將軍が之を實檢した。冑の紐は結び切りで先は切つて餘さず。髪の毛には香をたき込んであつた。前將軍は非常に歎き惜しんで曰ふには「これは兼ねて死を覺悟してゐたのだ」と。重成の伯父宗明が山田村に於て戦つて敗退した。井伊氏と藤堂氏が軍勢を合せて盛親に迫つて來た。そして盛親も敗退した。増田盛次が留まつて戦つた。盛次は長盛の子供であつた。以前尾張に仕へ、冬の陣には東軍に従つた。そして東軍が勝てば浮かぬ顔をし、敗ければ喜んでゐた。此の度の戦には城に入つて盛親の下についてゐた。けれども父長盛がまだ(高野に)生きてゐたので、(父に災厄のかゝらぬ様に)名を名乗らないで死んだ。盛親は幸村等と平野から退却し、村落に火をかけて城に入った。

三處之軍皆敗、將帥多死。城中失色。諸將議曰：「今日期會皆失、各自爲戰。所以不得志。明日、諸軍合力一戰、可以決雌雄也。」秀頼諮之幸村。幸村曰：「臣請陣茶臼山、以誘敵。明石掃部自川場出、今宮之南、舉火敵背、夾擊其中軍、而主公建旗鼓、繼之事。或克矣。」從之。旦日、幸村與渡部尙、大谷吉之等、出陣茶臼山、森勝、永竹田、永應、陣天王

寺南郡良列執桐號牙旗在其後。治長與七隊長陣毘沙門池南。治房與御宿政友陣岡山。津川左近執金瓠馬表在其後。東軍彌漫山野。左右竝進。前將軍統左將軍。少將忠直前田利光本多忠朝小笠原秀政等爲先鋒。前將軍召候騎問敵狀。對曰其陣甚堅。又待秀賴親出頗有鬪志。乃命質子大野治德作書贈其父治長。

訓讀 三處の軍皆敗れ、將帥多く死す。城中、色を失ふ。諸將議して曰く「今日期會皆失し、各自戰を爲す。志を得ざる所以なり。明日諸軍、力を合せて一戦し、以て雌雄を決す可きなり」と。秀賴之を幸村に諮る。幸村曰く「臣請ふ。茶臼山に陣して以て敵を誘はん。明石掃部、川場より今宮の南に出で、火を敵の背に擧げて、其中軍を夾撃し、而して主公、旗鼓を建て、之に繼がば事或は克たん」と。之に従ふ。且日、幸村、渡部尙、大谷吉之等と、出で、茶臼山に陣し、森勝永・竹田永應、天王寺の南に陣す。郡良列、桐號の牙旗を執つて其後に在り。治長、七隊長と毘沙門池の南に陣し、治房、御宿政友と岡山に陣す。津川左近、金瓠の馬表を執つて其後に在り。東軍、山野に彌漫し、左右竝び進む。前將軍左を統べ、將軍右を統ぶ。少將忠直・前田利光・本多忠朝・小笠原秀政等先鋒爲り。前將軍候騎を召して敵狀を問ふ。對へて曰く「其陣甚だ堅し。又秀賴の親ら出づるを待ち、頗る鬪志あり」と。乃ち質子大野治德に命じて書を作り、其父治長に贈らしむ。

通釋 かく大阪方の三箇所(道明寺・若江・矢尾)の軍は皆敗北し、大將共が多勢死んだ。城中の一同は顔色を失つた。諸將が相談して曰ふには「今日は約束の手筈が皆外れ、銘々ばらばらの戰をしたので失敗したのだ。

明日は諸軍が協かして一戰を試み、勝敗を決めねばならん」と。秀賴はそれを幸村に相談した。幸村が曰ふには「私は一つ茶臼山に陣取つて敵を誘ふ様にさせて戴き度いものです。明石掃部は川場から今宮の南に出で敵の背後に烽火を擧げて中軍を前後から夾み撃ちにし、それから主公は旗を立て太鼓を打つて後から續かれたら、首尾よく參るかも知れませんが」と。その意見に従ふことになつた。翌日、幸村は渡部尙・大谷吉之等と共に城を出て茶臼山に陣取り、森勝永と竹田永應は天王寺の南に陣取つた。郡良列が桐の印の大將旗を押し立て、その後控へた。治長は七隊長と共に毘沙門池の南に陣取り、治房と御宿政友が岡山に陣取つた。津川左近は金の千成瓢箪の馬じるしを押し立て、その後控へた。東軍は山野一面にふさがつて、兩翼が並び進んだ。前將軍は左軍を指揮し、將軍は右軍を統帥した。少將忠直・前田利光・本多忠朝・小笠原秀政等が先鋒であつた。前將軍は騎兵の斥候を召して敵の様子を問うた。斥候は答へて曰ふのに「陣は非常に堅固であります。その上秀賴が自身で出陣するのを待つてを待つて、鬪志頗る旺んであります」と。そこで人質の大野治德に手紙を書かせ、父治長に届けさせた。

語釋 期會(時を刻して集まること) ○毘沙門池(天王寺の附)

治長時巡視至茶臼山。幸村曰天下之事決於今日。公宜促主公出。主公出則軍氣自倍。川場軍亦當赴期。治長諾而反城。則秀賴已在櫻門。環緋甲穿錦袍。千槍十旌左右成列。鞍子馬而竝。如秀吉東征之儀。將士踴躍。俄而治德書至。曰「聞城中有約

内應者欲埃右府出舉事謹勿出治長危懼止秀頼而又往欲與幸村議東軍左先鋒已來逼勝永等以銃手相挑幸村止之登高而望曰中軍何不來也因召其子大助曰吾族在東治長常猜我我當死於此汝往侍右府以明我無貳心大助時年十六請止俱死幸村叱曰汝而死誰明我志盍殉右府乎大助攬涕而去敵兵益逼而中軍及川場兵皆不至幸村謂大谷吉之曰事皆睽矣是我死日已磨兵而進縱橫血戰敵衆交至幸村終死之年四十六吉之等皆死

訓讀 治長 時に巡視して茶臼山に至る。幸村曰く「天下の事今日に決す。公、宜しく主公を促し出づべし。主公出でば則ち軍氣自ら倍し、川場の軍も亦當に期に赴くべし」と。治長諾して城に反れば、則ち秀頼已に櫻門に在り。緋甲を擲し、錦袍を穿ち、千槍十旗左右に列を成し、馬に鞍して埃つ。秀吉東征の儀の如し。將士踴躍す。俄にして治徳の書至る。曰く「一聞、城中に内應を約する者あり。右府の出づるを俟つて事を擧げんと欲すと。謹んで出づる勿れ」と。治長危懼し、秀頼を止めて又往き、幸村と議せんと欲す。東軍の左先鋒已に來り逼る。勝永等銃手を以て相挑む。幸村之を止め、高きに登つて望んで曰く「中軍何ぞ來らざるや」と。因つて其子大助を召して曰く「吾が族東に在り。治長常に我を猜す。我れ當に此に死すべし。汝往いて右府に侍し、以て我が貳心無きを明にせよ」と。大助、時に年十六、止つて俱に死せんと請ふ。幸村叱して曰く「汝にして死せ

ば、誰か我が志を明にせん。蓋ど右府に殉せざるや」と。大助、溺を擲して去る。敵兵益々逼る。而るに中軍及び川場の兵皆至らず。幸村、大谷吉之に謂つて曰く「事皆睽く。是れ我が死日のみ」と。兵を麾いて進み、縱橫血戦す。敵衆交々至る。幸村終に之に死す。年四十六。吉之等皆死す。

通釋 その時、治長は戦線を巡視して茶臼山まで来た。幸村が曰ふには、「今日は天下分目の戦です。貴公は主公の出陣を催促されねばならぬ。主公が出陣されば軍氣は自然倍加し、川場の軍(明石守重の軍)も時刻を違へず馳せ付けるでせう」と。治長は承諾して城に戻ると、秀頼は最早櫻門まで出てゐた。身には緋緘の鎧をつけ、錦の直垂を着、千本の槍に十流の旗がその左右に列を成して、馬に鞍を置き出陣を待つてゐた。その有様は丁度秀吉が東征に出發する時の儀容と同じであつた。將士は皆足を踏みならして勇み立つた。すると程なく治徳の手紙が届いて来た。書中に曰ふには「聞けば城中に裏切の約束をした者が有るさうです。右府殿が出陣さるゝのを待つて事を擧げようと思つてゐるさうです。氣を付けてお出にならぬ様に」と。治長は非常に不安を感じ、秀頼を止めて置いて又出懸け、幸村と相談しようと思つた。所が東軍の左軍の先鋒が早くも押し寄せて来た。勝永等は銃手を出してあべこべに戦を挑んだ。幸村はそれを止め、高い所に上つて望んで曰ふには「中軍はどうして來ないのだらう」と。そこで倅の大助を呼びよせて曰ふには「わが一族は東國にゐる爲めに、治長はいつも己を疑つてゐる。己はこゝに討死することにする。お前は戻つて右府殿のおそばに仕へ、己に二心の無かつたことを明に致せ」と。大助は時に十六歳であつた。止まつて父と同じく討死したいと願つた。幸村は叱つて曰ふには「汝まで死んで終つたら誰が己の志を明にする者があらう。何故行つて右府殿に殉死を仕らぬか」と。大助は涙を押へて戻つて行つた。敵兵は益々迫つて来た。然るに中軍及び川場の隊がどちらも來ない。幸村は大

谷吉之に向つて曰ふには「何事も皆喰違ひになつた。今日は己の討死の日だ」と。兵を指揮して進み、縦横に必死の戦をした。敵の兵が後から後からとやつて来た。幸村は遂に討死した。年四十六であつた。吉之等も皆討死した。

川場軍(明石守重) ○東征之儀(北條征伐の時の儀式) ○吾族在(東信幸徳川に仕ふ。信幸は幸村の兄。)

御宿政友初仕越前、後歸大坂。於是遺書忠直曰「臣無善馬。君猶記舊情、則願賜一匹。以戰死。忠直予之以馬。政友騎焉。自岡山至幸村營、則戰已酣矣。曰「此亦不可死乎。躍馬冒陣而死。勝永與忠朝戰、擊大破之、斬忠朝。遂助永應與秀政戰、又斬之。明石守重以驍騎三百自川場赴約、與東將水野勝成遇、交綏而南。聞茶白山敗、則轉出生玉、與阿部氏高木氏戰、不利而走。東軍右先鋒逼岡山。治房擊破其先隊、轉逼將軍麾下。勝永、永應亦犯前將軍麾下。井伊氏藤堂氏橫擊勝永、勝永退。治長軍代進、要以銃手不能退。七隊長邀戰走之。」

御宿政友初め越前に仕へ、後に大坂に歸す。是に於て、書を忠直に遺つて曰く「臣善馬無し。君猶ほ舊情を記せば、則ち願はくは一匹を賜へ。以て戰死せん」と。忠直之に予ふるに馬を以てす。政友焉に騎し、岡山

より幸村の營に至れば、則ち戰ひに酣なり。曰く「此れ亦以て死す可からざらんや」と。馬を躍らせ陣を冒して死す。勝永、忠朝と戰ひ、擊つて大に之を破り、忠朝を斬る。遂に永應を助け、秀政と戰つて、又之を斬る。明石守重、驍騎三百を以て川場より約に赴き、東將水野勝成と遇ひ、交綏して南す。茶白山の敗を聞き、則ち轉じて生玉に出で、阿部氏・高木氏と戰ひ、利あらずして走る。東軍の右先鋒岡山に逼る。治房擊つて其の先隊を破り、轉じて將軍の麾下に逼る。勝永・永應も亦前將軍の麾下を犯す。井伊氏・藤堂氏、勝永を橫擊す。勝永退く。治長の軍代り進み、要するに銃手を以てす。過むる能はず。七隊長邀へ戦ひ之を走らす。

御宿政友は初め越前に仕へ、後大坂方になつたのである。今度の戦になつて手紙を忠直に送つて曰ふには「私には善い馬がありません。貴方が今にも古い好を忘れずにおられたならばどうぞ一頭お恵み下さい。その馬に乗つて戦死を遂げ度う存じます」と。忠直は彼に馬をやつた。政友はその馬に乗つて岡山から幸村の陣屋まで来て見ると戦は最早真最中であつた。そこで曰ふのに「こゝは討ち死をするに不足の無い所だ」と。馬を躍らし敵陣に切り込んで死んだ。勝永は忠朝と戰つて大勝を博し、忠朝を討ち取つた。それから永應を助けて秀政と戰ひ、秀政をも斬つた。明石守重は駿足の騎兵三百人を率ゐて川場から約束通りの行動(東軍の背後に出ること)に出で、東將の水野勝成と出會つたが相引になつて南に向つた。そこで茶白山の敗報を聞き、方向を變へて生玉に出で、阿部氏・高木氏の軍と戰つて負け戦になつて走つた。東軍の右先鋒が岡山に迫つて来た。治房はその先隊を打ち破り、方向を變へて將軍の旗下に迫つた。勝永・永應も、前將軍の旗下に攻め込んだ。井伊氏と藤堂氏が勝永の軍を横合ひから攻めた。勝永は退いた。治長の軍がそれに代つて進み、銃手を出して迎へ討たせた。けれども防ぎ止めることが出来なかつた。七隊長が迎へ戦つて漸く之を走らせた。

語釋 生玉(天王寺の北)

時日已過午。前將軍使人入城議和。曰「徙封大和弭兵。淀君乃使秀賴召還治長及速水守久。二人旋旗入城。諸軍望見相驚擾。曰「城中有變也。東軍乃齊進。城兵大潰。秀賴在櫻門。據胡床。迎見治長守久。大助亦至。叙幸村遺命。語未畢。潰兵大至。秀賴曰「我將出戰決死。守久止之曰「潰兵填路。不可出戰。徒死徒隸。手寧嬰壁固守。力窮而死。爲未晚也。秀賴從之。返坐于千席館。東軍鼓譟逼城。城中有應之者。焚大野治長第。京口門先破。我庖人大隅某謀反。縱火于庖。延及殿宇。城兵大擾。諸門皆破。

訓讀 時に日己に午を過ぐ。前將軍人をして城に入り和を議せしむ。曰く「封を大和に徙し兵を弭めん」と。淀君乃ち秀賴をして、治長及び速水守久を召し還さしむ。二人、旗を旋して城に入る。諸軍望み見て相驚擾して曰く「城中、變あるなり」と。東軍乃ち齊しく進む。城兵大に潰ゆ。秀賴櫻門に在り。胡床に據つて、治長・守久を迎へ見る。大助も亦至り幸村の遺命を叙ぶ。語未だ畢らざるに潰兵、大に至る。秀賴曰く「我れ將に出で戦ひ死を決せんとす」と。守久之を止めて曰く「潰兵路に填つ。出で戦ふ可からず。徒に徒隸の手に死せんよりは、寧ろ壁に嬰つて固守し、力窮つて死する、未だ晚からずと爲す」と。秀賴之に従ひ、返つて千席館に坐す。

東軍鼓譟して城に逼る。城中之に應ずる者あり。大野治長の第を焚く。京口門先づ破る。我が庖人大隅某謀反を謀り、火を庖に縱つ。延いて殿宇に及ぶ。城兵大に擾れ、諸門皆破る。

通釋 その時すでに十二時を過ぎてあつた。前將軍は人を城中にやつて和睦のことを相談させた。その言葉に曰ふには「大和に領地替へをすることにして戦を止めよう」と。そこで淀君は秀賴をして治長と速水守久を呼び返させた。この二人は旗の向きを變へて城に入つた。諸軍はそれを望み見て、皆々動揺して曰ふには「城中に何か變事があるのだ」と。東軍はそれに乘じて一齊に進んだ。城兵はひどく崩れた。秀賴は櫻門にあつた。胡床に腰かけて治長と守久とを見つけた。大助もやつて来て幸村の遺命を話した。その言葉のまだ終らぬ中に崩れ立つた兵隊がどしどしと逃げ込んで来た。秀賴が曰ふには「余は城を出て決死の戦をしようと思ふ」と。守久はそれを止めて曰ふには「散々に負けた兵隊共が路一杯になつてゐます。出で戦ふことは出来ませぬ。下司下郎の手にかつて詰らぬ死に態をなさるよりも、城壁を頼みにして嚴重に防禦し、力盡きて死んでも遅いことはありません」と。秀賴はその意見に従ひ、城内に戻つて千疊敷に坐つてゐた。東軍は大鼓を打ち鬨の聲をあげて城に押し寄せた。城中に内應するものがあつて、大野治長の住居を焼いた。京口門が最初に破れた。城中の料理人の大隅某が謀叛を企て、臺所に火をかけた。その火は本殿の方まで延びた。城兵は大騒ぎをなし、諸門は全部破れて終つた。

郡良列津川左近、擊馬表牙旗至千席館、駢跪稽首而言曰「臣等當死於城外。願所掌表幟先君所以傳於主公。五畿七道四海之外、苟有目者無不觀而識之。委之敵

人傳觀播弄將貽羞萬世矣。故謹奉還耳。良列將自殺。顧謂守久曰「去歲之役、吾獻策、欲襲敵前軍、縱火牙營、而公等弗聽。是終天之憾。事已至此、言之無益。」因卸甲、脫其母衣、置之床上、曰「是先君之賜。今而致之、吾事畢矣。」遂割腹死。其子兵藏又死。眞野宗信、中島氏種、相繼自殺。野野村吉安、將入內城、火熾不可前。乃自殺於二城橋上。堀田正高、纔得歸第、手刃妻子而出。遇加賀兵、入于廳、乃健闘而死。

訓讀 郡良列・津川左近、馬表、牙旗を撃つて、千席館に至り、駢跪稽首して言つて曰く「臣等當に城外に死すべし。顧ふに掌る所の表幟は、先君以て主公に傳ふる所、五畿七道、四海の外、苟も目有る者、觀て之を識らざるは無し。之を敵人に委せば、傳觀播弄將に羞を萬世に貽さんとす。故に謹んで奉還するのみ」と。良列將に自殺せんとす。顧みて守久に謂つて曰く「去歲の役に吾れ策を獻じ、敵の前軍を襲ひ、火を牙營に縱たんと欲す。而るに公等聽かず。是れ終天之憾なり。事已に此に至る。之を言ふも益無し」と。因つて甲を卸し、其の母衣を脱ぎ、之を床上に置いて曰く「是れ先君の賜。今にして之を致す。吾が事畢れり」と。遂に腹を割いて死す。其の子兵藏又死す。眞野宗信・中島氏種、相繼いで自殺す。野野村吉安、將に内城に入らんとす。火熾にして前む可からず。乃ち二城の橋上に自殺す。堀田正高、纔に第に歸るを得。妻子を手刃して出づ。加賀の兵、廳に侵入するに遇ひ、乃ち健闘して死す。

通釋 郡良列と津川左近は夫々鵜かつてある馬表と犬將旗を差して、千疊敷にやつて来て、そこに並んで膝をつき、拜伏して曰ふには「私共は城外にて討死致すべき所、考へて見るとお預かり申上げた馬表と旗は先君が主公に御傳へになつたものであります。日本全國五畿七道はおろか、海外に於ても、目のある限りの者は見て覺えて居らぬ者はありません。かゝるものを敵の手に渡し、それからそれへと見物にされ、いぢり廻されては、萬世の後までも恥を残すことになります。それ故、恭しく返上仕る次第で御座います」と。良列はそこで自殺を遂げようとした。守久の方に振り向いて曰ふには「去年の戦(冬の陣)に、俺は一策をおすゝめて、敵の前軍を襲ひ本營に火をつける様にと申上げたことがある。所が貴公はそれに耳を傾けなかつた。これが實に天地のあらん限りの思ひ残りだ。最早かくなつても言ふも益なきことだ」と。そこで鎧を外し、母衣を脱ぎ、それを床の上に置いて曰ふには「これは先君の下され物である。今御返し申上げる。私の爲すべきことは、最早これで終つた」と。そのまゝ、割腹して死んだ。その子の兵藏も死んだ。眞野宗信・中島氏種も續いて自殺した。野野村吉安は本丸に歸らうとした。火勢が猛烈で進むことができなかつた。二の丸の橋の上で自殺を遂げた。堀田正高は辛うじて自分の住居に歸ることが出来、妻子を手にかけて殺して出て行つた。丁度加賀の兵が本座敷に亂れ込む所に出會つたので、奮戦して討死した。

語釋 傳觀播弄(手から手へ傳へ) ○二城(丸)

秀頼奉淀君將自殺于天主閣。守久止之曰「勝敗常也。請暫待之。」乃自觀月樓上于東櫓、烟燄隨至。治長徙之園莊倉中、與守久勝永共護之。治長猶恃和議、致書兩將

軍曰群臣願自殺以全右府母子之命。因使人奉夫人德川氏送致東軍。東軍既取夫人使四將來監護倉外命片桐且元錄倉中人名欲出秀賴母子。四將發銃於倉中以示絕。倉中皆哭。秀賴悽然謂守久勝永曰吾爲太閤嫡子而至於此天也。乃自刃而薨。年二十三。勝永到之。淀君抱秀賴首悲號使氏家道喜殺己。於是道喜治長守久父子勝永兄弟津川左近竹田永應及堀伊藤成田森島加藤高橋土肥寺尾片岡垣原小室淺井中高等二十餘人皆殉之。治長重成渡部尙並有母與北畠氏湯川氏等婦女十人皆死。秀賴之未死真田大助隨其所之。衆諭之曰舊臣且有逃者子客將之子不必殉之。盡出走。對曰我父命我必與右府偕死。終就倉外藉藁而坐。不食者一晝夜。埃秀賴死乃自殺。

訓讀 秀賴、淀君に奉じ、將に天主閣に自殺せんとす。守久之を止めて曰く「勝敗は常なり。請ふ暫く之を待て」と。乃ち觀月樓より東櫓に上れば、烟燄隨ひ至る。治長、之を園莊の倉中に徙し、守久・勝永と、共に之を護る。治長猶ほ和議を待み、書を兩將軍に致して曰く「群臣願はくは自殺して以て右府母子の命を全うせん」と。因つて人をして夫人德川氏を奉じて東軍に送致せしむ。東軍既に夫人を取り、四將をして來つて倉外を監護せし

め、片桐且元に命じて倉中の人名を録し、衆婦女子を出さしめんと欲す。四將、銃を倉中に發し、以て絶を示す。倉中皆哭す。秀賴、悽然として、守久・勝永に謂つて曰く「吾れ太閤の嫡子たり。而して此に至る。天なり」と。乃ち自刃して薨す。年二十三。勝永之を到す。淀君、秀賴の首を抱いて悲號し、氏家道喜をして己を殺さしむ。是に於て、道喜・治長・守久父子・勝永兄弟・津川左近・竹田永應、及び堀・伊藤・成田・森島・加藤・高橋・土肥・寺尾・片岡・垣原・小室・淺井・中高等二十餘人、皆之に殉す。治長・重成・渡部尙、並に母有り。北畠氏・湯川氏等の婦女十人と皆死す。秀賴の未だ死せざるや、真田大助其の之く所に隨ふ。衆之に諭して曰く「舊臣すら且つ逃るゝ者有り。子は客將の子、必ずしも之に殉ぜざれ。盡ぞ出で走らざる」と。對へて曰く「我が父、我に命するに必ず右府と偕に死せよ」と。終に倉外に就き、藁を藉いて坐し、食はざること一晝夜、秀賴の死を埃ち乃ち自殺す。

通釋 秀賴は淀君を案内して、天主閣で自殺しようとした。守久はそれを止めて曰ふには「勝敗は常の習であります。どうぞ今暫らくお待ち下さい」と。さう言はれたので、觀月樓から東櫓に上ると、烟や焔が後を追ふ様に近づいて來た。治長は二人を庭の倉の中に移し、守久・勝永と共に護つてゐた。治長は今になつてもまだ和議を頼みにし、兩將軍に手紙を持たせて曰ふには「何卒私共家來達は自殺をさせて頂き、右府殿母子の命をお助け致し度い」と。因つて秀賴夫人德川氏を東軍に送り届けさせた。東軍は最早夫人を受取つて終つたので、四人の大將(井伊直孝・安藤重信・石川正次・本多正純)をよこして倉の外を警護させ、片桐且元に命じて倉中の人名を書き記させ、秀賴母子を出してやらうと思つた。所が警護に來た四將が倉の中に鐵砲を打ち込み絶交の意を示したので、倉中の者は皆口々に泣き悲しんだ。秀賴はいかにも心悲しき様子にて守久・勝永に向つて曰ふには

「余は太閤の嫡男の身である。かゝる末路に落ちたのも天命である」と。さう言つて自刃して果てた。年二十三。勝永が介錯を承つて首を落した。淀君は打ち落された秀頼の首を抱きかゝへ、聲を絞つて哀泣し乍ら、氏家道喜に自分を殺させた。道喜・治長・守久父子・勝永兄弟・津川左近・竹田永應、及び堀・伊藤・成田・森島・加藤・高橋・土肥・寺尾・片岡・垣原・小室・浅井・中等二十餘人が皆殉死をした。治長・重成・渡部尚は共に母親がゐた。これ等の婦人は北畠氏・湯川氏等の婦人十人と共に皆死んだ。秀頼が未だ死なぬ前、眞田大助はどこでも秀頼の行く所について行つた。皆が彼に諭して曰ふには「古い家來ですら逃げたものがある。貴公は客分の大将の子だから、必ずしも殉死をすることは無い。早く出て逃げたら如何だ」と。大助は答へて曰ふのに「私の父が、必ず右府殿と一緒に死ぬ様と命ぜられたのです」と。いよいよ秀頼が倉の中に入つてからは倉の外に行つて藁を敷いて坐り、一晝夜の間物を食はず、秀頼の死んだのを待つて自殺を遂げた。

東軍諸將爭赴牙營賀戰捷。小出三尹秀正子也。時侍前將軍側。前將軍指城中火、謂之曰「如何」。三尹警然俛首曰「臣不忍視」。諸將或有愧色。秀頼有一男一女。皆庶出。未知所在。東軍懸金大索之。男名國松。甫八歲。與其保田中某匿伏見農人橋畔。或睹其美質也。捕而獻之。斬于六條磧。田中持之號慟。竟殉之。京極氏捕獻其女。蜂須賀氏捕長曾我部盛親于男山。受命縛之。二條城西門數日。斬于磧。徇而梟之。大坂

市尹水原石見匿二條城側。藤堂高虎捕之。石見殺三人而死。渡部尚與治長約爲後圖。走至近江。聞秀頼薨。乃自殺。治長任子後皆賜死。治長弟治氏初與兄不協。往仕前將軍。至是自殺。使人以暴疾聞。治氏弟道見磔于界浦。治氏兄治房與明石守重仙石宗也。逃去。伊東長次青木一重竝被赦。眞田幸村妻在紀伊。爲所捕獻。亦被赦。削髮爲尼。其餘大坂遺臣七十二人。卒六百人。諸出質及通款城中者皆被誅夷。增田長盛以子故賜死配所。

訓讀 東軍の諸將争つて牙營に赴き、戰捷を賀す。小出三尹は秀正の子なり。時に前將軍の側に侍す。前將軍城中の火を指し、之に謂つて曰く「如何」と。三尹、警然首を俛して曰く「臣視るに忍びず」と。諸將或は愧色有り。秀頼一男一女有り。皆庶出なり。未だ所在を知らず。東軍、金を懸けて大に之を索む。男を國松と名づく。甫めて八歳、其の保田中某と伏見農人橋の畔に匿る。或ひと其の美質を踏るや、捕へて之を獻す。六條磧に斬る。田中、之を持して號慟し、竟に之に殉す。京極氏、捕へて其の女を獻す。蜂須賀氏、長曾我部盛親を男山に捕へ、命を受けて之を二條城の西門に縛すること數日。磧に斬り、徇へて之を梟す。大坂の市尹水原石見、二條城の側に匿る。藤堂高虎之を捕ふ。石見三人を殺して死す。渡部尚、治長と後圖を爲さんと約し、走つて近江に至る。秀頼薨すと聞き、乃ち自殺す。治長の任子は後皆死を賜ふ。治長の弟治氏、初め兄と協はず。往い

て前將軍に仕ふ。是に至つて自殺し、人をして暴疾を以て聞せしむ。治氏の弟道見は界浦に磔せらる。治氏の兄治房は、明石守重・仙石宗也と逃れ去る。伊東長次・青木一重は竝に赦さる。真田幸村の妻紀伊に在り。捕虜する所と爲る。亦赦され、髪を削つて尼と爲る。其の餘の大坂の遺臣七十二人、卒六百人、諸々の出で、質となり、及び款を城中に通ぜし者は皆誅夷せらる。増田長盛は子の故を以て死を配所に賜ふ。

通釋 東軍の諸將は争つて本營に出かけて、捷戦の祝辭を述べた。小出三尹は秀正(秀頼の傳たりし人)の子である。その時、前將軍の側に侍つてゐた。前將軍は城中の火を指し三尹に向つて曰ふには「どういふ氣持ぢや」と。三尹はちらりと一目見やつたゞけで顔を伏して曰ふには「私は見て居るに耐へませぬ」と。諸將の中には羞恥の色を浮べる者もあつた。秀頼には一男一女があつた。共に妾腹であるが、その行衛が分らなかつた。東軍は懸賞金付きで大に探した。男の子は國松といふ名であつた。漸く八歳で、守役の田中某と共に、伏見の農人橋の附近に隠れてゐた。或る者が、その優れた生れ付きを目にして、捕へて差し出した。六條河原で斬つた。田中は亡骸に縋つて聲を放つて悲しみなげき、そのまゝ、殉死を遂げた。京極氏は娘の方を捕へて差し出した。蜂須賀氏は長曾我部盛親を男山で捕へ、命を受けて彼を二條城の西門に數日の間縛つて置いた。それから河原で首を落して見せしめにした上に獄門にかけた。大坂の町奉行水原石見は二條城のそばに隠れて居つた。藤堂高虎が捕へようとした。石見は三人を殺して死んだ。渡部尙は治長と後日の企てを約束し、近江まで逃げて行つた。秀頼が死んだと聞いて自殺した。治長の人質は後に皆自殺を命ぜられた。治長の弟の治氏は以前兄と不仲であつた。その爲め前將軍の方に仕へてゐた。それもこの時自殺を遂げ、人をやつて急病の爲めだと申させた。治氏の弟の道見は界浦で磔刑になつた。治氏の兄の治房は明石守重・仙石宗也と共に逃げ去つた。伊東長次・

青木一重は共に討たれた。真田幸村の妻は紀伊に居つた。人に捕へられて差し出された。許されて髪を剃り尼となつた。その他の大坂の遺臣七十二人と兵卒六百人、及び城中に好を通じた者は皆誅殺された。増田長盛はその子の盛次が大坂に味方した理由に依つて、配所高野山に於て自殺を仰せ付かつた。

餘論 愧色(舊君に背いて徳川氏に附) ○其女(秀頼の女は時に七歳、秀頼の夫人天樹院をして子養せしめたといふ。又一説) ○任子(入質と。治徳をさす)

兩將軍收城内、燼餘、得金二萬八千枚、銀二十四萬兩、以金馬各二賜井伊直孝、藤堂高虎、以賞其功。爲片桐且元置邸、駿府徙居焉。且元愧慙成疾、未至而卒。是役也、加藤嘉明・黒田長政皆請而從。木下利房立功、自贖得復其邑。松下重綱亦以功得益其邑。重綱祖父之綱、即秀吉微時所仕者也。之綱死、子吉綱嗣。關原之役、屬徳川氏。其子爲重綱。至是再益邑、至二萬石。

訓讀 兩將軍、城内の燼餘を收め、金二萬八千枚・銀二十四萬兩を得、金馬各二を以て井伊直孝・藤堂高虎に賜ひ以て其の功を賞す。片桐且元の爲めに邸を駿府に置き、徙り居らしむ。且元、愧慙疾を成し、未だ至らずして卒す。是の役に、加藤嘉明・黒田長政皆請うて從ふ。木下利房、功を立て、自ら贖ひ、其の邑を復するを得たり。松下重綱も亦、功を以て其の邑を益すを得たり。重綱の祖父之綱は即ち秀吉の、微なりし時仕へし所の者

なり。之綱死し、子吉綱嗣ぐ、關原の役、徳川氏に屬す。其の子を重綱と爲す。是に至つて、再び邑を益し、二萬石に至る。

通釋 兩將軍は城内の燃え残りを整理し、金二萬八千枚、銀二十四萬兩を得た。その他例の金の法馬二つ宛を井伊直孝と藤堂高虎とに下賜して、その功を賞した。片桐且元の爲めに邸を駿府に設けてそこへ移り住むやうにさせた。且元は心に深く恥ぢて悶々の餘、病を起し、そこに到着せぬ中に死んだ。此の夏の陣に、加藤嘉明・黒田長政は共に願ひ出て従軍した。木下利房は功を立て、罪の償ひをなし、その領地を取り戻すことが出来た。松下重綱も手柄に依つて領地を増すことが出来た。重綱の祖父の之綱は、即ち秀吉が嘗て微賤であつた時に仕へた人である。之綱が死んで子吉綱が嗣いだ。關原の役に徳川氏に味方した。その子は重綱といつた。此の度の戦に依つて再び加増されて二萬石になつた。

語釋 木下利房(北廳の兄、家定の次男、關原の役に西軍に屬し、大敗後封を奪はれた。この時に至つてそれを復したのである。)

凡、前後之役、豊臣氏、舊臣、從攻、城者甚衆。獨、福島正則不從。二年、前將軍薨。五年、正則褫封、放于信濃。時、正則在江戶、邸、將軍在京師。使使者來就第傳命。正則默然久之。曰、使前將軍在、則吾將一言焉。今復何言、乃起入内。内中騷擾。久之、挈其兩女子出、流涕謂使者曰、吾欲與足下決死也。將先殺女兒。終不忍加刃。當甘心受命。因赴

配所。將軍又使使率山陽・南海諸侯、收其封安藝・備後。其老臣留守廣島城。不肯奉命。埃正則書至、乃致城而去。其弟正頼爲大和・宇多城主。先四年、褫封。寛永八年、故加藤清正、子忠廣亦奪其封肥後、放于出羽。十四年、故小西行長遺臣、起兵肥前、伏誅。

訓讀 凡そ前後の役、豊臣氏の舊臣の從つて城を攻むる者甚だ衆し。獨り福島正則從はず。二年、前將軍薨す。五年、正則封を褫はれ、信濃に放たる。時に正則江戸の邸に在り。將軍京師に在り。使者をして來つて第に就いて命を傳へしむ。正則默然たること之れを久しうして曰く、「前將軍をして在らしめば、則ち吾れ將に一言せんとす。今復何をか言はん」と。乃ち起つて内に入る。内中騷擾す。之れを久しうして其の兩女子を挈げて出で、流涕して使者に謂つて曰く、「吾れ足下と死を決せんと欲するや、將に先づ女兒を殺さんとす。終に刃を加ふるに忍びず。當に甘心命を受くべし」と。因つて配所に赴く。將軍又使をして山陽・南海の諸侯を率ゐて、其の封安藝・備後を收めしむ。其の老臣、廣島城に留守し、肯て命を奉ぜず。正則の書至るを埃ち、乃ち城を致して去る。其の弟、正頼、大和の宇多城主たり。先だつこと四年、封を褫はる。寛永八年、故加藤清正の子忠廣も亦其の封肥後を奪はれ、出羽に放たる。十四年、故小西行長の遺臣、兵を肥前に起し誅に伏す。

通釋 一體この前後二度の戦に、豊臣氏の舊臣で徳川氏に味方して大坂を攻めた者は非常な多數であつた。唯だ福島正則だけは従はなかつた。二年、前將軍が薨去した。五年、正則は領地お取上になつて信濃に追放され

た。その時正則は江戸の邸にゐた。將軍は京都に居た。そして將軍は使者を彼の邸によこして命令を傳へさせた。正則は暫く黙つてゐたが、曰ふには「前將軍が生きてゐられたら、私は一言したいことがあつた。けれ共今となつては言ふも益がない」と。さう言つて起ち上つて内に入つた。所が奥に物騒がしい音がした。暫くして正則は二人の娘を引いて出て来て、使者に向つて曰ふには「私は貴殿と決闘せんとの存念で、先づ娘を殺さうと致したが、いかにも刃を加へるに忍びない。この上は甘んじて命をお受け申す」と。斯くて配所へ行つた。將軍は又使をやり、山陽・南海の諸大名を率ゐて、その領地の安藝・備後を取り上げさせた。正則の家老は廣島城を留守して命に従はうとしなかつた。正則の手紙が届いたので、城を明け渡して立ち去つた。その弟の正頼は宇多の城主であつた。これより四年前に既に領地を取上げられた。寛永八年、故加藤清正の子の忠廣も領地の肥後を奪はれて出羽に追放された。十四年には故小西行長の遺臣が肥前に兵を起して誅せられた。(かくて豊臣氏關係の舊臣は全部片附いたわけである。)

豊臣氏既亡、有令毀豊國廟、獨存東山、方廣寺及高臺寺。高臺者北廳所建、以祈秀吉、冥福也。加藤・福島氏以其親屬、助役爲秀吉、立一小祠。秀吉在時、雖有所嬖、皆置之別宮、獨與北廳同居。北廳佐秀吉、定天下、多所裨益。常戒之曰「願良人勿忘藁席瓦缸時也」。及秀吉薨、則削髮、視秀賴、猶其自出、使親屬諸將輔翼之、未嘗與關東開像云。

訓讀 豊臣氏既に亡び、令有つて豊國廟を毀ち、獨り東山の方廣寺及び高臺寺を存するのみ。高臺は、北廳の建て、以て秀吉の冥福を祈りし所なり。加藤・福島氏其の親屬を以て役を助け、秀吉の爲めに一小祠を立つ。秀吉在るの時、嬖する所有りと雖も、皆之を別宮に置き、獨り北廳と同居す。北廳、秀吉を佐けて天下を定め、裨益する所多し。常に之を戒めて曰く「願はくは良人、藁席瓦缸の時を忘る、勿れ」と。秀吉薨するに及び、則ち髮を削る。秀賴を視ること猶其の自出のごとく、親屬諸將をして之を輔翼せしめ、未だ嘗て關東と鬻を開かず。北廳、諸將と前後皆没して秀賴孤立し、以て亡ぶるに至る。高臺の祠、今に至つて猶ほ秀吉夫妻の像ありと云ふ。

通釋 かくて豊臣氏は亡んだが、聽て命令があつて豊國神社を取りこはし、唯だ東山の方廣寺と、高臺寺とだけを残しておいた。高臺寺は秀吉の冥福を祈るために北廳が建てた寺である。加藤・福島兩氏が親戚關係からその工事を助けて、秀吉の爲めに小さな祠を一つ建てた。秀吉は在世時代に氣に入りの女があつても皆、別の御殿に置き、唯だ北廳だけと同居してゐた。北廳は秀吉が天下を平定するに就て内助の功が多かつた。いつも秀吉を戒めて曰ふには「どうぞ良人、あの藁を敷いて瓦器で三々九度をした時分の事を忘れないで下さい」と。秀吉が亡くなると髮を剃り落した。秀賴に對しては全く己れの腹を痛めた子のやうに思ひ、縁續きの諸將をして彼をかばひ助けさせ、一度も關東方と氣拙い間柄になつたことが無かつた。その北廳も諸將と相前

後して皆死んで秀頼は孤立になつて終ひ、とうく滅亡の運命に立ち至つたのである。高臺寺の祠には、今日でもまだ秀吉夫妻の像が有るといふことである。

叙説 本論は大閻が早く天下を得たのは早く失ふ所以であることを論じてある。

外史氏曰、余遊東山、謁太閻像於高臺之祠。祠門蓋以征韓艦材造之云。嘗讀韓人所紀曰、明遣使者窺太閻相貌、矮而黑、無他異。唯見其目光炯炯射人、不可仰視。今觀其像、如信然者。嗚呼、使太閻生於女直、鞞鞞間、而假之以年、則烏知覆朱明之國者、不待覺羅氏哉。蓋其爲人、酷肖秦皇漢武、而雄才大略、遠出其右。

訓讀 外史氏曰く、余れ東山に遊び、太閻の像に高臺の祠に謁す。祠門は蓋し征韓の艦材を以て之を造ると云ふ。嘗て韓人の紀する所を讀む。曰く「明、使者を遣はして太閻の相貌を窺はしむ。矮にして黒く、他の異なる無し。唯だ其の目光炯炯として人を射、仰ぎ視る可からざるを見る」と。今其の像を観るに、信に然る者の如し。嗚呼、太閻をして女直・鞞鞞の間に生れしめ、而して之に假すに年を以てせば、則ち烏んぞ朱明の國を覆へず者、覺羅氏を待たざるを知らんや。蓋し其の人と爲り、酷だ秦皇・漢武に肖て、雄才大略は遠く其の右に出づ。

通釋 外史氏が曰ふのに、私は東山に遊んで、その高臺寺に於て太閻の像を見たことがある。この祠の門は何んでも、征韓當時の軍艦の古材で造つたのだといふことだ。私は嘗て韓人の書いたものを讀んだことがある。それに次のやうに曰つてある。明が使者をやつて太閻の容貌姿勢を探らせた。所が丈は低く、黒く、別に人に異つた所は無かつた。唯だその眼光が鋭く人を射すやうで、仰いで見ることが出来なかつた」と。今自分もその像を見ると、全くさうであつたやうに思はれる。あ、若しこの太閻をして女直・鞞鞞の種族の中に生れさせ、且つ相當の長壽を保たせたならば、明の國を亡ぼすに愛親覺羅氏の手を待たなかつたかも知れぬと考へる。思ふに彼の性格は非常に秦の始皇帝と漢の武帝に似て居り、そしてその雄才大略は遙かにこの二者を凌いでゐる。

語釋 韓人所紀(鮮人柳成龍の懲) ○炯炯(光り輝く) ○女直・鞞鞞(共に北狄の種族名、今) ○朱明(明室の姓は朱氏なるが) ○覺羅氏(清の太祖、姓は愛親覺羅、名は奴兒哈赤(ヌルハチ)といふ) ○雄才大略(雄大な謀略)

夫漢武乘豐富馭區宇、不論可也。秦皇挾六世之積威、蹶衰殘之六國、孰與太閻之徒手奮起、制服群雄。然過用其民力、以取絕嗣之禍者、則與秦等。彼藉累葉之烈、猶且不免。況以匹夫暴起者乎。然以匹夫得天下、非如承祖業而重失之者。土地非其固有、故不惜分其利也。人民非其固畜、故不愛用其力也。夫其不愛民力、固足以招危亡、而不惜地利、又不可以計久安。此二者其勢相持、而其禍相因也。

訓讀 夫れ漢武は豊富に乗じて區宇を馭す。論ぜずして可なり。秦皇は六世の積威を挾んで、衰殘の六國を蹶す。太閤の徒手奮起して群雄を制服するに孰與れぞや。然れども其の民力を過用して、以て絶嗣の禍を取る者は、則ち秦と等し。彼れ累葉の烈を藉つて、猶ほ且つ免れず。況んや匹夫を以て暴に起る者をや。然れども匹夫を以て天下を得るは、祖業を承けて之を失ふを重んずる者の如きに非ず。土地は其の固有に非ず。故に其の利を分つを惜まざるなり。人民は其の固畜に非ず。故に其の力を用ふるを愛しまざるなり。夫れ、其の民力を愛まざる、固より以て危亡を招くに足る。而して地利を惜まざる、又以て久安を計る可からず。此の二者其の勢相持し、而して其の禍相因るなり。

通釋 元來、漢の武帝は文・景二帝の豊富な富を受けつぎ、それを利用して天下を思ふまゝに制馭したのである。その勞はそれ程でもなく今これを論ずるにも當らない。秦の始皇帝はそれ以前六代の間に積まれた威力を、そのまゝ、恃んで弱り果てた六國を亡ぼしたのである。太閤が無一物から舊ひ起つて、群雄を制服従したのに比べると、どんなものぢや、迎も比べものにはならぬ。けれども太閤は民力を使ひ過ぎて後目を絶やすやうな禍に逢着したが、その點は秦と同じである。彼れ始皇は代々の威烈を利用したのであるが、それでも尙ほこの禍を免れなかつたのである。まして地位なき一介の男の身から成り上つた者に於てをやである。けれども、匹夫の身からして天下を得たのであるから、先祖代々の事業を承けついで、少しでも失ふまいと大事にしてゐる者とは大變な違ひである。土地は彼が元來有してゐたものではない。だからその利益を人に分ち與へることはちつとも惜しまない。又人民は元來彼が養つてゐたものではない。だから人民の力を愛惜するといふ様な心が無い。一體民力を愛惜しないだけでも、危機滅亡を招くに充分である。それを又領土の利益といふものをも惜しまないでゐる。

たのでは、到底久しい間の安泰を計ることは出来ないものである。此の民力と地利の二者は、その勢互に相持ち合つてゐる關係にあるもので、それから起る禍も互に相原因となるものである。

語釋 區宇(字内の) ○六世(孝公・惠文王・武王・昭襄王・孝文王・莊襄王) ○六國(楚・燕・齊・趙・韓・魏)

餘論 以上第一段、太閤の雄才大略を述べて、民力地利の忽にすべからざることを論ず。

然其初之所以速得天下者、無所愛惜也。譬如閭巷之人、博而獲大勝、使其不勝一簣人耳。苟勝矣、乃大揮霍之、招其朋類、醉飽喧呼、務取快一時。唯然故暴富而人怨。太閤起人奴而主大國、固已踰其所望。乃遭變故、投機赴會、動得如意。皆初念之所不至。而四顧當時將帥、皆其儕輩、或其所不敢比肩。一旦立其上、而常恐其不服己也。以爲吾由微賤而得司利權、苟自封殖而不分於人、人將吾爭、而吾志不可速成也。故割膏腴、頒金帛、動舉數州之地、以賞戰功。視之不啻如糞土。彼其鼓舞奔走一世之豪俊、以驟獲志於天下者、用此術也。

訓讀 然れども其の初の速に天下を得る所以は、愛惜する所無ければなり。譬へば閭巷の人、博して大勝を獲るが如し。其をして勝たざらしめば、一簣人のみ。苟も勝たんか、乃ち大に之を揮霍し、其の朋類を招き、醉

飽嗔呼、務めて快を一時に取る。唯だ然り。故に暴に富んで人怨みず。太閤、人奴より起つて大國に主たる、固より已に其の望む所に踰ゆ。乃ち變故に遭遇し、機に投じ會に赴き、動けば意の如きを得。皆初念の至らざる所。而して當時の將帥を四顧するに、皆其の儕輩、或は其の敢て比肩せざる所なり。一旦其の上に立ちては、常に其の己に服せざるを恐るゝなり。以爲へらく、吾れ微賤よりして利權を司るを得たり。苟も自ら封殖して人に分たざれば、人將に吾と争はんとす。而して吾が志速に成る可からざるなりと。故に膏腴を割き、金帛を頒ち、動もすれば、數州の地を擧げて以て戦功を賞す。之を視ること當に糞土の如きのみならず。彼れ其れ一世の豪俊を鼓舞奔走せしめ、以て驟に志を天下に獲し者は、此術を用ひたればなり。

通釋 併し乍ら彼が初め速に天下を取れた理由は、彼が民力と地利とを惜しまなかつたが爲めである。譬へて見れば恰度市井の人が、賭博をして大勝を得たやうなものである。若し勝なかつたなら一箇の貧乏人に過ぎない。若し勝たうものならそれこそ、大に儲けたものを撒き散らして友達を呼び集め、した、か飲み食ひ、わめき騒いで、ひたすら一時の愉快を食るのである。唯だそれだけのことである。だから急に財産家になつても人が別に怨みもせぬのである。太閤は人の召使から身を起して大國の主となつた時、それだけでも彼れとしては當初の望みを越えてゐたのである。それが突然の變事に逢ひ、(信長弒逆)その機會を巧みに利用し、一舉手一投足すべて意の如くなることを得た。これ等は皆當初思ひもよらなかつたことなのである。そして當時の大將共を見廻して見ると、何れも自分の同輩か、然らずんば肩を並べることの出来なかつた目上の者であつた。されば一度彼等の上に立つ上からは、常に彼らが自分に服従せぬのではあるまいかと心配してゐた。そして自分で考へるには、自分は微賤の者から、利益權力を自由にすることが出来る様な自分になつた。もし自分だけ懐を肥して人に分

配しなかつたならば、人は必ず嫉妬を起して自分と争ひを起すやうになるだらう。さうなると自分の志を達成するわけにはゆかなくなると。それ故に、肥えた土地や金帛を分ち與へ、ともすれば數ヶ國の地を與へて戦功を賞したりした。そしてそれを視ること殆んど糞土ほどにも思はなかつたのである。彼が一世の豪傑英俊を鼓舞奔走させて、非常な速さで天下に志を遂げることの出来たのは、全く此の術を用ひたのである。

語釋 揮霍(俗意に、輕卒に財) ○此術(割膏腴ニ云々を)

餘論 以上第二段、太閤の地利を惜しまなかつたことを叙ぶ。

然吾糞土授之、彼亦糞土受之。未嘗德我、而以爲當然。彼之所求無窮、而我之所有有盡。以有盡供無窮、其勢不得取之於海外、以塞之。於是七道之民裹其未愈之瘡、以趨不可知之地、連年無所成、而其力竭矣。而樞肉未冷、群雄各有自立之心。蓋無足怪者。故太閤之愛民力、由其不惜地利、而其禍遂至於此。皆其自取爾。

訓讀 然れども吾れ糞土として之を授け、彼も亦糞土として之を受く。未だ嘗て我を德とせず。而して以て當然と爲す。彼の求むる所窮なくして、我の有する所盡くるあり。盡くるあるを以て、窮なきに供す。其の勢之を海外に取つて以て之を塞がざるを得ず。是に於て、七道の民其の未だ愈えざるの瘡を裹んで、以て知る可からざるの地に趨き、連年成る所なくして其の力竭く。而して樞肉未だ冷ならざるに、群雄各自立の心あり。

蓋し怪むに足る者なし。故に太閤の民力を愛まざるは、其の地利を惜まざるに由る。而して其の禍遂に此に至る。皆其の自ら取れるのみ。

通釋 けれども、こちらが糞土同様の考へで與へるならば、向ふでも糞土同様の考へで受けるものである。別段これを有難がるものでもない。それ所か却つて當然のことのやうに思ふものである。されば彼等の求める所は限りないが、こちらの有する所には限りがある。限りあるもので、限りない慾望を満足させようとすることになる。必然の勢として、どうしても日本國外から取つて來てそれに宛てがはねばならない。そこで七道の民はまた癒り切らぬ傷を布に包んで、未知不案内の土地に遠征し、連年功果の無い中にその力を盡し果した。そして太閤の亡骸がまだ冷え切らぬ内に、群雄は各、自立の志を抱いて豊臣氏に背き去るに至つた。思ふにこれは少しも不思議なことではない。故に考へて見ると、太閤が民力を愛惜せず朝鮮征伐などを行つたのは、元來彼が地利を愛惜しなかつた爲め、他に支給するに不足を感じて起つたことである。そしてその結果としてかゝる禍を招くに至つた。皆自分の所爲である。

餘論 以上第三段、太閤の民力を惜しまなかつたことを叙ぶ。

雖然、以太閤之雄才大略、八歲定六十餘國。則以其餘力逞之海外、固其宜也。豈唯太閤爲然。當時猛將謀夫、雄傑之士、布滿天下。天下已集、而其桀驁巧狙、喜事好功之心、猶未已也。譬之鷲鷹俊狗、其噬嚙搏擊之力、用而有餘、則必至逼人。故朝鮮之役、是令天下群雄肆其噬嚙搏擊、以殺其力者也。然徒殺其力、而使其無所獲、則彼將不復我之馴服、而反施其噬嚙搏擊於我。嗚呼、養之而不得其術、安往而可也。能飽之而不能節之、能發縱指示之而不能收而寧之。故太閤之於群雄、苟制服之一時耳。豈長久之計哉。其所以速得天下、乃其所以速失之也。梁武帝有言、自吾得之、自吾失之、無復所恨。則太閤其亦無所恨耶。

訓讀 然りと雖も、太閤雄才大略を以て、八歳にして六十餘國を定む。則ち其の餘力を以て之を海外に逞しうするは固より其れ宜なり。豈に唯だ太閤のみ然りと爲さんや。當時、猛將謀夫、雄傑の士、天下に布滿す。天下已に集つて、其の桀驁巧狙事を喜み功を好むの心、猶ほ未だ已まず。之を鷲鷹俊狗に譬へんに、其の噬嚙搏擊の力、用ひて餘有れば、則ち必ず人に逼るに至る。故に朝鮮の役は、是れ天下の群雄をして其の噬嚙搏擊を肆にして以て其の力を殺がしむる者なり。然れども徒に其の力を殺いで、其をして獲る所無からしめば、則ち彼れ將に復我に之れ馴服せずして、而して反つて其の噬嚙搏擊を我に施さんとす。嗚呼、之を養つて其の術を得ず。安に往いて可ならんや。能く之を飽かしめて、之を節する能はず。能く之を發縱指示して、收めて之を寧んずる能はず。故に太閤の群雄に於けるは、苟に之を一時に制服するのみ。豈に長久之計ならんや。其の速に天下を得たる所以は、乃ち其の速に之を失ふ所以なり。梁の武帝言へる有り「吾より之を得て、吾より之を失ふ。

日本外史新釋 卷十八

德川氏正記

德川氏一

我^ガ德川氏^ハ出^ツ於^ル新田義重^{ヨリ}。義重者清和天皇八世裔也。天皇之孫經基始賜^メ姓源氏^ト。降^ツ爲^ル武臣^ト。其玄孫義家。義家子義國。居^リ上野食新田足利諸邑^ヲ。生^ム義重及義康。義重^ハ氏^{トシ}新田義康氏^ハ足利共助^ニ宗子源賴朝^ヲ以^テ王命^ヲ討^ツ滅^ス平氏。賴朝爲^リ征夷大將軍^ト開^キ府^ヲ關東^ニ令^ム義重守^ラ寺尾城。義重有^リ五男。其第四曰^フ義季。義季食^ム德川邑。因^テ氏^{トス}焉。稱^ス德川四郎^ト。義季生^ム賴氏。賴氏叙^レ從五位下^ニ任^ニ參河守^ト。食^ム世良田。因^テ又^テ號^ス世良田氏^ト。

訓讀

我が德川氏は新田義重より出づ。義重は、清和天皇八世の裔なり。天皇の孫經基、始めて姓を源氏と賜

ひ、降つて武臣と爲る。其の玄孫は義家。義家の子義國、上野に居り、新田・足利の諸邑を食む。義重及び義康を生む。義重は新田を氏とし、義康は足利を氏とす。共に宗子源頼朝を助け、王命を以て平氏を討滅す。頼朝征夷大將軍と爲り、府を關東に開き、義重をして寺尾城を守らしむ。義重に五男あり。其の第四を義季と曰ふ。義季徳川の邑を食み、因つて氏とす。徳川四郎と稱す。義季、頼氏を生む。頼氏、從五位下に叙せられ、參河守に任ぜられ、世良田を食む。因つて又世良田氏と號す。

通釋 我が徳川氏は新田義重から出てゐる。この義重は清和天皇の八世の子孫である。天皇の御孫の經基が始めて源氏といふ姓を賜はつて、武臣の列に降つた。この經基の玄孫は義家で、義家の子の義國は上野に居つて、新田・足利の諸邑を有してゐた。義國は義重と義康を生んだ。義重は新田を姓とし、義康は足利を姓とした。共に本家の跡目たる源頼朝を助け、朝廷の命令によつて平氏を討ちこした。頼朝は征夷大將軍と爲つて、關東に幕府を開き、新田義重に寺尾城を守らせた。この義重に五人の男子があつた。その第四子を義季といつた。義季は徳川の村を領し、その縁で徳川を姓とした。そして徳川四郎と稱してゐた。義季が頼氏を生んだ。頼氏は從五位下に叙せられ、參河守に任ぜられ、世良田を領した。その爲め世良田氏とも號した。

語釋 我(は徳川氏を親しむ辭。山陽先生) ○八世(貞純親王・經基・滿仲・頼) ○新田・足利・寺尾・徳川・世良田(野)

頼氏生教氏、教氏生家持、家持生滿義、滿義生政義、政義生親季。當是時、宗子新田義貞奉後醍醐帝詔旨、討北條氏于鎌倉。滿義助之、自稻村崎入擊破賊將安東昌貫。北條氏既滅、足利尊氏反、天下武人皆黨之。獨新田氏舉族勤王。官軍數失利、帝

播遷南山。義貞戰沒、宗黨多死。王事帝崩、遺詔益眷新田氏。以圖恢復。後村上帝嗣立。義貞子義興、義宗、舉義上野。信濃間不克死。政義父子蓋殉之矣。

訓讀 頼氏教氏を生み、教氏家持を生み、家持滿義を生み、滿義政義を生み、政義親季を生む。是の時に當り、宗子新田義貞、御醍醐帝の詔旨を奉じて、北條氏を鎌倉に討つ。滿義之を助け、稻村崎より入つて賊將安東昌貫を撃ち破る。北條氏既に滅ぶ。足利尊氏反し、天下の武人、皆之に黨す。獨り新田氏は舉族王に勤む。官軍數々利を失ひ、帝、南山に播遷す。義貞戰沒し、宗黨多く王事に死す。帝、崩す。遺詔して、益々新田氏を眷し、以て恢復を圖らしむ。後村上帝嗣いで立つ。義貞の子義興・義宗、義を上野・信濃の間に擧げ、克たずして死す。政義父子蓋し之に殉す。

通釋 頼氏は教氏を生み、教氏は家持を生み、家持は滿義を生み、滿義は政義を生み、政義は親季を生んだ。この當時、本家の新田義貞が後醍醐天皇の詔を戴いて北條氏を鎌倉に於て討つた。滿義はそれを助け、稻村ヶ崎から鎌倉に攻め込んで、賊將安東昌貫を打ち敗つた。かくて北條氏は亡んで終つた。足利尊氏が謀叛をして、天下の武家は悉く彼に組した。新田氏のみは一族全部勤王であつた。官軍は屢々敗戦して、後醍醐天皇は谷野に還幸せられた。義貞は戦死し、一族一黨も大部分勤王の爲めに討ち死した。天皇が崩御遊ばされた。その時御遺言の詔書によつて益々新田氏を信任せられ、帝業の恢復を圖らしめられた。後村上帝が次にお立ちになつた。義貞の子の義興と義宗とが上野・信濃の邊に義兵をあげたが、戦敗れて討ち死した。政義父子(政義と親季)が之に殉じたといふことである。

尊氏、孫義滿爲征夷大將軍、開府京師、以族氏滿管領關東。親季子曰有親、爲右京亮。元中中、同宗族從義宗、子貞方、匿信濃、爲氏滿所覺、遣兵襲之。有親與貞方脫走、入陸奥、起兵。氏滿大兵來擊、我衆潰。有親挈其二子逃入上野、祝人村、匿舊識民家。聞鎌倉執事上杉氏遣吏募索新田氏族、甚急、欲手刃二子而自殺。會尊觀來過、變容貌從之、而西。尊觀者蓋後村上帝子。帝無子、養龜山帝孫恒明。及帝生子、恒明避爲僧。是爲尊觀。後爲相摸、藤澤寺主、周遊諸國。謂新田氏先朝所眷也、爲謀所以保護之。乃權以有親及其長子爲己徒弟、狀有親呼德阿彌、長子呼長阿彌、皆削髮。少子猶幼、未削髮。呼德壽、竝携之去、過參河、寓大濱村寺。時尚連歌。

訓讀 尊氏の孫義滿、征夷大將軍となり、府を京師に開き、族氏滿を以て關東を管領せしむ。親季の子を有親と曰ふ。右京亮と爲る。元中中、宗族と同じく義宗の子貞方に從つて、信濃に匿る。氏滿の覺る所と爲り、兵を遣はして之を襲にす。有親、貞方と脱走し、陸奥に入つて、兵を起す。氏滿の大兵來り撃つて我が衆潰ゆ。有親、其の二子を挈へ、逃れて上野の祝人村に入り、舊識の民家に匿る。鎌倉の執事上杉氏、吏を遣はして新田氏の族を募り索むること甚だ急なりと聞き、二子を手及して自殺せんと欲す。會、僧尊觀來り過ぐ。容貌を變じ、之に從つて西す。尊觀は蓋し後村上帝の子なり。帝、子なし。龜山帝の孫恒明を養ふ。帝、子を生むに及んで、恒明避けて僧と爲る。是を尊觀と爲す。後に相摸の藤澤寺の主と爲り、諸國を周遊す。新田氏は先朝の眷する所なるを謂ひ、爲に之を保護する所以を謀る。乃ち權に有親及び其の長子を以て、己が徒弟の狀と爲し、有親を德阿彌と呼び、長子を長阿彌と呼び、皆髮を削る。少子猶ほ幼にして、未だ髮を削らず。德壽と呼ぶ。竝に之を携へて去り參河を過り、大濱村の寺に寓す。時に連歌を尙ぶ。

通釋 尊氏の孫の義滿は征夷大將軍と爲つて京都に幕府を開き、一族の氏滿に關東を總括して政治せしめた。親季の子を有親といつた。右京亮と爲つた。元中中間に一族の者と共に義宗の子の貞方に從つて信濃に隠れてゐた。氏滿はそれを察知、兵をやつて皆殺しにせんとした。有親は貞方と共に脱走し、陸奥に入つて兵を起した。氏滿の大軍がやつて來て我が味方は全敗した。有親はその二人の子を連れて上野の祝人村に逃げ込み、古くから知合の民家に隠れた。所が鎌倉の執事の上杉氏が役人をよこして非常に嚴重に新田氏の一族を探索してゐるといふことを聞き、二人の子を手にかけて自殺を遂げようとした。丁度其の時僧の尊觀といふ人がその家に立ち寄つた。有親は顔や姿を變へ、(僧形と爲つて)尊觀に從つて西行した。尊觀といふのは思ふに後村上天皇の御子である。天皇には皇子が在らせられなかつた。龜山天皇の御孫恒明親王を御皇子にせられた。その後皇子がお生れになつたので、恒明親王は遠慮して僧と爲られた。それが尊觀である。後、相摸の藤澤寺の住持と爲つて諸國を巡つて歩いた。新田氏は先代後醍醐帝が信任せられた者であるので、その子孫の爲めに保護の手段を講じてやられたのである。そこで有親とその長男とを自分の弟子の様にして、有親に德阿彌と名をつけ、長男を長阿彌と名づけた。兩方共頭を剃つた。弟の方はまだ小さかつたのでまだ髮を剃らなかつた。それは德壽と名をつけた。こ

の三人をば共に連れてその地を離れ、參河の國に行つて大濱村の寺に一時泊つてゐた。その當時連歌が盛であつた。

【語釋】元中(後龜山天皇) ○二子(泰親) ○連歌(一人が三十一字歌の上句又は下句をつくり、一人之に應じて下句又は上句を連ねて一首を成すもの。)

寺僧與近村諸豪爲歌會以娛尊觀。松平酒井兩村長亦與焉。而長阿彌充書手、德壽周旋執事。兩村長熟視德壽容止相語曰「是非凡種也。微叩之尊觀。尊觀察其無他、具語以故。村長皆有女無男。欲分贅二子。尊觀許之。於是德壽養於松平氏。及長命名泰親。築室松平村以奉有親焉。長阿彌亦蓄髮名親氏。稱雅樂助。後生子廣親。是爲酒井氏也。」

【訓讀】寺僧、近村の諸豪と歌會を爲し、以て尊觀を娛ましむ。松平・酒井兩村の長も亦與る。而して長阿彌は書手に充て、德壽は周旋して事を執る。兩村長德壽の容止を熟視し、相語つて曰く「是れ凡種に非ざるなり」と。微かに之を尊觀に叩く。尊觀其の他なきを察し、具に語るに故を以てす。村長皆女あつて男なし。分つて二子を贅せんと欲す。尊觀之を許す。是に於て、德壽は松平氏に養はる。長ずるに及んで名を泰親と命ず。室を松平村に築いて、以て有親を奉ず。長阿彌も亦、髮を蓄へ、親氏と名づけ雅樂助と稱す。後に子廣親を生む。是を酒井氏と爲す。

【通釋】その報の僧が、近村の豪族達と歌會を開いて、尊觀を慰めた。松平・酒井の二村の村長もそれに參加した。そして長阿彌は書記の役になり、德壽はとり持ち雜用をした。二人の村長は德壽の容貌態度をじつと見てゐて、話し合つて曰ふには「これは普通の人の種ではない」と、そこで人知れず尊觀に訊ねた。尊觀はこの二人に他心の無いことを察して、詳しくわけを話した。この村長等は娘があつて息子が無かつた。この二人の子を夫々入り婿させようと思つた。尊觀はそれを承諾した。德壽は松平氏の婿になつた。成長してから、泰親と名をつけた。松平村に家を拵へて父有親をもてなした。長阿彌も髮を伸ばして親氏と名を付け、雅樂助と稱した。後に廣親といふ子を生んだ。これが酒井氏である。

【語釋】松平・酒井(河) ○贅(男が女家に)

泰親養父信重稱太郎左衛門。泰親襲稱之。爲村長。關榛莽達道路。性壯武、喜施、振貸貧民而不責償。鄰近親附。泰親因從容謂衆曰「吾爲仇敵迫蹙、流寓至此。稍得安處。願積歲月、闢地聚衆、興復先業。諸君能助我乎。衆對曰「敢不生死以之。其中有嘗有罪宥死者五人。糾衆略中山七邑獻之。泰親分其歲入賞之。新田氏遺臣稍多。來從者。後花園帝永亨中、大納言平實照以罪貶參河。泰親善視之。及其赦歸、護入京師。實照爲奏請授一官。朝廷憚足利氏不輒許。後敕除州目代。遂任參河守。叙從五

位下復世良田氏

訓讀 泰親の養父信重、太郎左衛門と稱す。泰親襲いで之を稱す。村長と爲つて、榛莽を闢き道路を達す。性壯武、施を喜び、貧民に振貸して、償を責めず。鄰近親附す。泰親、因つて從容として衆に謂つて曰く「吾れ仇敵に迫盛せられ、流寓此に至り稍安處を得たり。願はくは歲月を積み、地を闢き衆を聚め、先業を興復せん。諸君能く我を助くるか」と。衆對へて曰く「敢て死生、之を以てせざらんや」と。其の中に嘗て罪あつて死を宥されしもの五人あり。衆を糾し中山の七邑を略して之を獻す。泰親、其の歳入を分つて之を賞す。新田氏の遣臣、稍來り從ふ者多し。後花園帝の永亨中、大納言平實照、罪を以て參河に貶せらる。泰親善く之を視る。其の赦され歸るに及び、護つて京師に入る。實照爲に一官を授けんことを奏請す。朝廷、足利氏を憚り輒く許さず。後救して州の目代に除し、遂に參河守に任ず。從五位下に叙せられ、世良田氏に復す。

通釋 泰親の養父の松平信重は太郎左衛門と稱してゐた。泰親はそれを襲名した。村長になり、藪を切り開き道路を通じた。その性質は活潑勇敢で、施しを好み、貧民に貸出しをして返却を強ひなかつた。附近の者が皆なつた。泰親は因つて打ち解けて皆の衆に向つて曰ふには「私は敵に追ひかけられ、あちこち流れ歩いたが、此の地に来てどうやら落付場所を見付けた。どうか追々と土地を切りとり人を集めて先祖代々の仕事(勤王)を再び興し度いものだ。諸君は立派に私を助けて下さるか」と。皆の者が答へて曰ふには「どうして命を賭けて致さではおきませぬ」と。その人々の中に、前に罪があつて、死罪を許された者が五人あつた。この五人が人々を集め、中山の七村を攻め取つて獻じた。泰親はその七村の歳入を分配して褒美とした。その内に新田氏の昔の家來が、

だん／＼仕へて来て、それが大分多くなつた。後花園天皇の永享年間、大納言の平實照が罪あつて參河に流された。泰親はよく之を世話した。實照が赦されて歸るとき、護衛して京都に行つた。實照は役をお授け下さるやうに奏請した。朝廷では足利氏に御遠慮なされて直ぐには許されなかつた。後、參河の目代に任官し、遂に參河守に任命された。從五位下に叙せられ、世良田氏を再び名乗ることになつた。

語釋 榛莽は雜木、莽は雜草繁茂。○振貸(錢穀を施したり貸せらるもの、荒蕪を意味す)

泰親有六男。使長子信廣襲居松平村。謂次子信光武類己以爲嗣。幼字次郎三郎。初守岩津、嗣立居岡崎、稱和泉守。善用兵、攻大給、北給、并之。又襲取安祥。寛正六年、額田民作亂。州守護細川成之不能定。幕府下教於和泉守。一戰平之。和泉守生男女四十餘人。親戚蕃衍。次子親忠嗣。幼字竹千代。長稱藏人。居岩津。厲精爲政。常謂其老臣曰「先考嘗謂養一士多於獲一邑。然混忠邪、濫賜予、則徒費民力耳。明應二年、舉母寺部上野八草伊保五城、合兵來攻。藏人以三千人邀擊于伊田、破之。建寺鴨田、名大樹寺、以弔陣亡士。」

訓讀 泰親六男あり。長子信廣をして、襲いで松平村に居らしむ。次子信光、武己に類すと謂ひ、以て嗣と爲

す。幼字は次郎三郎。初め岩津を守り、嗣ぎ立つて岡崎に居り、和泉守と稱す。善く兵を用ひ、大給・北給を攻めて之を并せ、又襲うて安祥を取る。寛正六年、額田の民亂を作す。州の守護細川成之定むる能はず。幕府、教を和泉守に下す。一戦に之を平ぐ。和泉守男女四十餘人を生み、親戚蕃衍す。次子親忠嗣ぐ。幼字は竹千代、長じて藏人と稱し岩津に居る。精を厲まし政を爲す。常に其の老臣に謂つて曰く「先考嘗て謂ふ、一士を養ふは一邑を獲るより多ると、然れども忠邪を混じ、賜予を濫すれば、則ち徒に民力を費すのみ」と。明應二年、舉母・寺部・上野・八草・伊保の五城、兵を合せて來り攻む。藏人三千人を以て伊田に邀へ撃ち、之を破る。寺を鴨田に建て、大樹寺と名づけ、以て陣亡の士を弔ふ。

通釋 泰親に六人の男子があつた。長男の信廣に松平村の長の役を繼がせた。次男の信光が武勇の點で自分に似てゐるといふので、世良田氏の後目にした。幼名は次郎三郎といつた。初め岩津を守つてをたが、父を相續してから、岡崎に居つて和泉守と稱した。兵を用ふことが上手で、大給・北給を攻め取り、又安祥を襲ひ取つた。寛正六年、額田の人民が亂を起した。州の守護職の細川成之は平定することができなかつた。幕府は和泉守に討伐の命を下した。唯一戦で之を平げた。和泉守は男女四十餘人を生み、親類が益々殖えた。次男の親忠相續をした。幼名は竹千代、成長して藏人と稱し岩津に居つた。これが精を出して政治をした。常にその老臣に向つて曰ふには「亡き父上が會て、一人の武士を養ふのは一つの村を手に入れるより優つてゐると仰せられたことがある。併して忠臣悪人の區別をしないで濫りに物を與へた所で、それは徒に民力を費やすだけで利益にはならない」と。明應二年に舉母・寺部・上野・八草・伊保の五城が兵を合せて攻めて來た。藏人は三千人の兵で伊田に迎へ討つて破つた。そして鴨田に寺を建て、大樹寺と名づけて戦没の武士を弔つた。

語釋 岩津・岡崎・大給・北給・安祥・額田・鴨田(河) ○先考(信) ○明應(後土御門天)

藏人生九男。曰親長・乘元・長親・親房・超譽・親光・長家・長忠・乘清。而親長守岩津、乘元守大給。長親爲嗣、居安祥。稱藏人。除出雲守。定西參河。而東參河猶屬今川氏親。氏親者駿河守護也。永正三年、氏親與其將北條長氏、率大兵來攻。八月攻岩津。出雲守將五百騎赴救。謂其騎曰「衆寡不敵。如何。衆請前決死。」出雲守曰「汝等世盡忠。我家而我未能厚報。今亦爲吾決死。吾所深愧。」因以大桶貯酒、泛杯數十、自飲一盃。瀉餘瀝桶中。曰「事急不暇。觴各人。交就飲之。」衆感奮。夜渡矢矧河。襲駿河軍。宇都宮忠茂曰「我必捷矣。」果捷之。收軍西岸。氏親・長氏遁去。戶田憲光以田原降。出雲守問忠茂曰「何以知捷。」曰「長氏負寵侮士。士無鬪志。是以知之。」忠茂者、新田義貞將泰藤五世孫也。後因其所居稱大久保氏。

訓讀 藏人九男を生む。曰く、親長・乘元・長親・親房・超譽・親光・長家・長忠・乘清。而して親長は岩津を守り、乘元は大給を守る。長親は嗣と爲り、安祥に居て藏人と稱す。出雲守に除せらる。西參河を定む。而して東參河

は猶ほ今川氏親に屬す。氏親は、駿河の守護なり。永正三年、氏親其の將北條長氏と、大兵を率ゐて來り攻め、八月岩津を攻む。出雲守、五百騎に將として赴き救ふ。其の騎に謂つて曰く「衆寡敵せず。如何」と。衆、前んで死を決せんと請ふ。出雲守曰く「汝等世々忠を我が家に盡す。而して我れ未だ厚く報ゆる能はず。今亦吾が爲めに死を決す。吾れ深く愧づる所なり」と。因つて大桶を以て酒を貯へ、杯數十を泛べ、自ら一盃を飲み餘瀝を桶中に瀉いで曰く「事急なり。各人に觴するに暇あらず。交、就いて之を飲めよ」と。衆感奮し、夜、矢矧河を渡り駿河の軍を襲ふ。宇都宮忠茂曰く「我れ必ず捷たん」と、果して之に捷ち、軍を西岸に收む。氏親・長氏、遁れ去る。戸田憲光、田原を以て降る。出雲守忠茂に問うて曰く「何を以て捷を知る」と。曰く「長氏龍を負んで土を侮る。士鬪志なし。是を以て之を知る」と。忠茂は、新田義貞の將泰藤五世の孫なり、後其の居る所に因つて大久保氏と稱す。

通釋 藏人は九人の男子を生んだ。親長・乘元・長親・親房・超譽・親光・長家・長忠・乗清。長男の親長は岩津を守り、次男の乘元は大給を守つた。三男の長親は相續人になつて安祥に居り、藏人と稱した。出雲守に任せられた。そして西參河を平定した。東參河はまだ今川氏親に屬してゐた。氏親は駿河の守護職であつた。永正三年、氏親は、その將の北條長氏と共に大軍を率ゐて攻め寄せ、八月には岩津を攻めた。出雲守は五百騎を率ゐて助けに行つた。その部下に向つて曰ふには「とても人数では太刀打は出来ぬ。どうしたものだらう」と。皆は進んで死を擲たんことを請うた。出雲守が曰ふには「お前達は代々我が家に忠義を盡してくれた。私はまだそれに厚く報いることが出来ないである。然るに今亦、私の爲めに決死の覺悟をしてくれた。私は非常に恥ぢ入る次第だ」と。そこで大きな桶に酒を入れ、盃を數十個浮かしてその一を自分からとつて飲み、盃に残つた酒を桶の中にそ

そいで曰ふには「急場の事だ。皆錦々に盃をやるわけにゆかね。願々にこの桶から酒を飲んでくれよ」と。皆はその言葉に奮ひ立ち、夜、矢矧河を渡つて駿河の軍を襲つた。宇都宮忠茂が曰ふには「我が軍はきつと勝ちます」と。その言葉通りに勝つて、川の西岸に軍隊を集めまとめた。氏親と長氏は逃げ去つた。戸田憲光は田原を以て降参した。出雲守が忠茂に問うて曰ふには「何うして勝ち軍が分つてゐたのか」と。答へて曰ふには「長氏は寵を恃んで武士共を侮つて居りました。それで武士共も戦争をする氣が有りません。そこを見て味方の勝を知つたのであります」と。忠茂は新田義貞の將、泰藤の五代の孫である。後、領地の名をとつて大久保氏と稱した。

語釋 永正(後柏原天皇の年號)

出雲守生五男。曰、信忠親盛信定利長義春。出雲守老、信忠爲嗣。仍居安祥。任左京亮。左京亮不恤政。嬖臣用事。國內皆叛。群臣交諫弗聽。因相聚謀廢立。左京亮覺之。親戮一人。左京亮生三男。曰、清康、信孝、康孝。乃召群臣曰、我悔吾非。而不可追也。清康雖幼有器局。宜以代我。大永三年、老于大濱。

訓讀 出雲守五男を生む。曰く、信忠・親盛・信定・利長・義春。出雲守老し、信忠嗣と爲る。仍ほ安祥に居る。左京亮に任せらる。左京亮政を恤へず。嬖臣事を用ひ、國內皆叛く。群臣交、諫むれども聽かず。因つて相聚り廢立を謀る。左京亮之を覺り、親ら一人を戮す。左京亮三男を生む。曰く、清康・信孝・康孝。乃ち群臣を召して曰く「我れ吾が非を悔ゆ。而れども追ふ可からざるなり。清康幼しと雖も、器局あり。宜しく以て我に代る

べしと。大永三年、大濱に老す。

通釋 出雲守は五人の男子を生んだ。信忠・親盛・信定・利長・義春である。出雲守が隠居すると、信忠が相續した。やはり安祥に居た。左京亮に任ぜられた。左京亮は政治のことに關らなかつた。寵臣共が勝手に事務を取り行つてゐた爲め、國內の人心が皆離れた。群臣は交々諫めたけれ共、言ふことをきかなかつた。そこで皆寄り集つて左京亮を廢し別人を立てることを相談した。左京亮はそれに氣が付いて、その一人を手討にした。左京亮には三人の男子が有つた。清康・信孝・康孝といつた。彼は手討にした後、群臣を召して曰ふには「余は自分の過ちを後悔してゐる。併しもう遅い。清康はまだ幼年であるが才能もあり度量も大きい。余に代つてやるのには最も適任であらう」と。自分は「大永三年、大濱に隱居した。」

語釋 一人(首謀) ○大永(後柏原天皇の年號) ○大濱(河)

清康立。仍居安祥。小字次郎三郎。幼聰達。每見舊臣。訪古今成敗戰鬪事。憑膝捋鬚。以爲樂。或問某何在。聞其死且戰沒。輒痛傷之。嘗當食。受謁呼衆前之。以其所御椀。飲之。酒衆不敢。清康曰。人生等耳。或爲君。或爲臣。分可隔。情可隔乎。強注之。皆霑醉。退相謂曰。今日之酒。吾輩頸血也。時族松平親貞據岡崎及山中。以掠傍近。大久保忠茂曰。先拔山中。則岡崎不攻而下。乃夜襲取山中。親貞輒降。以岡崎爲參河要地。

徙居之。國人稱曰。岡崎公。遂徇下。西參河。豪傑五十餘姓。欲賞忠茂。問其所欲。不答。強而後。答曰。願賜城下市租。岡崎公許之。而疑其貪也。忠茂盡召市人。以君命除其市稅。四方商旅聞之。爭至。岡崎終以是富實矣。

訓讀 清康立つ。仍ほ安祥に居る。小字は次郎三郎。幼にして聰達。舊臣を見る毎に、古今の成敗戰鬪の事を訪ひ膝に憑り鬚を捋つて以て樂と爲す。或は某は何くに在るかと思ひ、其の死且つ戰沒するを聞けば、輒ち之を痛傷す。嘗て食するに當つて謁を受く。衆を呼んで之を前め、其の御する所の椀を以て之に酒を飲ましむ。衆敢てせず。清康曰く「人生は等しきのみ。或は君と爲り、或は臣と爲る。分は隔つべきも情は隔つべけんや」と。強ひて之に注ぐ。皆霑酔し、退いて相謂つて曰く「今日の酒は、吾が輩の頸血なり」と。時に族松平親貞、岡崎及び山中に據つて以て傍近を掠む。大久保忠茂曰く「先づ山中を抜かば、則ち岡崎は攻めずして下らん」と。乃ち夜、山中を襲ひ取る。親貞輒ち降る。岡崎は參河の要地たるを以て、徙つて之に居る。國人稱して岡崎公と曰ふ。遂に西參河の豪傑五十餘姓を徇へ下す。忠茂を賞せんと欲し、其の欲する所を問ふ。答へず。強ひて後、答へて曰く「願はくは城下の市租を賜へ」と。岡崎公之を許す。而して其の食を疑ふ。忠茂盡く市人を召し、君命を以て其の市税を除く。四方の商旅之を聞いて争ひ至る。岡崎終に是を以て富實なり。

通釋 清康が後目を相續した。やつぱり安祥に居住してゐた。幼名は次郎三郎といふ。小さい時から利忒であつた。古い家來に會ふと、きつと昔から今に至るまでの成功失敗や戰爭の話をねだり、その膝によりかゝり、鬚

をひねつて面白がつてゐた。又誰々は何處にあるかなど、問ひ、その者が病死とか戦死とかしたと聞くと、常に非常に悼んだ。或る時、食事最中に面謁を願ふ者があつた。すると彼はその者共を呼び入れ、近づけて、自分が飲んでゐた椀で、酒を飲ませたりした。皆は遠慮した。すると清康が曰ふには「人間は皆平等なものだ。今は君と爲り或は臣と爲つてゐる。その境遇の上では隔てを置くにしても、その場合に於ては隔たりはない」と。無理やりに酒をついだ。皆は十分に酔つて退出し、お互ひに曰ふには「今日飲んだ酒は、即ち吾々の頸の血である」と。(戴いた大酒に感激して、命を捨てるから、酒がやがて頸の血になるわけ)時に一族の松平親貞が岡崎及び山中に立て籠り、附近を掠奪した。大久保忠茂が曰ふには「先づ山中の方を陥れたら、岡崎は攻める迄もなく降参するでありませう」と。そこで夜、山中を攻めて占領した。そこで親貞が忽ち降参した。岡崎は参河の大事な地點なので、清康はそこへ移つた。参河の國の人は彼を岡崎公といふやうになつた。それから遂に西参河の豪傑共五十餘家を服従せしめた。忠茂に賞を與へようと思つて、何を欲しいか尋ねた。忠茂は返事をしなかつた。無理に聞くとやつと答へて曰ふには「何卒御城下の町の商賣税を下され度い」と。岡崎公はそれを許した。彼の食慾を疑はしくも思つた。所が忠茂は商人を殘らず呼び集め、岡崎公の命令だとして、商業税を免除してやつた。各地の旅商人はその噂を聞いて我れ勝ちに岡崎にやつてきた。岡崎はそんなことから財政の豊かな町となつた。

話釋 露醉(十分に酔) ○山中(河)

享祿二年、吉田城主牧野傳藏、欲起兵并西参河。岡崎公將兵擊之、出伊奈。伊奈城主本多正忠迎降。正忠之先日、助秀居豊後本多郷子孫邑子尾張尋從、参河舉族

仕徳川氏而正忠尤大。岡崎公并其兵進、縱火御油傳藏濟吉田川、毀舟而戰。我兵不利、本多信重戰死。佐野與八請退。岡崎公不肯曰「彼勝而驕、可破也。乃進戰。與八死之。叔父信定等力戰遂破之、斬傳藏。遂攻吉田。正忠攻破其東門、遂陷之。岡崎公入城撫士民、遂攻下叛將戶田憲光、平東参河而還會飲于伊奈。正忠獻盤殺藉用葵三葉、岡崎公視而悅曰「吾凱旋得此、自今當以此爲徽號。初徳川氏因宗族以中黒爲號。於是兼用三葵。是歲、出兵於尾張、略織田氏地、取品野以賜信定。」

訓讀 享祿二年、吉田の城主牧野傳藏、兵を起して西参河を并せんと欲す。岡崎公、兵に將として之を撃ち、伊奈に出づ。伊奈の城主本多正忠迎へ降る。正忠の先を助秀と曰ふ。豊後の本多郷に居る。子孫尾張に邑す。尋いで参河に徙り、舉族徳川氏に仕ふ。而して正忠尤も大なり。岡崎公其の兵を并せ、進んで火を御油に縱つ。傳藏吉田川を濟り、舟を毀ちて戰ふ。我が兵利あらず、本多信重戰死す。佐野與八退かんと請ふ。岡崎公肯んぜずして曰く「彼れ勝つて驕る。破るべきなり」と。乃ち進み戰ふ。與八之に死す。叔父信定等力戰し遂に之を破り傳藏を斬つて、遂に吉田を攻む。正忠攻めて其の東門を破り、遂に之を陥る。岡崎公城に入つて士民を撫し、遂に叛將戶田憲光を攻め下し、東参河を平けて還り、伊奈に會飲す。正忠、盤殺を獻す。藉くに葵三葉を用ふ。岡崎公視て悦んで曰く「吾れ凱旋して此を得たり。今より當に此を以て徽號と爲すべし」と。初め徳川氏、宗族

に因り、中黒を以て號と爲す。是に於て三葵を兼用す。是の歳、兵を尾張に出だし織田氏の地を略し、品野を取り以て信定に賜ふ。

通釋 享祿二年、吉田の城主牧野傳藏が、軍を起して西參河を取らうとした。岡崎公は之を伐つ爲めに軍隊を率ゐて先づ伊奈に出かけた。伊奈の城主本多正忠が出迎へて降参した。正忠の祖先は助秀といつた。豊後の本多にゐた。その子孫は尾張に領地を持つてゐた。その後參河に移つて一族全部徳川氏に仕へた。正忠は中でも一番大家であつた。岡崎公はその兵を合せ、進んで御油に火をつけた。傳藏は吉田川を渡り、舟をこはして返らぬ覺悟で戦つた。我が兵は戦敗れ、本多信重は戦死した。佐野與八が退却し度いと申し出た。岡崎公は承知しないといふには「敵は軍に勝つて得意になつてゐる。今打ち破ることができると。そこで進んで戦つた。與八は討死をした。叔父の信定等が奮闘して遂に敵を破り、傳藏を斬り、更らに進んで吉田城を攻めた。正忠はその東門を攻め破つて遂に之を陥れた。岡崎公は城に入つて士民をいたはり、それから叛將戸田憲光を攻め下して東參河を平定し、伊奈に戻つて酒宴をした。正忠は鉢に盛つた肴を獻じた。肴の下に葵の葉を三枚敷いてあつた。岡崎公はそれを見て喜んで曰ふには「私は凱旋して此の御馳走に預つたのである。今後は此の葵をば紋所に致さう」と。初め徳川氏は新田氏の一族である所から中黒の紋所を用いてゐた。これより三つ葵を兼用するやうになつた。此の年、尾張に出兵して織田氏の地を領し、品野といふ所を取つて信定に與へた。

語釋 享祿(後奈良天皇の年號) ○吉田・伊奈・御油(參河) ○品野(尾張)

三年、攻熊谷重長于宇理、自攻北門。信定以從子親次爲先鋒、攻南門。死。初我僕人

岩瀬者殺人。岡崎公愛其勇、宥死。逐之。時在城中。夜縱火爲内應。我兵遂拔城。賞祿。岩瀬重長走、保高力。稱高力氏。遂來降。

訓讀 三年、熊谷重長を宇理に攻め、自ら北門を攻む。信定、從子親次を以て先鋒と爲し、南門を攻めて死す。初め我が僕人岩瀬なる者人を殺す。岡崎公其の勇を愛し、死を宥して之を逐ふ。時に城中に在り。夜、火を縱つて内應を爲す。我が兵遂に城を抜く。岩瀬を賞祿す。重長走り、高力を保ちて高力氏と稱す。遂に來り降る。

通釋 三年、熊谷重長を宇理に攻め、自身水門を攻めた。信定は甥の親次を先鋒とし、南門を攻めて討死した。以前岡崎公の下僕の岩瀬といふ者が人を殺したことがある。公は彼の膽勇を愛してゐたので死を許して追放に處した。この岩瀬がこの時城中に居つた。夜、城に火をつけて内應した。我が軍は遂にこの城を陥れた。岩瀬は褒美に祿を貰つた。重長は逃げて高力を守つて、高力氏と稱した。終に降参して來た。

天文二年、與廣瀨寺部二城主戰于岩津。破之。冬、信濃人來侵。迎擊大破之。岡崎公嘗夢有文、在其握。曰是覺而問衆。衆莫知其解。有僧橫外者。曰是字日下人也。日下以一人握之。公將大興乎。然握而未啓。在其子孫乎。岡崎公大喜、爲建龍海禪寺。

訓讀 天文二年、廣瀨・寺部の二城主と岩津に戦ひ之を破る。冬、信濃の人來り侵す。迎へ撃つて大に之を破る。岡崎公嘗て夢む。文あり、其の握に在つて是と曰ふ。覺めて衆に問ふ。衆其の解を知るなし。僧横外なる者あり。曰く「是の字は日下の人なり。日下、一人を以て之を握る。公將に大に興らんとす。然れども握つて未だ

啓かず。其の子孫に在らんか」と。岡崎公大に喜び、爲に龍海禪寺を建つ。

通釋 天文二年に、廣瀬・寺部の二城主と岩津で戦つて之を破つた。その冬信濃の者が侵入して来た。これも打ち破つた。岡崎公は或る時夢を見た。それは自分の握つた掌の中に是といふ文字がある夢であつた。目がさめてから皆に問うた。誰もその意味の分るものがあなかつた。僧の横外といふ者があつた。曰ふには「是といふ字は日の下の人と書く。日の下を一人の人が握つてゐる形である。公は將來大に成功されるであらう。けれども掌を握つてゐてまだ開かれぬ。これは子孫の代になるのかも知れない」と。岡崎公は非常に悦び、横外の爲めに龍海禪寺を建て、やつた。

語釋 廣瀬・寺部(河)

岡崎公威名日著。甲斐國主武田信虎遣使通好。美濃・尾張諸城主亦有願附者。公一日慨然言於將士曰「我家與足利氏族望相敵。爲其所剪滅。削跡屈勢。以至於此。今仇家衰亂。天下之事可知矣。冀藉汝衆之力。糾合義兵。樹幟皇都。得一雪累世之恥。今我東有今川氏。西有織田氏。先攻織田氏。以開西上之路。宜厲兵時糧。以俟吾令。衆奮躍聽命。」

訓讀 岡崎公威名日に著る。甲斐の國主武田信虎、使を遣はして好を通ず。美濃・尾張の諸城主も亦、附を願ふ

ものあり。公、一日慨然として將士に言つて曰く「我が家は足利氏と族望相敵す。其の剪滅する所と爲り、跡を削り、勢を屈し、以て此に至る。今や仇家衰亂す。天下の事知るべし。冀はくは汝衆の力を藉り、義兵を糾合し、幟を皇都に樹て、一たび累世の恥を雪ぐを得ん。今我れ東に今川氏あり。西に織田氏あり。先づ織田氏を攻めて、以て西上の路を開かん。宜しく兵を厲まし糧を時み以て吾が令を俟つべし」と。衆奮躍して命を聽く。

通釋 岡崎公の威光名聲は日増しに高くなつた。甲斐の武田信虎は使をよこして交誼を求めた。美濃・尾張の諸城主にも味方せんと願ふ者があつた。公はある日慨いて將士に向つて曰ふには「我が家は新田の子孫で、足利氏と家柄は同じである。然るに足利氏に攻め亡ぼされ、身を匿してびく／＼し乍ら今日まで経過した。今仇の足利氏は衰へ亂れて手も足も出ない。天下のことは如何なるか自ら明瞭である。どうぞ一つお前方の力を借り、仇討の兵を集め、旗を京都に立て、代々の恥をば一度に雪ぎ度いものである。所が目下、我が國の東には今川氏が居る。西には織田氏が居る。先づ織田氏を攻め破つて、西上の路を開くことにしよう。それには兵器をみがき、糧食を蓄へて、私の命令の出るのを待つてゐてくれ」と。皆は奮ひ躍つてその命令に従つた。

十月、勸兵萬人、自將西上、入森山。信定居上野、稱疾不從。初信定負勢驕、士落合某者、因事抗之。衆爲危之。公曰「士者、先公以來所愛養、叔父傲之非也。彼不屈撓、可嘉。信定銜之。親次之死、信定不救。又爲公所誚責。深懷慚恚。於是欲乘虛作亂。將士請且止西伐。公曰「何足介意。今大舉徒歸。士氣沮敗。納侮四隣也。遂欲進攻清洲。國老

安倍定吉從軍數、以書勗信定。有流言、定吉與信定通謀。定吉謂子彌七曰、「衆嫉我寵、造作語言。主公必察之。即不察、見誅。慎勿以爲怨。宜疾時鳴冤。」十二月、軍中馬逸。衆大騷。彌七奉刀侍公側。謂定吉已被殺、惶急拔刀弑之。植村榮安自傍誅彌七。定吉聞之、將自殺。松平信孝止之。時出雲守猶在。將士護喪歸、請命焉。

訓讀 十月、兵萬人を勸し、自ら將として西上し、森山に入る。信定上野に居り、疾と稱して従はず。初め信定、勢を負み士に驕る。落合某なる者、事に因つて之に抗す。衆、爲に之を危む。公曰く、「士は先公以來愛養する所、叔父之に傲るは非なり。彼れ屈撓せざるは嘉すべし」と。信定之を衝む。親次の死するや信定救はず。又公の誚責する所と爲る。深く慙恚を懷く。是に於て、虚に乗し亂を作さんと欲す。將士且く西伐を止めん事を請ふ。公曰く、「何ぞ意に介するに足らん。今、大舉して徒に歸らば、士氣沮敗し、悔を四隣に納れん」と。遂に進んで清洲を攻めんと欲す。國老安倍定吉、軍に従ひ、數書を以て信定を勸めしむ。流言あり、定吉、信定と謀を通すと。定吉、子彌七に謂つて曰く、「衆、我が寵を嫉み、語言を造作す。主公必ず之を察せん。即し察せずして誅せらるも、慎んで以て怨と爲す勿れ。宜しく時を俟つて冤を鳴らすべし」と。十二月、軍中馬逸す。衆大に騷ぐ。彌七刀を奉じて公の側に侍す。定吉、已に殺さると謂ひ、惶急して、刀を抜き之を弑す。植村榮安傍より彌七を誅す。定吉之を聞いて將に自殺せんとす。松平信孝之を止む。時に出雲守猶ほ在り。將士喪を護つて歸り、命を請ふ。

通釋 十月、兵士一萬人を勸へ、自ら大將となつて西に向ひ、森山といふ處に入つた。其の時信定は上野に居つて、病氣だと言つて、軍に加はらなかつた。この以前信定は勢をかさにきて高ぶつた態度が多かつた。落合某といふ者が、或る事によつて信定と争つた。それで多くの人々が心配して居た。岡崎公が曰ふには「我が士は父上の時以來、愛し養つて居る者であるから、叔父が、此の士に高ぶるのは宜しくない。又彼れ落合が叔父に屈しなかつたのは、感心なことだ」と。信定は此の事を怨みに想つてゐた。又親次が死んだ折、信定は之を助けなかつた。これも岡崎公から叱られた。深く恥ぢ入り、心の中に怒りが燃えだきつてゐた。そこで此の度西上の虚に乗じて反亂を起さうと思つた。岡崎公の將士達がしばらく西に攻め上るのを控へるやうに願つた。公が曰ふには「少しも心にかけることはない。今兵士を澤山集めてから、空しく引き返したならば、兵の元氣は崩れ、又四方の國々からは侮られるだらう」と。遂に進んで清洲を攻めようとした。其の時、家老の安倍定吉は從軍して居て、度、手紙をやつて信定に勉勵するやう忠告した。すると定吉が信定と謀を通じ合つて居ると噂が立つた。定吉は子の彌七に向つて曰ふには「人々は自分が公から愛せられるのを嫉んで、この噂を立てたのであらう。併し御主人はきつと此の事をお察しになる。若し不幸にして殺されるやうなことがあるとしても、慎んで御主公を怨むではないぞ。時を待つて無實の罪を訴へるのがよろしいぞ」と。十二月に、軍中で馬が逃げ出した。人々が大層騒ぎ廻つた。彌七は其の時、公の刀を捧げてお側に付き隨つて居た。此の騒ぎは父の定吉が殺されたのだと思ひ込んで、急ぎあわて、刀を抜き公を殺害して終つた。植村榮安は時を移さず傍から躍りかゝつて不臣彌七を屠つた。父の定吉は此の有様を聞いて自害しようとした。松平信孝は之をおさへた。其の時、祖父の出雲守長親はまだ存生中であつた。將士は岡崎公のなきがらを護衛して歸り、其の指圖を仰いだ。

語釋 森山(張) ○因事抗之(清康が散樂を催した時、落合喜兵衛先づ至り、間違へて信定の席に就いた。信定が来て之を責めたので、喜兵衛は驚いて、詫り、その席を去らうとした所が、又叱つて席を立てと促した。そこで怒つてこんどは居直つて頭としてその席を去らなかつた。) ○親次之死(宇理の戦で死んだ)

初岡崎公娶青木氏、生廣忠。乃立之。以定吉無罪、宥使傳之。織田信秀聞我内變、舉兵來侵。我見兵八百、以季父康孝爲將、迎戰伊田。植村榮安先進。高力重長及子長安戰死。信秀戰敗、請和而去。信定有寵於出雲守。遂圖自立。定吉奉廣忠、出奔伊勢。信定遂立居上野、自結於織田氏。定吉密與弟正定及大久保忠茂、子忠俊、酒井廣親、孫正親、正親、從子忠次、石川清兼、石川數正、成瀬正義、通謀、請援於今川氏、以納廣忠。五年冬、護入牟呂、參河人多往歸之。

訓讀 初め岡崎公青木氏に娶り、廣忠を生む。乃ち之を立つ。定吉罪なきを以て宥して之に傳たらしむ。織田信秀我が内變を聞き、兵を擧げて來り侵す。我が見兵八百、季父康孝を以て將と爲し、迎へて伊田に戰ふ。植村榮安先んじ進む。高力重長及び子長安戰死す。信秀戰敗れ、和を請うて去る。信定、出雲守に寵あり。遂に自立を圖る。定吉、廣忠を奉じ、伊勢に出奔す。信定遂に立ちて上野に居り、自ら織田氏に結ぶ。定吉密に弟正定、及び大久保忠茂の子忠俊、酒井廣親の孫正親、正親の從子忠次、石川清兼、石川數正、成瀬正義と謀を通じ、援

を今川氏に請ひ以て廣忠を納る。五年冬、護つて牟呂に入る。參河の人多く往いて之に歸す。
通釋 岡崎公は青木氏の女と結婚して廣忠を生んだ。そこで廣忠を後嗣に立てた。そして定吉は罪がないので一切の行き掛りを許して其のお守役にきめた。織田信秀はこちらの内部分のこたくを知つて、兵を引きつれて攻め寄せた。其の時こちらの手許の兵は八百人ゐたので、廣忠の末の叔父に當る康孝を大將として伊田に迎へ撃つた。植村榮安は先登を切つて進んだ。高力重長と其の子長安は戰死した。遂に戰は信秀方の負けとなり、信秀は和睦を願つて歸つた。信定は出雲守の覺えがめでたかつた。遂に自立を計畫した。定吉が廣忠をつれて伊勢に落延びた。信定はとうとう自立して上野に居り、自分から進んで織田氏と提携した。定吉は内密に弟の正定や大久保忠茂の子の忠俊、酒井廣親の孫正親、正親の甥忠次、石川清兼、石川數正、成瀬正義など言ふ面々と謀を通じ、今川氏に援けを求めて、廣忠を國に迎へさせた。五年冬、廣忠を護つて牟呂に到着した。參河の人は澤山やつて來て、廣忠に従つた。

語釋 康孝(信忠の三男) ○伊田・牟呂(河參)

六年、信定來攻。忠俊伴從其軍、射書城上。期以四月迎之。信定危疑。宣言曰「我初無害姪孫之意。徒誅諸亂人而已。」乃引兵還。數與將士誓。忠俊三上誓書、而密告岡崎留守松平信孝。信孝曰「吾亦欲之。未得間耳。念公等事不成、死誰繼之者。吾且全身焉。」乃稱疾赴有馬。五月、忠俊等密迎廣忠入岡崎。將士爭謁。出雲守聞之、喜曰「吾恐

駿河兵因以侵我。故距之耳。兒我嫡曾孫也。因命信定折節事之。信定不得已來謁。信孝亦歸。廣忠任參河守。忠俊以下受賞。忠次稱左衛門尉。自父氏次稍積功勞。於是娶參河守妹。尤見親重。七年、信定卒。衆心乃定。定吉羞爲逆家、自絶其嗣。婢有身。出嫁井上氏。井上氏實安倍氏胤也。

訓讀 六年、信定來り攻む。忠俊、伴つて其の軍に従ひ、書を城上に射て、期するに四月之を迎ふるを以てす。信定危疑す。宣言して曰く「我れ初より姪孫を害するの意なし。徒諸の亂人を誅するのみ」と。乃ち兵を引いて還る。數將士と誓ふ。忠俊三たび誓書を上り、而して密に岡崎の留守松平信孝に告ぐ。信孝曰く「吾も亦之を欲す。未だ間を得ざるのみ。念ふに公等、事成らずして死せば、誰か之に繼ぐ者ぞ。吾れ且く身を全うせん」と。乃ち疾と稱して有馬に赴く。五月、忠俊等密に廣忠を迎へて岡崎に入る。將士爭ひ謁す。出雲守之を聞き、喜んで曰く「吾れ駿河の兵の因つて以て我を侵すを恐る。故に之を距ぐのみ。兒は我が嫡曾孫なり」と。因つて信定に命じ、節を折つて之に事へしむ。信定已むを得ずして來り謁す。信孝も亦歸す。廣忠參河守に任ぜらる。忠俊以下賞を受く。忠次、左衛門尉と稱す。父氏次より稍功勞を積む。是に於て參河守の妹を娶り、尤も親重せらる。七年、信定卒す。衆心乃ち定る。定吉、逆家たるを羞ぢ、自ら其の嗣を絶つ。婢身む有り。出で、井上氏に嫁す。井上氏は實は安倍氏の胤なり。

なつたら廣忠を避へませうと言ひ送つた。信定も心配になる點があつた。言ひふらして曰ふには「自分は初めから甥の子廣忠をやつ、ける意思はなかつた。只謀反をする多くの奴等を殺さうとするだけだ」と。そこで兵を引きつれて返つて行つた。そして何度も何度も將士と誓約をした。忠俊は三度誓書を差出して置きながら、密に岡崎の留守役松平信孝に四月に廣忠を迎へると通知した。信孝が曰ふには「自分も廣忠を迎へよう」とは思つて居る。併しまだ其の時機を得られないだけだ。考へるに、貴公達が成功しないで死ぬやうなことがあつたなら、誰が其の後を受けつぐのだ。だから自分は「ばらく身を安全に保つて後日の爲めに備へよう」と。そこで一計を案じて病氣といふことにして、有馬の温泉に行つた。五月、忠俊等はこつそり廣忠を迎へて岡崎に來た。すると多くの將士は吾れ先きにとお目通りに出た。出雲守は之を聞いて喜びの聲を擧げて曰ふには「自分は駿河の今川勢が、之に乗じてこちらを侵略するのを恐れた。何とかして之を防がうと、苦心したのであつた。廣忠は自分の正統の曾孫なのだから決して粗末にしたわけではない」と。因つて信定に、自分の考をまげて、廣忠に事へるやうに命じた。信定は仕方がないので來つて面會をした。信孝も亦有馬から歸つた。廣忠はそこで參河守に任ぜられた。忠俊以下功のあつた者は賞をもらつた。忠次は左衛門尉と言つた。父の氏次の時から次第に手柄を重ねて來たが、此の時になつて參河守の妹を妻にもらひ、一番親しみ重んぜられた。七年、信定が死んだ。人々の心は安定した。定吉は息子のために主家に叛いた家となつたのを恥ぢて自分から子孫を絶やした。しかしその下女で種を宿したものがあつた。井上氏に嫁いで行つた。だから井上氏は眞實は安倍氏の系統である。

語釋 有馬(津) ○因以侵我(今川氏が廣忠を納れることを名義として岡崎に攻め込むのである) ○逆家(其の子の彌七が清康を弑したの逆臣の家といふことなる)

九年六月、織田氏兵來、攻松平長家子安祥。參河守使松平康信等援之。不利。長家

及松平康忠・林政縁等皆死。松平利長・松平忠繼苦戰卻之。十年、參河守娶刈谷城主水野忠政女。十一年、歲次壬寅十二月二十六日、生男子岡崎。有奇質。出雲守視之曰「此兒必揚名於天下」。令酒井正親・石川清兼舉之。因故事命幼字竹千代。是歲、織田氏復來侵、乞援於今川氏。今川氏遣僧大原、以三萬人來救、與戰于小豆坂。互有勝敗。冬又來侵。內藤清長擊卻之。十二年、水野忠政卒。子信元叛、附織田氏。參河守難今川氏之意、與之絶婚、再娶戸田憲光女。

訓讀 九年六月、織田氏の兵來り、松平長家を安祥に攻む。參河守、松平康信等をして之を援けしむ。利あらず。長家及び松平康忠・林政縁等皆死す。松平利長・松平忠繼苦戰して之を卻く。十年、參河守、刈谷の城主水野忠政の女を娶る。十一年歲壬寅に次す。十二月二十六日、男を岡崎に生む。奇質有り。出雲守之を視て曰く、「此の兒必ず名を天下に揚げん」と。酒井正親・石川清兼をして之を擧げしめ。故事に因つて、幼字を竹千代と命ず。是の歲秋、織田氏復來り侵す、援を今川氏に乞ふ。今川氏僧大原を遣はし、三萬人を以て來り救ひ、與に小豆坂に戰ひ互に勝敗有り。冬又來り侵す。内藤清長撃つて之を卻く。十二年、水野忠政卒す。子信元叛き、織田氏に附く。參河守今川氏の意を難り、之と婚を絶ち再び戸田憲光の女を娶れり。

通釋 九年六月、織田氏の兵が松平長家を安祥に攻めた。參河守は松平康信をして援けさせたけれども、負け

た。長家は松平康信・林政縁等は皆戰死した。しかし松平利長や松平忠繼は苦戰して敵を退却させた。十年、參河守は刈谷の城主水野忠政の娘を妻に迎へた。十一年は壬寅のとしまわりとなる。其の十二月二十六日に岡崎で男の子を生んだ。其の子は並々でない性質があつた。出雲守は之を見て曰ふのに「此の子はきつと天下に名前を揚げるに違ひない」と。酒井正親と石川清兼とに之を養育させた。祖先の例を取つて幼名を竹千代とつけた。此の年の秋に織田氏が再び攻めて來た。そこで今川氏に助けを請うた。今川氏は僧大原に三萬人の兵を授けて救ひに向はせ、小豆坂で戰つてお互ひに勝つたり敗けたりした。冬に又々攻め寄せた。此の時は内藤清長が之を撃ち卻けた。十二年、水野忠政が死んだ。子の信元は叛いて織田氏に従つた。參河守は今川氏の思惑を憚つて、水野の娘と離婚し、戸田憲光の娘と再婚した。

語釋 故事(六世の祖親忠の幼字を竹千代といつた。そして代々) ○小豆坂(河)

十三年八月、出雲守卒。織田信秀遣族敏宗攻安祥。敗去。信秀自將代攻拔之。佐崎城主松平忠倫叛降、爲信秀守。上輪田、以逼岡崎。十四年、參河守自將擊尾張兵于清原。走之。追至安祥。與城兵戰。大敗。殆不免。本多忠豐止戰死之。參河守得脫。取忠豐、金扇馬表、置之牙營。以旌其忠。松平信定、子清定、據上野。叛。初酒井正親兄忠尙、讒人而不遂。慚而退居。於是往歸清定。參河守攻之。不利。

訓讀 十三年八月、出雲守卒す。織田信秀、族敏宗を遣はして安祥を攻めしむ。敗れて去る。信秀自ら將として代り攻めて之を拔く。佐崎城主松平忠倫叛き降り、信秀の爲に上輪田を守り、以て岡崎に逼る。十四年、參河守自ら將として、尾張の兵を清暇に撃つて之を走らせ、追つて安祥に至り、城兵と戦つて、大に敗れ、殆ど免かれず。本多忠豊止り戦つて之に死す。參河守脱るゝを得たり。忠豊の金扇馬表を取つて、之を牙營に置き以て其の忠を旌す。松平信定の子清定、上野に據つて叛く。初め酒井正親の兄忠尚、人を讒して遂げず。慚ちて退居す。是に於て、往いて清定に歸す。參河守之を攻む。利あらず。

通釋 十三年八月、出雲守が歿した。織田信秀は一族の敏宗を遣はして安祥を攻めさせた。併し敗北して歸つた。信秀は今度は自分から大將となつて代つて攻め之を破つた。佐崎の城主松平忠倫は叛いて敵に降り、信秀の爲めに上輪田を守り、岡崎に攻め寄せた。十四年、參河守は自ら大將となつて、尾張方の兵を清暇で打ち破り、之を敗走させ、追撃して安祥に來り、城の兵と大に戦ひ、却つて大敗を喫し、殆んど命も危かつた。本多忠豊が踏み止つて戦ひ、遂に戦死した。其の間に參河守は逃げ延びることが出来た。そこで忠豊の金の扇の馬じるしを、本陣に置いて、其の忠義を表彰した。松平信定の子清定が、上野に立て籠つて叛いた。初め酒井正親の兄の忠尚は、人をあしざまに讒言したが、成功しなかつたことがあつた。それが爲めに恥ぢて隱居して居た。その忠尚は、出掛けて行つて清定に従つた。參河守は之を攻めた。併し勝つことは出来なかつた。

語釋 佐崎・上輪清・清暇(河)

十五年三月、近臣岩松八彌、入公寢爲逆不成。參河守拔刀逐之。八彌走出。植村

榮安入。遇之橋上。相搏。墮濠。松平信孝提槍來。臨濠曰、「子縱之。我刺之。」榮安曰、「縱則逸。併我刺之。」信孝猶豫。榮安遂斬八彌。九月、參河守自將攻上野。大久保忠俊、姪兒忠世力戰。清定忠尚皆降。置清定于櫻井。令忠尚守上野。時松平信孝負功橫肆。親戚死者、輒并其邑。衆謂復生一信定矣。十六年正月、信孝如駿河。衆請乘其不在。收其邑。從之。信孝至。無所歸。訴之今川氏。今川氏詰參河將士。將士告故。信孝乃走輪田。依松平忠倫。終降織田氏。酒井忠尚復叛。應之。

訓讀 十五年三月、近臣岩松八彌、公の寢に入つて逆を爲す。成らず。參河守刀を抜いて之を逐ふ。八彌走り出づ。植村榮安入る。之に橋上に遇ひ、相搏つて濠に墮つ。松平信孝槍を提げて來り、濠に臨んで曰く、「子之を縱て、我れ之を刺さん」と。榮安曰く、「縱たば即ち逸せん。我を併せて之を刺せ」と。信孝、猶豫す。榮安遂に八彌を斬る。九月、參河守自ら將として上野を攻む。大久保忠俊の姪兒忠世力戰す。清定・忠尚、皆降る。清定を櫻井に置き、忠尚をして上野を守らしむ。時に松平信孝、功を負んで横肆なり。親戚の死する者は、輒ち其の邑を併す。衆、復一の信定を生ずと謂へり。十六年正月、信孝駿河に如く。衆、其の在らざるに乗じて其の邑を收めんと請ふ。之に従ふ。信孝至る。歸る所無し。之を今川氏に訴ふ。今川氏參河の將士を詰る。將士故を告ぐ。信孝乃ち輪田に走り、松平忠倫に依つて、終に織田氏に降る。酒井忠尚復叛て、之に應ず。

通釋 十五年三月、お側附の家來岩松八彌といふ者、酒に酔つて心が狂ひ、公の寢室に押し入つて公を殺さうとした。成功はしなかつた。參河守は刀を抜いて之を追ひ拂つた。八彌は飛び出して逃げた。丁度植村榮安が城に入らうとした。之と橋の上で出會ひ、組討をして濠に墮ちた。松平信孝は槍を取り出して走せ來り、濠をのぞき込んで曰ふには「貴公八彌をはなせよ、自分が一刺で刺し殺して終ふから」と。榮安が曰ふのに「放したら逃げてしまふ。自分と一緒に突き刺して終へ」と。信孝はたぢろいだ。然かし榮安は遂に八彌を斬り殺すことが出来た。九月、參河守は自ら大將となつて上野を攻めた。大久保忠俊の甥の忠世がよく戦つた。清定や忠尙は皆降参した。それで清定を櫻井に居らせ、忠尙には上野を守らせた。其の時松平信孝は手柄を鼻にかけて、我儘勝手をやつた。親戚で死んだ者があると直ぐに其の領地を自分のものにした。それで人々は又一人信定が出たと言ひ合つた。十六年正月、信孝が駿河に出掛けた。人々は其の留守の間に領地を取り上げる様に願つた。參河守はその申出に従つた。信孝は歸つて來た。併し落ちつく處がなかつた。今川氏に此の由を訴へた。今川氏は參河の將士を問ひ詰めた。將士連はその譯を話した。信孝はそこで輪田に遁れ、松平忠倫に頼つて終に織田氏に降参して終つた。酒井忠尙は再び叛いてこれ等と一味になつた。

語釋 酬(音ク。酒に酔) ○櫻井(河參) ○信定至(變事を聞いて來たのである) ○詰(なせ信孝の邑を)

九月、我兵攻信孝、戰于互邑。鳥居忠宗死之。以互賜忠宗、父忠吉、忠吉八世祖忠景、與栗生顯友者、事新田義貞。及敗、共匿于互。至忠吉、與栗生某俱出、仕岡崎公。栗生後爲大番頭。十月、忠倫將導尾張兵、取岡崎。參河守遣刺客殺之。織田信廣代守輪田。益築六砦。參河守乞援於今川義元。義元徵質子。乃以世子竹千代應之。生六年矣。與諸將士質五十餘人、東赴駿河。外舅戶田憲光陰通款尾張。伴以好迎館于觀潮坂。馳使告尾張曰、公欲取參河、則莫若奪是質。信秀大喜、遣其將林正成等赴田原。以錢五百貫賜憲光。岡崎人森平太者、爲正成部卒。潛來我館。戒曰、戶田氏以郎君爲奇貨。公等未之知乎。因告以故。我衆不信。

訓讀 九月、我が兵信孝を攻め、互邑に戰ふ。鳥居忠宗之に死す。互を以て忠宗の父忠吉に賜ふ。忠吉八世の祖忠景、栗生顯友なる者と新田義貞に事ふ。敗るゝに及び共に互に匿る。忠吉に至り、栗生某と俱に出で、岡崎公に仕ふ。栗生、後に大番頭と爲る。十月、忠倫、將に尾張の兵を導いて岡崎を取らんとす。參河守刺客を遣はして之を殺す。織田信廣代つて輪田を守る。六砦を益し築く。參河守援を今川義元に乞ふ。義元、質子を徵す。乃ち世子竹千代を以て之に應ず。生れて六年なり。諸將士の質五十餘人と、東駿河に赴く。外舅戶田憲光、陰に款を尾張に通ず。伴つて好を以て迎へ、觀潮坂に館し、使を馳せて尾張に告げて曰く、「公參河を取らんと欲せば、則ち是の質を奪ふに若くは莫し」と。信秀大に喜び、其の將林正成等を遣はして田原に赴き、錢五百貫を以て憲光に賜ふ。岡崎の人森平太といふ者、正成の部卒と爲り、潛に我が館に來り戒めて曰く、「戶田氏、郎君を以て奇

貨と爲す。公等未だ之を知らざるか」と。因つて告ぐるに故を以てす。我が衆信ぜず。

通釋 九月、我が兵は信孝を攻めて、互邑で戦つた。鳥居忠宗は此の時戦死した。互邑は忠宗の父忠吉に賜はつた。忠吉の八代前の先祖の忠景といふのは、栗生顯友といふ者と一緒に新田義貞に事へた。敗北した時に共に互邑に匿れた。それが忠吉の時になつてから、栗生某といふ者と一緒に岡崎公に出仕したのである。そして栗生は後に大番頭となつた。十月、忠倫は尾張の兵を案内して、岡崎を取らうとした。参河守は刺客をやつて、忠倫を殺して終つた。そこで織田信廣が、代つて輪田を守ることとなつた。それで六ヶ所の砦を増築した。参河守は今川義元に援助を頼んだ。義元は人質を要求した。そこで跡嗣の竹千代をやつて、其の要求に應じた。竹千代は年がやつと六歳であつた。諸將士の人質五十餘人の者と一緒に、東の方駿河に向つた。すると参河守の舅である戸田憲光が、密に尾張方に内通した。伴つて好意を見せて、竹千代等を迎へ、觀潮坂に泊り使を尾張に馳せて知らせて曰ふには、「公が参河を取らうと思ふならば、此の人質を奪つて終ふのが一番良い」と。信秀は大層喜んで部下の將林正成等を田原に遣り、又憲光には錢五百貫を興へた。此の時岡崎の人で、森平太といふ者が、正成の部下の兵卒となつて居たが、密にわが館にやつて来て、曰ふには「戸田氏は若君を食ひ物にしようとして居る。あなた方はまだ知らないのか」と。さうして色々とその譯を物語つた。然し我が將士は其れを信じようとはしなかつた。

語釋 互邑・田原(参河)○信廣(信長)○外舅(廣光の後妻)○觀潮坂(江邊)○奇貨(よいしろもの)

且日、憲光來説曰「此至駿河多、大川、雨而暴漲、不若由海路也。衆從之護世子、上船。

正成乘別船、從其後、轉舵至熱田。岸上有兵、與從船相招。天野康景猶幼、在世子傍。覺變、乃謂其僕曰「平太之言信矣。比上、岸汝亟混敵兵、走歸岡崎、具白所見。」已而上岸。正成納世子於大宮司。康景僕走歸告故。上下大驚。康景之先、亦新田氏遺臣也。已而信秀使至、曰「貴息在西。公宜背東郷西。不則非貴息利。」参河守答曰「欲殺即殺。吾曷以一子故、失信鄰國哉。」信秀怒、錮世子於天王坊。備其艱苦。生母水野氏、再嫁於尾張人久松俊勝、與熱田近。遣家士平野某、竹内某、存問之、給以衣物。

訓讀 且日、憲光來り説いて曰く、「此より駿河に至るは大川多く、雨ふつて暴漲す。海路に由るに若かざるなりと。衆、之に従ひ、世子を護つて船に上る。正成、別船に乗じて其の後に從ひ、舵を轉じて熱田に至る。岸上に兵あり、從船と相招く。天野康景、猶幼なり。世子の傍に在つて、變を覺り乃ち其の僕に謂つて曰く「平太の言、信なり。岸に上る比、汝亟に敵兵に混じ、走つて岡崎に歸り、具に見る所を白せ」と。已にして岸に上る。正成、世子を大宮司に納る。康景の僕、走り歸つて故を告ぐ。上下、大に驚く。康景の先も、亦新田氏の遺臣なり。已にして信秀の使至り、曰く「貴息西に在り。公宜しく東に背いて西に郷ふべし。不らざれば則ち貴息の利にあらず」と。参河守答へて曰く「殺さんと欲せば即ち殺せ。吾れ曷んぞ一子の故を以て、信を鄰國に失はんや」と。信秀怒り、世子を天王坊に錮し、其の艱苦を備にす。生母水野氏、再び尾張の人久松俊勝に嫁す。熱田

と近し。家士平野某竹内某を遣はして之を存問せしめ、給するに衣物を以てせり。

通釋 翌日、憲光が来て曰ふには「此處から駿河に行くには、途中に大川が澤山あつて、それに雨が降つた爲めに川水が溢れて居る。舟で海を渡つた方がよろしい」と。一同はそれに従ひ、世嗣を護りながら船に乗つた。正成は別の船に乗つて、其の後に従ひ、舵の方向を變へて熱田に着いた。すると岸の上に兵士があつた。正成の船と相呼應した。天野康景はまだ幼なかつた。世嗣の側について居ていち早く變事を見抜き、自分の下僕に向つて曰ふには「平太の言つたことは本當であつた。船が岸に着く頃、お前は素早く敵兵の中に紛れ込み、そして岡崎に走り歸つて、詳しく此の様子を申し上げろ」と。やがて船が着いて、一同は岸に登つた。正成は世嗣を熱田の大宮司の家に入れた。康景の下僕が走り歸つて此の由を知らせた。岡崎では上も下も皆非常に驚いた。康景の先祖も、同じく新田氏の舊臣であつた。間もなく信秀の使者が来て曰ふのに「御息は今、西に居られる。公は東の今川氏に背いて西の織田氏に附かれるのが良い。若しさうでないとならば殺して呉れ。自分はどうして一人の息子の爲めに隣國に對して信義を失うやうなことが出来ようか」と。信秀は之を聞いて怒り、世嗣を天王坊に押し込めて、散々苦しみを嘗めさせた。所が世嗣の生みの母水野氏は尾張の人の久松俊勝と再婚して居た。その人の居る所は熱田と近かつた。家來の平野某・竹内某の二人をやつて、世嗣を見舞はせ、着物をやつたりしてゐた。

語釋 多二大川(大井川)〇天王坊(名古屋萬松寺内)

十七年三月、今川義元將兵來援、至安祥、參河守并其前軍、擊尾張兵于小豆坂、走

之。酒井正親獲敵將鳴海大學、而織田信廣猶留守安祥。四月、松平信孝來攻岡崎。大久保忠俊、酒井正親等伏兵射殺之。參河守泣曰「盍生致之」。是月、復擊破尾張兵于重原、遂攻八草、梅坪。信秀自將來、至西野。我兵堅壁不出。信秀悔之、進次柳河。我兵設伏、雨射。長坂信政先馳之。信秀大敗走。信政素以勇著。岡崎公嘗曰「長坂每戰血於槍、因呼曰長坂血槍」。

訓讀 十七年三月、今川義元兵に將として來り援け、安祥に至る。參河守其の前軍を并せ、尾張の兵を小豆坂に撃つて之を走らす。酒井正親敵將鳴海大學を獲たり。而して織田信廣猶留守安祥を守る。四月、松平信孝來つて岡崎を攻む。大久保忠俊、酒井正親等、兵を伏せ、射て之を殺す。參河守泣いて曰く「盍之を生致せざる」と。是の月、復撃つて尾張の兵を重原に破り、遂に八草、梅坪を攻む。信秀、自ら將として來り西野に至る。我が兵、壁を堅くして出でず。信秀、之を侮り、進んで柳河に次す。我が兵伏を設けて雨射す。長坂信政、先之に馳す。信秀、大に敗走す。信政素より勇を以て著る。岡崎公嘗て曰く「長坂は戰ふ毎に槍に血ぬる」と。因つて呼んで長坂の血槍と曰ふ。

通釋 十七年三月、今川義元は大将となつて援けに來り、安祥に着いた。參河守は其の先鋒部隊を并せて、小豆坂で尾張の兵を撃つて、打ち破つた。酒井正親は敵の大將鳴海大學を生捕つた。併し織田信廣はそれでもまだ踏

み止まつて安祥を守つてゐた。四月、松平信孝が岡崎に攻め寄せた。大久保忠俊や酒井正親等が伏兵を設けて信孝を射殺した。すると參河守は泣いて「どうして生捕りにしなかつたのか」と残念がった。此の月、再び重原で尾張勢を打ち破つて、遂に八草や梅坪にまで攻め寄せた。すると信秀は自ら大將となつて乗り出し、西野へやつて来た。我が兵は城壁を固めて出なかつた。すると、信秀は之を輕蔑し、進んで柳河に行つて兵を止めた。我が兵は待ち伏せして、雨霰と矢彈を射掛けた。長坂信政が先頭となつて馳せ向つた。信秀は遂に散々に敗れて落ち延びた。信政といふのは元來勇氣を以て有名な將であつた。岡崎公が或る時、曰ふには「長坂は戦争のある度に槍に血ぬらなければ承知しない」と。それで人々は長坂の血槍と言つてゐた。

重原・八草・梅坪・西野・柳河(參) ○血槍(血槍九郎と稱した)

十八年三月、參河守卒。年二十四。計至熱田。世子哀慕如成人。參河守性猜忌、將士不親。及卒聚議。或曰「與尾張和速迎世子。」或曰「駿河强大。宜修舊好。徐計迎之。」議未決。今川義元聞我喪。曰「織田氏擁孤兒。臨參河。參河必附之。」急遣其將朝比奈泰能、來守岡崎。將士乃附駿河。攻安祥。不利。本多忠豐、子忠高死之。

訓讀 十八年三月、參河守卒す。年二十四。計、熱田に至る。世子、哀慕すること成人の如し。參河守、性猜忌、將士親しまず。卒するに及び聚議す。或は曰く「尾張と和し速に世子を迎へん」と。或は曰く「駿河は強大

なり。宜しく舊好を修め、徐に計つて之を迎ふべし」と。議未だ決せず。今川義元、我が喪を聞いて曰く「織田氏、孤兒を擁して參河に臨まば、參河必ず之に附かん」と。急に其の將朝比奈泰能を遣し、來つて岡崎を守らしむ。將士乃ち駿河に付き、安祥を攻む。利あらず。本多忠豐の子忠高之に死す。

通釋 十八年三月、參河守が亡くなつた。年は二十四であつた。死去の通知が熱田に着いた。世嗣の哀しみ慕ふ様子はまるで大人のやうであつた。參河守は元來性質が邪推深く人を忌む風があつた。それがために將士の親しむ者はなかつた。死んだので集つて相談をした。或る者は曰ふのに「尾張方と和睦して、早く世嗣を呼ぶがよい」と。又或る者は「駿河の方が強い。舊の好を修めゆつくり考を定めてから世嗣を迎へるやうにした方がよい」と言つた。中々相談が決まらないで居た。すると今川義元はこちらの不幸を聞きつけて曰ふには「織田氏が若し、みなし兒を抱へて參河に赴いたならば、參河はきつと織田氏に附くだらう」と。急いで其の將朝比奈泰能を寄越して、岡崎を守らせた。そこで岡崎の將士は駿河方に附いて、安祥を攻めた。併し負けて終つた。本多忠豐の子の忠高は此の時討死した。

十一月、義元益發兵、使僧大原助攻安祥。時信秀已沒、子信長嗣。發兵會戰、遇伏敗走。城兵出救。我兵與援軍夾擊、破之。追北取其郭。信廣僅嬰內城。信長至鳴海、不敢進。大原遣使謂之曰「公坐視信廣。盍以竹千代易之。」信長不許。林正成平手政秀皆諫。乃許之。於是尾張駿河會盟于笠寺。信廣西歸。而嗣君得歸岡崎。居十餘日、往質

于駿河。酒井重忠・天野康景・平岩親吉・阿部正次・高力清長・植村榮政等二十餘人、養卒百餘人從之。義元置之于宮崎、使來島某監焉。遣其兵守參河諸城、以松平重吉・鳥居忠吉監租賦、輸之於駿河。諭將士曰：「竹千代猶幼、我當權領國務、俟其長返、予自是每有兵戰、驅參河人為先鋒、平時命以賤役、將士不敢辭勞、獨願嗣君早還國。嗣君在宮崎、供給甚薄、衣食不足。」鳥居忠吉家素富、常送錢帛、又遣其次子元忠侍之。

訓讀 十一月、義元益々兵を發し、僧大原をして助けて安祥を攻めしむ。時に信秀已に没し、子信長嗣ぐ。兵を發して會戰し、伏に遇うて敗走す。城兵出で救ふ。我が兵援軍と夾み撃つて之を破り、北ぐるを追つて其の郭を取る。信廣僅に内城に嬰る。信長鳴海に至り、敢て進まず。大原使を遣はし之に謂つて曰く、「公坐ながら信廣を視る。盍ぞ竹千代を以て之に易へざる」と。信長許さず。林正成・平手政秀皆諫む。乃ち之を許す。是に於て尾張・駿河、笠寺に會盟し、信廣は西に歸り、而して嗣君は岡崎に歸るを得たり。居ること十餘日、往いて駿河に質たり。酒井重忠・天野康景・平岩親吉・阿部正次・高力清長・植村榮政等二十餘人、養卒百餘人之に従ふ。義元之を宮崎に置き、來島某をして監せしむ。其の兵を遣はして參河の諸城を守り、松平重吉・鳥居忠吉を以て租賦を監し、之を駿河に輸せしめ、將士に諭して曰く、「竹千代猶幼なり。我れ當に權に國務を領し、其の長するを俟つて返し

予ふべし」と。是より兵戰ある毎に、參河の人を驅つて先鋒と爲し、平時は命するに賤役を以てす。將士敢て勞を辭せず。獨り嗣君の早く國に還るを願ふ。嗣君宮崎に在り、供給甚だ薄く、衣食足らず。鳥居忠吉家素より富む。常に錢帛を送り、其の次子元忠を遣はし之に侍せしむ。

通釋 十一月、義元は益々兵隊を繰り出し、僧大原をして助けて安祥を攻めさせた。其の時、信秀は既に死んで、子の信長が後を嗣いでゐた。兵を出して戦ひ、伏兵に遇つて敗れ遁げたと、城内の兵士が出て来て之を救つた。併し我が兵は援兵と夾み撃ちして其れを破り、逃げるのを追ひ掛けて城の外郭を占領した。信廣は辛うじて本丸を守るに過ぎなかつた。信長は鳴海に着き、最早強ひて進まうとはしなかつた。大原は使をやつて曰ふには「貴下はたゞちつとして信廣を棄てる氣で居られる。何故竹千代と交換しないのか」と。信長は聽かなかつた。けれども林正成や平手政秀等が皆それを諫めた。それで遂に信長は承知した。そこで尾張方(織田)と駿河方(今川)とが笠寺に集つて盟をなし、信廣は西に歸り、世嗣の君は岡崎に歸ることが出来た。併し世嗣の君は岡崎に居ること十日餘りで、今度は駿河に人質となつて往つた。酒井重忠・天野康景・平岩親吉・阿部正次・高力清長及び植村榮政等の二十餘人と小もの百人餘の者が附き従つて行つた。義元は之を宮崎に住まはせ、來島某といふ者に監督させた。又其の兵を派遣して參河の諸城を守らせ、松平重吉と鳥居忠吉に租税を監督させ、その租税は駿河に送り届けさせ、そして將士に諭して曰ふには「竹千代はまだ幼少である。自分が一時、國の政務を預り、竹千代が成人した暁はきつと返してやる」とこの後は戰爭がある度に、參河人を使つて先鋒となし平生は賤しい役に當て、使つた。參河の將士は決して骨折を惜まなかつた。只々世嗣の君が早く生長して國に還るのを願ふばかりであつた。世嗣の君は宮崎では手當が非常に少なく衣食も不充分であつた。鳥居忠吉は其の家元來金持である。いつも

金錢や着物を仕送し、又次男の元忠をやつて仕へさせた。

語釋 坐視(信廣の危險を救ひもし) ○養卒(召し使ひ) ○宮崎(駿河)

二十年、嗣君甫十歳。五月五日、出遊安倍河原、觀兒童石戰。一群百五十人、一群倍之。觀者爭就其衆者。嗣君在僕背。命就其寡者。僕怪問故。嗣君曰「衆者自恃其衆、寡者自知其寡、寡者勝矣」果如其言。義元聞之曰「所謂將門出將者也」。二十三年、嗣君始撰甲。弘治元年、義元出兵尾張、攻蟹江。松平眞乘、大久保忠俊等七人力戰。二年正月、嗣君加元服。義元爲賓、使其族將關口親永理髮、命名元信、稱次郎三郎。妻以親永女。參河將士來賀。或獻駿馬。乃納諸將軍。足利義輝賜手書及佩刀。僧大原義元庶父爲清見寺主、而數將兵。嗣君從讀書史、受兵法焉。二月、松平義春代嗣君統師攻奥平貞延于日近。死之。嗣君聞之、澀泣嘆惜。左右感動。義元又城福釜、使酒井忠次等八將守之。尾張將柴田勝家來攻。大久保忠世、弟忠佐等善戰、幾得勝家。

二十年、嗣君甫めて十歳。五月五日、出で、安倍河原に遊び、兒童の石戰を觀る。一群は百五十人、一

群は之に倍す。觀る者争うて其の衆き者に就く。嗣君僕背に在り。命じて其の寡き者に就かしむ。僕怪みて故を問ふ。嗣君曰く「衆き者は自ら其の衆を恃み、寡き者は自ら其の寡を知る。寡き者勝たん」と。果して其の言の如し。義元、之を聞いて曰く「所謂將門將を出す者なり」と。二十三年、嗣君、始めて甲を撰す。弘治元年、義元、兵を尾張に出し、蟹江を攻む。松平眞乘、大久保忠俊等七人力戰す。二年正月、嗣君元服を加ふ。義元、賓と爲り、其の族將關口親永をして髮を理めしめ、名を元信と命じ、次郎三郎と稱し、妻はすに親永の女を以てす。參河の將士來り賀す。或人駿馬を獻す。乃ち諸將を將軍足利義輝に納る。手書及び佩刀を賜ふ。僧大原は義元の庶父なり。清見寺の主と爲り、而して數兵に將たり。嗣君、從つて書史を讀み、兵法を受く。二月、松平義春、嗣君に代つて師を統べ、奥平貞延を日近に攻めて、之に死す。嗣君之を聞き、泣を澀いで嘆惜す。左右感動す。義元又福釜に城き、酒井忠次等の八將をして之を守らしむ。尾張の將柴田勝家來り攻む。大久保忠世の弟忠佐等善く戰ひ、幾ど勝家を得んとす。

二十年、世嗣の君が漸く十歳になつた。五月五日、安倍河原に出て遊び、近所の子供等の石合戦を見物した。片方は百五十人位で、他の方はその倍位あつた。見物の子供等は我れ先きにと其の多い方に味方した。嗣君は下郎に負ぶさつて居た。指圖して同勢の少い方に味方させた。下郎が不思議に思つて、其の理を伺つた。嗣君が曰ふには「味方の多い方は、人數の多いのを恃んで氣が弛み、少い方は初めから其の少いのを知つて、力を盡す。少い方がきつと勝つだらう」と。果して其の言葉の通りであつた。義元は此の事を聞いて曰ふには「よく世間で言ふ大將の家に大將が生れるといふ通りだ。種は争はれないものだ」と。二十三年に嗣君が始めて鎧の着初めをした。弘治元年に義元は尾張に兵を出して、蟹江を攻撃した。松平眞乘や大久保忠俊等の七人の將が力を

盡して戦つた。二年正月、嗣君が元服の式を擧げた。義元が烏帽子親となり、其の一族の大將關口親永に髪を上げる役をさせ、本名を元信と名づけ、通稱を次郎三郎と言ひ、そして親永の娘を妻とさせた。參河の將士連は駿河へやつて来てお喜びを申し上げた。其の中で或る人が立派な馬を獻上した。そこでこれを時の將軍足利義輝に獻納した。將軍家からは自筆の手紙と太刀を下された。僧大原は義元の叔父である。清見寺の住持をしてゐたが、度々大將となつてゐた。嗣君は此の人について經書や歴史の書物を習ひ、又兵法も授けられた。二月、松平義春は嗣君に代つて兵隊を統べ、日近といふ所で奥平貞延を攻めたが戦死した。嗣君はこの事を聞いて涙を流して嘆き惜まれた。左右につき従ふ者も深く心を動かされた。義元は再び福釜に城を築いて、酒井忠次などの八人の大將に其處を守らせた。尾張の將柴田勝家が攻め寄せた。大久保忠世の弟の忠佐等が善く戦つて、殆ど勝家を生捕りにする所であつた。

〔語釋〕 安倍河原(駿河) ○將門出將(史記孟嘗君) ○弘治(後奈良天皇) ○蟹江(尾張) ○日近・福釜(參河)

是歲、嗣君年十六。從容謂義元曰、「僕幼離國、流寓尾張。駿河有年於此矣。願得一歸郷里、拜掃先人墳墓也。」義元許之。於是始歸岡崎。參河父老聞而大喜、爭出迎之。駿河將山田某在內城、嗣君避之入外城、以延見將士。鳥居忠吉離次進、握嗣君手曰、「臣老矣、不能效驅馳。特爲郎君置倉廩、時糧食。郎君以此多養兵士、揚武四方。臣或保餘年、猶得親目之。」因嗚咽而泣。嗣君亦泣。嗣君於是更名元康、稱藏人。三年春、復如駿河。

〔訓讀〕 是の歲、嗣君年十六。從容として義元に謂つて曰く、「僕、幼より國を離れ、尾張・駿河に流寓すること此に年あり。願はくは一たび郷里に歸り、先人の墳墓を拜掃するを得ん」と。義元之を許す。是に於て、始めて岡崎に歸る。參河の父老聞いて大に喜び、争ひ出で、之を迎ふ。駿河の將山田某、内城に在り。嗣君之を避けて外城に入り、以て將士を延見す。鳥居忠吉、次を離れて進み、嗣君の手を握つて曰く、「臣老いたり。驅馳を效す能はず。特に郎君の爲に倉廩を置いて糧食を時む。郎君此を以て多く兵士を養ひ、武を四方に揚げよ。臣或は餘年を保ち、猶親しく之を目するを得ん」と。因つて嗚咽して泣く。嗣君も亦泣く。嗣君、是に於て、名を元康と更め藏人と稱す。三年春、復駿河に如く。

〔通釋〕 此の年、嗣君は年十六歳であつた。ゆつくり落着いた態度で、義元に向つて曰ふには、「私は幼年の頃から國を離れて、尾張や駿河に人質となつて、渡り歩くこと随分久しいものです。どうぞ一度郷里に立ち歸つて父の墓參を致させて下さいませぬか」と。義元は快よく之を許した。こゝに始めて岡崎に歸ることが出来た。參河の年寄連は嗣君がお歸りになると聞いて非常に喜び、先きを争つてお出迎へをした。其の時駿河の大將山田某といふ者が本丸に止まつて居た。嗣君はそれを避け、二の丸に入つて將士連と面會した。鳥居忠吉は列を離れて進み出で、嗣君の手を取つて曰ふには、「私はもう年を取つて終ひました。戦場で働くことは出来ませぬ。唯若君の爲めに米倉を設けて兵糧を貯へて置きました。どうか若君はこれを以て兵士を澤山養ひ、そして武名を四方

に轟かせて下さい。私が若し生き永らへて居りましたならば、或は其の時の御様子を拜見することも出来ませう」と。さう言つて咽び泣いた。嗣君も亦老臣の心を察して涙を流した。嗣君は此の時名前を元康と改め、藏人と稱した。三年春、再び駿河に人質となつて歸つて行つた。

〔語釋〕 元康(元は今川義元の偏名を取つたのであつたが、元と清康の康を取つたのであつたのである。)

永祿元年、義元謂嗣君曰「西參河公舊領也。而其諸城多叛歸信長。子盍擊而復之。」嗣君曰「固所願也。」二月、岡崎盡會宗族將士議戰。先攻寺部、縱火外郭。城將鈴木重教出戰、不決。本多重次先登、其一子二弟皆死。嗣君勵衆奮前、擊走重教。斬首百餘級。遂攻廣瀨。信長遣其將津田兵庫來救。大久保忠世與鬪、斬之。石川清兼說曰「郎君始臨陣、兩戰兩勝。斯已多矣。宜全勝養威也。」乃凱旋岡崎。使松平家次守品野。三月、尾張兵攻之。家次夜襲、擊獲五十餘人來獻。後松平信一代守、又襲敗敵兵。四月、嗣君復如駿河。義元遺佩刀賀捷、納山中邑三百貫。是冬、本多廣孝、石川清兼、天野景隆、往請義元曰「小主人漸長。願如約。」義元諾而未果。二年三月、關口氏生世子信康。

永祿元年、義元嗣君に謂つて曰く「西參河は公の舊領なり。而るに其の諸城多く叛いて信長に歸す。子盍ぞ撃つて之を復せざる」と。嗣君曰く「固より願ふ所なり」と。二月岡崎に歸り、盡く宗族・將士を會して戰を議す。先寺部を攻めて、火を外郭に縱つ。城將鈴木重教出で戦ひ、決せず。本多重次先登し、其の一子・二弟、皆死す。嗣君、衆を勵まして奮ひ前み、撃つて重教を走らす。首を斬ること百餘級。遂に廣瀨を攻む。信長其の將津田兵庫を遣はして來り救ふ。大久保忠世、與に鬪つて之を斬る。石川清兼説んで曰く「郎君始めて陣に臨み、兩戰兩勝す。斯れ已に多し。宜しく勝を全うして威を養ふべし」と。乃ち岡崎に凱旋す。松平家次をして品野を守らしむ。三月、尾張の兵之を攻む。家次、夜襲撃し、五十餘人を獲て來り獻す。後に松平信一代つて守り又襲つて敵兵を敗る。四月、嗣君復駿河に如く。義元、佩刀を遣つて捷を賀し、山中邑三百貫を納る。是の冬、本多廣孝・石川清兼・天野景隆、往いて義元に請うて曰く「小主人、漸く長ぜり。願はくは約の如くせん」と。義元諾して未だ果さず。二年三月、關口氏、世子信康を生む。

〔通釋〕 永祿元年、義元は嗣君に向つて曰ふのに「西參河は貴公の舊領地である。而るに其處の諸城は皆叛いて信長に従つて居る。貴下はどうして之を攻撃して取り戻さないのだ」と。嗣君が曰ふには「前から考へて居たところですよ」と。二月、岡崎に歸つて、一族の者や將士連を全部集めて戰の相談をした。先づ最初に寺部を攻めて城の外圍ひに火をつけた。城の大將鈴木重教は城を出て戦つたが勝負が決まらなかつた。本多重次は眞先に攻め寄せ、其の一人の子、二人の弟は討ち死した。すると嗣君は味方を勵まして勇氣を奮ひ進み、散々攻撃して重教を伐ち退けた。此の時首を斬つた數が百餘りであつた。その勢で廣瀨に迫つた。信長はその將の津田兵庫を遣はして助けさせた。大久保忠世が之と戦つて斬り捨てた。石川清兼は喜んで曰ふには「若君は初陣であるのに

二度戦つて二度とも立派に勝たれた。此れでもう澤山だ。此の上は大勝利に疵をつけないで、威勢を張るやうにしたがよい」と。そこで岡崎に凱旋した。松平家次に品野を守らせた。三月、尾張の兵が之を攻めて来た。家次は夜中に敵を襲ひ、五十人餘りの兵を生捕り、岡崎に来て之をお目に掛けた。その後、松平信一が代つて守つたが、此の人も亦敵を襲撃して破つた。四月、嗣君は又々駿河に行つた。すると義元は太刀を呉れて勝利を祝ひ、又山中邑のあがり三百貫を與へることにした。此の冬、本多廣孝・石川清兼及び天野景隆の三人が、駿河に来て義元に願つて曰ふには「若主人も漸く大人となりました。どうかお約束の通りに、參河を返して下さい」と。義元は承知はしたが、その儘にしてまだ約を果さないであつた。二年三月、夫人の關口氏が後目相續となるべき信康を出産した。

語釋 永祿(正親町天皇の年號) ○關口氏(嗣君の妻)

義元時、有西上之志。織田信長聞之、修鷲津・丸根・大高・沓掛・鳴海・梅坪・寺部諸城、分兵守之。鳴海・大高・沓掛、皆降於義元。義元遣鶴殿長持守大高、岡部長教守鳴海。已而大高告糧竭。義元使嗣君納糧焉。而城左右皆敵寨。衆難之。嗣君時年十八。以千騎護運而往。值信長在鳴海。使鳥井信吉・杉浦勝吉等候視之。信吉曰「敵欲邀戰。」勝吉日「彼不下山。是不欲戰也。」嗣君然之。乃分兵爲向寺部・梅坪・縱火邑里。鷲津・丸根、兵望烟馳援。嗣君則以麾下八百爲三隊、納糧大高。收兵而還。信長視我陣整、不敢犯。是歲、嗣君再徇西參河、復赴駿河。

訓讀 義元時に西上の志あり。織田信長之を聞いて、鷲津・丸根・大高・沓掛・鳴海・梅坪・寺部の諸城を修め、兵を分つて之を守る。鳴海・大高・沓掛、皆義元に降る。義元、鶴殿長持を遣はして大高を守り、岡部長教をして鳴海を守らしむ。已にして大高、糧竭くるを告ぐ。義元、嗣君をして糧を納れしむ。而るに城の左右は皆敵寨なり。衆、之を難んず。嗣君時に年十八。千騎を以て運を護つて往く。信長の鳴海に在るに値ふ。鳥井信吉・杉浦勝吉等をして之を候視せしむ。信吉曰く「敵邀へ戦はん」と欲す」と。勝吉日く「彼れ山を下らず。是れ戦を欲せざるなり」と。嗣君、之を然りとし、乃ち兵を分つて寺部・梅坪に向ふ爲して、火を邑里に縦つ。鷲津・丸根の兵烟を望んで馳せ援く。嗣君則ち麾下八百を以て三隊と爲し、糧を大高に納れ、兵を收めて還る。信長、我が陣の整ふを視て、敢て犯さず。是の歳、嗣君、再び西參河を徇へ、復駿河に赴く。

通釋 其の頃、今川義元は京都へ討つて上らうとする志があつた。織田信長は之を知ると、鷲津・丸根・大高・沓掛・鳴海・梅坪・寺部などの諸城を修繕し、兵隊を分けて守つた。鳴海や大高・沓掛などの城は、いづれも義元に降服した。義元は鶴殿長持をやつて大高の城を、又岡部長教には鳴海の城を守らせた。暫くすると、大高城で兵糧が無くなつたことを通じて来た。義元は嗣君に兵糧を届けさせることにした。然るに城の左右は皆敵方の壘であつた。人々は非常に六ヶ敷いことだと思つた。嗣君は其の時、年十八歳であつた。千騎を率ゐて運送の兵糧を護つて行つた。すると信長が鳴海に居るのに出會つた。鳥井信吉や杉浦勝吉等に其の様子を視させた。信吉が曰

ふには「敵は迎へ撃たうとするやうである」と。勝吉が曰ふには「敵は山を下りて来ない。戦はうとするのではない」と。嗣君は勝吉の言に賛成して、そこで兵を分けて寺部と梅坪に向ふ真似をして村里に放火した。鷺津や丸根の敵兵は烟の揚るのを見て、走つてそちらの方へ援けに行つた。嗣君は其の際に乗じて、部下の兵八百人を三隊に分け、兵糧を大高に納め、そして兵を纏めて歸還した。信長は、こちらの陣形が立派に整つて居るのを見て、強ひて攻め寄せようとはしなかつた。此の年、嗣君は二度目の西叡河平定をやつて、そしてまた駿河に歸つて往つた。

三年五月、義元將四萬騎攻信長至池鯉鮒使嗣君攻丸根城城兵爭出嗣君曰「彼寡於我當守而戰是決死也我撓以弓銃乘機拔之可也」既而前鋒戰酣麾下繼之遂斬城將佐久間盛重贇氏信先登遂拔其城駿河將朝比奈泰能亦拔鷺津義元既取諸城以大高當敵衝欲得一勇將守之問之於衆衆曰「松平藏人其人」乃使嗣君守大高而自進陣桶峽恃勝不設備信長乘風雨潛兵自間道襲擊義元敗死其諸將聞變皆走駿河兵在大高者亦逃亡

三年五月、義元四萬騎に將として信長を攻め、池鯉鮒に至り、嗣君をして丸根城を攻めしむ。城兵争ひ出づ。嗣君曰く「彼、我より寡し。當に守るべくして戦ふは、是れ死を決するなり。我れ撓すに弓銃を以てし、

機に乗じて之を抜く、可なり」と。既にして前鋒、戰酣なり。麾下之に繼ぎ、遂に城將佐久間盛重を斬る。贇氏信、先登し、遂に其の城を抜く。駿河の將朝比奈泰能も亦鷺津を抜く。義元既に諸城を取り、大高は敵の衝に當るを以て、一勇將を得て之を守らしめんと欲す。之を衆に問ふ。衆曰く「松平藏人は其の人なり」と。乃ち嗣君をして大高を守らしめ、而して自ら進んで桶峽に陣す。勝を恃み備を設けず。信長風雨に乗じ、兵を潛めて間道より襲撃す。義元敗死す。其の諸將、變を聞いて皆走る。駿河の兵の大高に在る者も亦逃亡す。

三年五月、義元は四萬騎を從へて、信長を攻め、池鯉鮒に到着して、嗣君に丸根城を攻撃させた。城の兵は無二無三に出て戦はうとした。嗣君が曰ふには「敵は味方より小勢である。城に立て籠つて戦ふのが當然であるのに、今城を出て戦ふといふ其の戦法は、正に決死の覺悟だ。故に弓や鐵砲を射掛けて之をへこまし、隙を見て城を落すがよるしい」と。時間が経つにつれて、前衛隊は盛に火花を散らして戦ひ真最中であつた。それから部下の兵も前鋒に續いて大いに戦ひ、遂に城の守將佐久間盛重を斬り殺し、贇氏信が眞つ先きに城に登つて、遂に其の城を陥落させた。駿河の大將朝比奈泰能も鷺津城を攻め抜いた。今川義元は此の時既に多くの城を占領したのであつたが、其の内で大高城は敵の攻め寄せて来る真正面に當るので、誰か勇猛な大將に此處を守らせたいと考へた。之を人々に相談した。多くの人が曰ふには「松平藏人こそ、打つてつけの人だ」と。其の議に従つて嗣君に大高を守らせ、そして自身は桶狭に進んで陣を構へた。然るに今迄の勝利に心が驕つて、嚴重な備へを設けなかつた。信長は荒れ狂ふ風雨を利用し、近道から軍隊をこっそり進め、出し抜けに襲ひ撃つた。義元は敗れ討死した。部下の大將連は此の變事を聞き傳へると一同逃げ腰になつた。駿河の兵で大高城を守つて居た者もさつさと引上げた。

我將士說嗣君曰「今川公既死。我獨爲誰守。不若全兵而歸也。」嗣君曰「當審其實。然後班師。急遽解走。而事若出謬傳。則貽笑天下矣。」水野信元在刈谷。私使來告曰「信長獲義元將。遂復諸城。宜乘夜速去。」嗣君曰「水野雖我舅氏。而敵部將也。未可輕信。遣人偵之。報曰「信矣。」衆爭勸還。嗣君曰「夜行恐失道。宜俟月出。彼能來。我亦能戰。」頃之月出。乃整兵東還。土寇爭起。本多百助數返戰。達于今村。將入岡崎城。以爲義元在時。未有還我之言。今乘其死取之不義也。駐軍于大樹寺。三日。駿河成兵棄城去。嗣君曰「彼棄而我取可矣。」二十三日遂入。

訓讀 我が將士嗣君に説いて曰く「今川公既に死す。我れ獨り誰の爲めに守らん。兵を全うして歸るに若かざるなり」と。嗣君曰く「當に其の實を審にして然る後に師を班すべし。急遽解走して、事若し謬傳に出づれば則ち笑を天下に貽さん」と。水野信元刈谷に在り。私に來り告げしめて曰く「信長義元を獲て、將に遂に諸城を復せんとす。宜しく夜に乗じて速に去るべし」と。嗣君曰く「水野は我が舅氏なりと雖も而も敵の部將なり。未だ輕しく信すべからず」と。人を遣はして之を偵はしむ。報じて曰く「信なり」と。衆争つて還るを勸む。嗣君曰く「夜行は恐らくは道を失はん。宜しく月の出づるを俟つべし。彼れ能く來らば、我れ亦能く戰はん」と。

頃して月出づ。乃ち兵を整へて東に還る。土寇争ひ起る。本多百助、數く返り戦ひ、今村に達す。將に岡崎城に入らんとす。以爲へらく、義元在る時、未だ我に還すの言あらず。今其の死に乗じて之を取るは、不義なり」と。軍を大樹寺に駐むること三日、駿河の成兵城を棄て、去る。嗣君曰く「彼れ棄て、我れ取るは、可なり」と。二十三日、遂に入る。

通釋 我が將士は嗣君に説いて曰ふのに「今川公が最早歿なされました。今、我々丈が、誰れの爲めに此處を守る必要がありませんか。斯くなる上は兵を害ふことなく、歸るのが一番の策であります」と。嗣君が曰ふには「必ず、今川氏が死んだといふ眞實を突き止めてから、軍隊を引き上げるやうにしなければならぬ。急ぎあわて、逃げて、若し誤傳だと判つたなら、天下の物笑ひとなるだらう」と。水野信元は其の時刈谷に居つた。密に使を寄越して曰ふには「信長は義元を打ち取つて、これから段々諸城を恢復しようとして居る。だから夜を利用して急いで去るのがよいと思はれる」と。嗣君は「水野は自分の叔父ではあるが、然かもれつきとした敵方の一方の大將である。故に其の言を輕々しく信することは出来ない」と。人をやつて様子を探させた。その報告に「實際のことです」とあつた。人々は喧しく歸ることを勧めた。嗣君は「夜の行軍は或は道に迷つたりするから、月の出るのを待つて出發するのがいゝ。彼が勇敢に進んで來たら、こちらも勇敢に戦ふまでだ」と言ひ切つた。暫くすると月が登つた。そこで兵を揃へて東を指して歸途に着いた。すると其の士兵がわれ勝ちに起つて伐つてかかつた。本多百助が何度も引き返して之と戦ひ、其の内に本隊は今村に到着し將に岡崎城に入らうとした。其の時嗣君は考へるのに、義元がまだ存生中には、岡崎を自分に返すといふ話は無かつた。それなのに今其の死を幸として岡崎を取るといふことは、誠に義理を缺くことである。そこで、大樹寺に軍隊を止めて置くこと三日に及

んだ。駿河方の岡崎城を守つて居た兵が、城を棄て、引き上げた。嗣君が曰ふには「彼が城を捨てた後で、自分が此の城を取るのには、何等差支がない」と。二十三日遂に岡崎に入城した。

語釋 今村(河)

嗣君六歳出國十四年而得復歸焉。士民謹呼國內諸城主來謁者相踵於門而其屬織田氏者不肯降。嗣君乃將兵攻舉母梅坪廣瀨廣瀨兵距于拂楚坂我兵奮擊走之遂攻沓掛縱火城下而還城兵追躡大久保忠俊殿而還鳥居元忠有首功。嗣君欲賞之以功狀辭曰「功狀者游士所以藉口也。臣矢不事二君莫用功狀爲也。」

訓讀 嗣君、六歳にして國を出で、十四年にして復歸るを得たり。士民謹呼し、國內の諸城主來り謁する者、門に相踵ぐ。而れども其の織田氏に屬するものは、肯て降らず。嗣君乃ち兵に將として舉母・梅坪・廣瀨を攻む。廣瀨の兵、拂楚坂に距ぐ。我が兵、奮撃して之を走らせ、遂に沓掛を攻め、火を城下に縱つて還る。城兵、追躡す。大久保忠俊殿して還る。鳥居元忠首功あり。嗣君之を賞するに功狀を以てせんと欲す。辭して曰く「功狀は游士の口を藉る所以なり。臣矢つて二君に事へず。功狀を用ふるを爲す莫れ」と。

通釋 嗣君は六歳の時に國を出で、十四年間に人質として過して、今再び自國に歸ることが出来たのである。いづれの階級の人々も喜んで嗣君を迎へ、又國內の澤山の城主で岡崎に來て拜謁する者は、城門に引き續いた。併し國內の城主でも、織田氏に従つて居る者は中々降服しなかつた。嗣君は大將となつて舉母・梅坪・廣瀨の諸城を

攻めた。廣瀨の兵は拂楚坂といふ所で食ひ止めようとした。併し我が兵は奮ひ戰つて、其の兵を走らせ、遂に沓掛に攻め寄つて城下に火をつけて返つた。城の兵は後を追つて來た。大久保忠俊が殿を引き受けて戻つて來た。此の時鳥居元忠が第一番の手柄を立てた。嗣君は感狀をやつて賞めようとした。これを斷はつて曰ふには「感狀といふものは、浪人が仕官を求める口實にするものです。私は誓つて二君に仕へることは致しませぬ。どうか感狀を與へるといふことは、控へて下さい」と。

語釋 拂楚坂(河)

六月、信長謂水野信元曰「吾既獲義元、以爲子之甥、當不戰而降。今乃強項如此。信元恐嫌疑、發兵攻岡崎。嗣君邀戰于石瀨、兩軍皆相識。故接戰尤厲。松井忠次傷股于銃。進斬其銃卒。明日戰刈谷下、交綏。復攻寺部、舉母、皆拔之。進至山中、攻醫王山。久松俊勝先登。敵以槍鏃其肩。俊勝舉刀截槍幹、入寨縱火。衆繼之。遂取寨。嗣君乃使人言於義元子氏真曰「公爲先公一戰、僕請先焉。」不答。氏真昏懦。嬖臣三浦義鎮、義鎮生父小原鎮實、竝專國政、讒德川氏有異心。氏真又視岡崎勢寢熾、有猜防之心。四年二月、水野信元來侵。復邀戰石瀨、破之。遂攻廣瀨、伊保、板倉重定、據中島。

不下。遣松平好景攻之。重定退保岡城。遂走佐脇。乃以其邑賞好景。

六月、信長、水野信元に謂つて曰く「吾れ既に義元を獲て、以爲へらく、子の甥は當に戦はずして降るべしと。今乃ち強項なること此くの如し」と。信元嫌疑を恐れ、兵を發して岡崎を攻む。嗣君石瀨に邀へ戦ふ。兩軍皆相識る。故に接戦尤も厲し。松平忠次股を銃に傷け、進んで其の銃卒を斬る。明日、刈谷の下に戦ひ、交綏す。復寺部・舉母を攻めて、皆之を抜き、進んで山中に至り、醫王山の寨を攻む。久松俊勝先登す。敵、槍を以て其の肩を鏃す。俊勝刀を擧げて槍幹を截り、寨に入つて火を縱つ。衆之に繼ぐ。遂に寨を取る。嗣君乃ち人をして義元の子氏眞に言はしめて曰く「公、先公の爲に一戦せよ。僕、請ふ、先たらん」と。答へず。氏眞、昏懦なり。斐臣三浦義鎮、義鎮の生父小原鎮實並に國政を專にし、徳川氏異心有るを讒す。氏眞又岡崎の勢、濠く熾なるを視て、猜防の心あり。四年二月、水野信元來り侵す。復石瀨に邀へ戦つて之を破り、遂に廣瀨・伊保を攻む。板倉重定中島に據つて下らず。松平好景を遣はして之を攻めしむ。重定、退いて岡城を保ち、遂に佐脇に走る。乃ち其の邑を以て好景を賞す。

六月、信長は水野信元に向つて曰ふには「自分は既に義元を滅したので、お前の甥(參河の嗣君)などは、戦はずに降参して來ると思つて居た。今此の様に強情を張つて、頭を下げて來ない」と。信元は疑はれるのを恐れて、兵を發して岡崎に攻め寄せた。嗣君は石瀨に迎へ撃つた。兩軍共に皆顔見知りであつた。その爲めに撃ち合ひが非常に猛烈であつた。松平忠次は、鐵砲で股をやられた。進んで自分を打つた銃卒を斬り殺した。翌日、刈谷の城下に戦つて相引きになつた。再び寺部や舉母を攻めて皆之を陥れ、進んで山中に行つて醫王山の

取手を攻めた。久松俊勝が先頭に立つた。敵は楯で其の肩を刺した。すると俊勝は肘を振り上げて、楯の柄を切り、壘の中に入つて火を放した。人々が之に續いて登つた。遂に此壘を占領して終つた。嗣君はそこで義元の子である氏眞の所へ、人をやつて曰はせるには「貴下は父君の爲めに、甲合戦をしなさい。其の時は私は先鋒を承りませう」と。併し返答はしなかつた。元來氏眞は愚かで心が弱い。お氣に入りの家來三浦義鎮と、其の生みの親小原鎮實が二人で國の政治を勝手氣儘に料理し、徳川方が謀反の心を持つて居ると、あしざまに告げ口をした。氏眞自身も亦、岡崎の勢が日に盛になるのを見て、そねんだり用心したりする氣持が有つたのである。四年二月、水野信元が侵入して來た。又々之を石瀨に迎へ撃つて破り、遂に廣瀨や伊保を攻め圍んだ。板倉重定は中島に立て籠つて容易に下らなかつた。それで松平好景をやつて之を攻めさせた。重定は退いて一時岡城を保つたが、遂に佐脇に逃げた。そこで重定の領分を好景に賞として與へた。

石瀨・醫王山・中島・佐脇(河參)

信長素有霸心。欲出兵京畿。而武田信玄在甲斐。北條氏康在相摸。皆窺其後。信長患之。會水野信元往說之。曰「僕甥以氏眞故。抗於尾張。其實怨氏眞。可誘爲我黨。而彼雖小弱。天質剛銳。必不肯請和。公以力取之。恐費歲月。不若自我結和。使彼當東面。而公專略其西。霸業成矣。」信長大喜。曰「是得我心。」乃使瀧川一益來就石川數正。求和。信元又使使來勸之。嗣君召諸將士議之。酒井忠次曰「我以微力。介二大國。而

圖自立焉。非便計也。氏真忘仇廢武沈溺酒色。不足與有爲明矣。與信長和便。嗣君曰「念固如何可背舊好乎。」

信長素より霸心有り。兵を京畿に出さんと欲す。而して武田信玄は甲斐に在り、北條氏康は相模に在つて、皆其の後を窺ふ。信長、之を患ふ。會、水野信元往いて之に説く。曰く「僕の甥、氏眞の故を以て尾張に抗す。其の實は氏眞を怨む。誘つて我が黨と爲すべし。而して彼れ小弱と雖も、天質剛銳、必ず和を請ふを肯せず。公、力を以て之を取らば、恐らくは歳月を費さん。我より和を結ぶに若かず。彼をして東面に當らしめ、而して公は専ら其の西を略せば、霸業成らん」と。信長、大に喜んで曰く「是れ我が心を得たり」と。乃ち瀧川一益をして來つて石川數正に就いて和を求めしむ。信元、又使をして來つて之を勧めしむ。嗣君、諸將士を召して之を議す。酒井忠次曰く「我れ微力を以て二大國に介し、而して自立を圖る。便計に非るなり。氏眞、仇を忘れ武を廢して、酒色に沈溺す。與に爲すあるに足らざるや、明なり。信長と和する便なり」と。嗣君曰く「念ふに固より如何ぞ舊好に背くべけんや」と。

通釋 信長はもとく天下に覇を唱へたいといふ志があつた。畿内地方に軍隊を繰り出したと思つてゐた。武田信玄が甲斐に居り、又北條氏康が相模に居て、いづれも信長の後を狙つて居た。信長は之を心配して居た。すると偶然水野信元が來て説いて曰ふには「私の甥は氏眞の爲めに尾張に敵對をして居ります。併し其の本心は却つて氏眞を怨んで居るのでありますから、誘つて此方の仲間とすることが出来ます。彼は年は若いけれども、生れつき氣強く又素早いから、きつと和睦を自分から願ふことは出来ますまい。然し公が力づくで之を取らうとすれば

相當長い月日を費してやう。今はこちらから和睦を結ぶに越したことはありません。そして彼に頼むが、武田や北條に當らせ、公は専心西の方を平定なされば、お望みの霸業は出来るだらうと思ひます」と。信長は大層喜んで曰ふのに「これこそ、自分の思ふ通りだ」と。そこで、瀧川一益をやつて、石川數正のところに行つて和睦を求めさせた。信元も別に使を出して和睦をすゝめさせた。嗣君は諸將士を集めて此の事を相談した。酒井忠次が曰ふには「我が國は微力で、駿河・尾張の二大國の間に挟まれ、而かも獨立しようと圖つてゐます。これは都合の良いことではありません。然るに駿河の氏眞は親の仇を忘れ、武備を固めず、酒や女に溺れ浸つて居ります。共に力を合せて、事をするには足りない人間であるのは、明らかなことであります。ですから、信長と和睦を結ぶ方が都合の良いことです」と。すると嗣君が曰ふに「併しさうはいふものゝ、昔の好みに背くことは出来ないと思ふ」と。

石川家成・酒井正親曰「忠次言是也。嚮義元伴爲好意。歲收我食。月戰我兵。而每饑我於敵鋒。丸根・大高之事、可以見已。宜速許尾張矣。質之在駿河者、取之非難。氏眞重與我絶。必不能害也。嗣君曰「及吾幼時、我舊臣多膏鋒鏑。吾常傷於心。因泣下。終許和。信長大喜。定國界。解兵戍。遂請嗣君來盟。許之。酒井忠尚在上野。聞之。恐其質之死于駿河也。乃來說曰「信長意難測。可和不可往。今君室家皆在駿河。彼何信我

乎。嗣君曰「業已定約。不當背也。忠尚不憚。乃去。左右慮其反。請追而誅之。嗣君曰「彼言自有理。且未必反。忠尚稱疾不出。」

訓讀 石川家成・酒井正親曰「忠次の言是なり。嚮に義元、伴つて好意を爲し、歳に我が食を收め、月に我が兵を戦はせ、而して毎に我を敵鋒に餒す。丸根・大高の事、以て見るべきのみ。宜しく速に尾張に許すべし。質の駿河に在るもの、之を取るは難きに非ず。氏真、我と絶つを重んず。必ず害する能はざるなり」と。嗣君曰く「吾れ幼時に及び、我が舊臣多く鋒鏑に膏す。吾れ常に心に傷む」と。因つて泣下る。終に和を許す。信長、大に喜び、國界を定め、兵成を解き、遂に嗣君の來盟を請ふ。之を許す。酒井忠尚、上野に在り。之を聞き、其の質の駿河に死するを恐るゝや、乃ち來り説いて曰く「信長の意測り難し。和す可くして、往く可からず。今、君の室家、皆駿河に在り。彼れ何ぞ我を信せんや」と。嗣君曰く「業已に約を定む。背くべからざる也」と。忠尚憚らず。乃ち去る。左右其の反を慮り、追うて之を誅せんと請ふ。嗣君曰く「彼の言自ら理あり。且つ未だ必ずしも反せじ」と。忠尚、疾と稱して出でず。

通釋 すると石川家成と酒井正親が曰ふには「忠次の言ふことは正しいのです。初め義元は嘘を吐いて好意を見せたが、其の實は、年々我が糧食を取り、月々我が兵を戰場に使つて、そしていつも我が軍を敵の槍玉の餌食にしたのです。丸根や大高の戦争が之を證明して居ます。だから早速尾張と和睦するのがよろしい。又人質となつて駿河に行つて居る者を、取り返すのは六ヶ敷いことではありません。何となれば、氏真はこちらと交を絶つのを非常に重大なことだと思つて居ります。だからきつと殺したりすることは出来ません」と。嗣君が曰ふには「自分がまだ幼少の頃、我が舊臣は随分刀の切突や矢尻の鏑となつた。自分はいつても心に之を傷ましく思つて居た」と。思はずはらくと涙を落した。そして終に和睦を許すことになつた。信長は非常に喜び國の境界を定めたり、守りの兵隊を廢したりして、最後に嗣君が尾張に來て誓ひをすることを求めて來た。それで其の事を承諾した。酒井忠尚は上野に居た。此の事を聞き傳へ、自分の駿河に出して居る人質が殺されるのを心配し、そこで岡崎にやつて來て曰ふには「信長の眞底の氣持は判つたものではありません。和睦はしていゝが、尾張に乗り込むことは極めて危険です。即ち今君の御家内は残らず駿河に居られます。だから、信長はどうしてこちらを信じませうか」と。嗣君が曰ふには「最早約束をして終つた後では、之に背くことは出来ない」と。忠尚は快からず思つた。お附の者は忠尚の謀反を案じて、追つかけて殺すことを願ひ出た。嗣君が曰ふには「彼の言ふことには條理がちやんと立つて居る。且つ又きつと謀反をするとは限るまい」と。忠尚は其の後病氣と言つて上つて來なかつた。

信長修道供帳。至期、嗣君從三百餘騎赴尾張。信長使林通勝等迎之。熱田。嗣君憇于正海寺。遂至清洲。入城門。觀者喧騰。本多忠高、子忠勝、小字平八郎、時年十四。擧薙刀。先驅厲聲曰「我君來此。汝輩胡無禮也。衆皆誓伏。信長出迎。導入内城。植村榮政操刀而從。衛士叱之。榮政瞋目曰「吾植村新六也。奉主人刀。何渠叱乎。信長揮衛士曰「我聞新六名久矣。勿怪。乃盟曰「兩家戮力。征討東西。織田有天下。德川爲之屬國。」

徳川有天下、織田爲之屬國。遂饗嗣君。信長賜寶刀於榮政。曰：「汝今日舉動、如樊噲在鴻門、畢饗而還。信長郊送、使通勝等來謝岡崎。氏眞聞之、怒使使來請酒井正親、使人往駿河、因三浦義鎮謝曰：『參河之拏、皆在駿河。豈有貳心、獨病尾張。日強大、勢將及我。故伴和以紓旦夕耳。』氏眞不能詰。」

訓讀 信長道を修めて供帳す。期に至り、嗣君百餘騎を從へて尾張に赴く。信長、林通勝等をして之を熱田に迎へしむ。嗣君正海寺に憩ひ、遂に清洲に至り、城門に入る。觀る者喧騰す。本多忠高の子忠勝、小字は平八郎、時に年十四。薙刀を擧げて先驅し、聲を厲して曰く「我が君此に来る。汝が輩胡ぞ無禮なる」と。衆皆震伏す。信長出で迎へ導いて内城に入る。植村榮政、刀を操つて從ふ。衛士之を叱す。榮政目を瞋らして曰く「吾は植村新六なり。主人の刀を奉ず。何渠ぞ叱するか」と。信長、衛士を揮いて曰く「我れ信六の名を聞くこと久し。怪む勿れ」と。乃ち盟つて曰く「兩家、力を戮せて東西を征討し、織田天下を有たば、徳川之が屬國と爲り、徳川天下を有たば、織田之が屬國と爲らん」と。遂に嗣君を饗す。信長寶刀を榮政に賜うて曰く「汝が今日の舉動、樊噲が鴻門に在りしが如し」と。饗を畢へて還る。信長、郊送し、通勝等をして來り岡崎に謝せしむ。氏眞之を聞いて怒り、使をして來り詰めしむ。酒井正親人をして駿河に往かしめ、三浦義鎮に因つて謝して曰く「參河の拏、皆駿河に在り。豈に貳心あらんや、獨り尾張の日に強大にして、勢將に我に及ばんとするを病ふ。故に伴り和して以て旦夕を紓ぶるのみ」と。氏眞詰る能はず。

通釋 信長は道路を修繕したり、宿々に手配して饗應の準備をした。紀東の時機になると、嗣君は百餘騎の兵を伴つて尾張に出掛けた。信長は林通勝等に命じて、熱田まで出迎へさせた。嗣君は正海寺で一息を休め、遂に清洲に着いて城門に入った。見物の者共ががや／＼と騒ぎ立てた。すると、本多忠高の子忠勝幼名平八郎といふ者、年僅に十四であつたが、薙刀を振り擧げて先拂ひをしながら、大聲に叫んで曰ふには「我が君のお通りだ。汝等どうしてその様に無禮な態度をするか」と。人々は一同恐れ入つてひれ伏した。信長は迎へに出て案内して本丸に入つた。植村榮政が刀を持つて嗣君を守り從つた。城の番兵が之を咎めた。すると榮政は怒つて目をつり上げて曰ふには「自分は植村新六だ。主人公の刀を持つて居るのに、どうして咎めだてするか」と。信長は其の番兵を揮つて止めて曰ふには「私は新六の名前は前から聞いて居る。怪しまなくともよろしい」と。そこで誓を取り交はして曰ふには「尾張、參河の兩家が、力をあはせて西と東を平らげ、若し織田が天下を取つたら、徳川は其の屬國となり、又若し徳川が天下を取つたら、織田が其の屬國とならう」と。其れが濟むと、嗣君を御馳走することになつた。信長は其の席上、榮政に寶刀を呉れて曰ふには「お前の今日の動作は鴻門の會盟に於ける樊噲のやうであつた」と。御馳走が終ると、やがて引上げた。信長は城外まで見送り、そして通勝等に岡崎まで行つて禮を述べさせた。氏眞は此の事を聞いて腹を立て、使を寄越して問ひ詰めた。酒井正親は人を駿河にやつて三浦義鎮を通じて詫びさせて曰ふのに「參河の妻子眷屬は皆駿河に居るのです。どうして二心を抱くやうなことがございませう。只尾張の勢が日に強くなつて、其の勢が、追々とこちらにも及んで來さうになつて居ます。それで止むなく欺いて和睦を結んで、暫くの間の息をつきたいわけなのです」と。氏眞は最早其以上問ひ詰めることは出来なかつた。

【語釋】 樊噲(項羽と劉邦が鴻門に會つた時、劉邦が危險だつたので樊噲が帷幕の内に入つて急を救つた。名高い鴻門の會の故事。)

先是、吉良義諦守東條、牧野成定守西尾、以黨氏眞欲圖岡崎。三月、嗣君攻東條。不
下。使松平好景以中島備之。東參河豪姓菅沼・奥平・設樂・西郷諸族皆背氏眞來降。
四月、義諦攻酒井忠尚于上野。好景救之。義諦窺其虛徑襲中島。好景還戰走之。至
善明堤、遇敵大至。遂戰死。嗣君築津平・小牧、命松井忠次・本多廣孝守之、以備東條。
五月、氏眞攻東參河。諸豪善距。七月、嗣君自將攻牛窪、使別將攻鳥屋。鳥屋陷。本多
忠勝與叔父忠眞從軍。忠眞縱斃一人、顧忠勝取其首。答曰「孺子不欲因人成功」。自
斃一人、馘之。忠眞啓狀曰「平八郎將行爲君用也」。嗣君大喜。

【訓讀】 是より先き、吉良義諦は東條を守り、牧野成定は西尾を守り以て氏眞に黨し、岡崎を圖らんと欲す。三
月、嗣君東條を攻む。下らず。松平好景をして中島を以て之に備へしむ。東參河の豪姓、菅沼・奥平・設樂・西郷の
諸族、皆氏眞に背いて來り降る。四月、義諦、酒井忠尚を上野に攻む。好景之を救ふ。義諦其虚を窺ひ徑に中島
を襲ふ。好景還り戰つて之を走らす。善明堤に至り、敵の大に至るに遇ふ。遂に戰死す。嗣君、津平・小牧に築
き、松井忠次・本多廣孝に命じて、之を守らせ、以て東條に備ふ。五月、氏眞東參河を攻む。諸豪善く距ぐ。七月、

嗣君自ら將として牛窪を攻め、別將をして鳥屋を攻めしむ。鳥屋陷る。本多忠勝、叔父忠眞と軍に従ふ。忠眞縱
して一人を斃し、忠勝を顧みて其の首を取らしむ。答へて曰く「孺子人に因つて功を成すを欲せず」と。自ら一
人を斃して之を馘る。忠眞狀を啓して曰く「平八郎は將に行くゆく君の用を爲さんとす」と。嗣君大に喜ぶ。

【通釋】 此れに先立つて、吉良義諦は東條を守り、牧野成定は西尾を守つて、氏眞に味方し、岡崎を滅ぼさうと
思つて居た。三月、嗣君が東條を攻めた。併し落城しなかつた。松平好景をして中島に在つて之に備へさせた。
東參河の豪家の菅沼・奥平・設樂・西郷など言ふ人々は皆氏眞に背いて、こちらへ降つて來た。四月、義諦は上野に
來て、酒井忠尚を攻めた。好景はそれを助けに來た。すると義諦は好景の留守を覗つて直に中島を襲撃した。好
景は歸つて來て、一戰を交へ、之を走らせた。所が善明堤まで來ると、敵が大勢やつて來るのに出會つた。それ
で遂に戰死して終つた。嗣君は津平や小牧に城を築いて、松平忠次と本多廣孝に命じて之を守らせ、そして東條の
押へとした。五月、氏眞は東參河を攻めた。多くの豪族は見事に之を拒いだ。七月、嗣君は自ら兵に將となつて、
牛窪を攻め、別働隊の大將に鳥屋を攻めさせた。鳥屋は陥つた。其の時、本多忠勝が、叔父の忠眞と一緒に軍に
從つて居た。忠眞が一人の敵を槍で刺し殺して、忠勝に其の首を取らせようとした。忠勝が答へて曰ふには「私
は人の力を借りて手柄を立てたくはありません」と。自分で一人の敵を殺して其の首を切つた。忠眞は其の有様
を申し上げて曰ふには「平八郎はゆくゆく君の御役に立つやうになるでせう」と。嗣君は非常に喜んだ。

【語釋】 東條・西尾・善明堤・浦平・小牧・牛窪・鳥屋(參) ○因人成功(史記平原君傳中に因)

五月、荒川城主吉良頼持與兄義諦有郤。因酒井正親請降。俱攻拔西尾。走牧野成

定遂攻東條。東條裨將富永景通、陣藤波、欲攻小牧。忠次、廣孝皆來合於正親。邀擊景通。景通引弓擬廣孝。廣孝直前刺殺之。餘兵皆走。追北至城。降義諦而還。嗣君以義諦邑賜正親。以景通邑賜廣孝。以津平賜忠次。使鳥居忠吉、松平信一守東條。妻賴持以異母妹。

訓讀 五月、荒川の城主吉良頼持、兄義諦と欲あり。酒井正親に因つて降を請ふ。俱に攻めて西尾を抜き、牧野成定を走らせ、遂に東條を攻む。東條の裨將富永景通、藤波に陣し、小牧を攻めんと欲す。忠次、廣孝、皆來つて、正親に合し、邀へて景通を撃つ。景通、弓を引いて廣孝に擬す。廣孝、直に前み刺して之を殺す。餘兵皆走る。北ぐるを追うて城に至り、義諦を降して還る。嗣君、義諦の邑を以て正親に賜ひ、景通の邑を以て廣孝に賜ひ、津平を以て忠次に賜ふ。鳥居忠吉、松平信一をして、東條を守らしむ。頼持に妻はすに異母妹を以てす。

通釋 五月、荒川の城主の吉良頼持が、兄の義諦と折合が惡かつた。酒井正親を頼んで、降服したいと願ひ出て來た。そこで一緒になつて西尾を攻め落し、牧野成定を走らせ、遂に東條を攻めた。すると東條の副將富永景通は藤波に陣取り、小牧を攻めようとした。忠次や廣孝が皆來合せて、正親と一緒に景通を迎へ撃つた。景通は弓を引きしぼつて、廣孝を狙つた。廣孝は突き進んで之を刺し殺した。他の兵は皆逃げた。逃げるのを追つ掛けて東條の城に至り、義諦に降参させて引き上げた。嗣君は義諦の領地を正親に與へ、景通の領地を廣孝に與へ、又津平を忠次に與へた。鳥居忠吉と松平信一には東條を守らせた。頼持に腹違ひの妹をやつた。

語釋 荒川・藤波(參)

五年三月、嗣君使松平清善攻西郡。不利。更使久松俊勝、松井忠次等攻之。忠次招甲賀間諜十八人、入城舉火。外兵應之。城將鵜殿長持走。追虜其二子。命俊勝守西郡。駿河兵來爭。不能取。氏真欲殺我質。以我外家關口親永爲豪宗。不敢發。石川數正欲往護質。度嗣君不許。留書而往。聞氏真甚惜鵜殿氏二子。則因親永請易質。許之。乃馳使還報。嗣君大喜。送二子於駿河。數正乃奉關口氏世子信康而歸。已而氏真悔之。怒殺親永。擁我將士質。以誘降之。我將士無一人應者。即盡串殺其質。嗣君聞之哀痛。

訓讀 五年三月、嗣君松平清善をして西郡を攻めしむ。利あらず。更に久松俊勝・松井忠次等をして、之を攻めしむ。忠次、甲賀の間諜十八人を招き、城に入つて火を擧げしむ。外兵之に應ず。城將鵜殿長持走る。追うて其の二子を虜にす。俊勝に命じて西郡を守らしむ。駿河の兵來り争ふ。取る能はず。氏真我が質を殺さんと欲す。我が外家關口親永の豪宗たるを以て、敢て發せず。石川數正往いて質を護らんと欲す。嗣君の許さざるを度り、書

を留めて往く。氏真甚だ鵜殿氏の二子を惜むと聞き、則ち親永に因つて質を易へんと請ふ。之を許す。乃ち使を馳せて還り報ず。嗣君大に喜び、二子を駿河に送る。數正乃ち關口氏世子信康を奉じて歸る。已にして氏真之を悔い怒つて親永を殺し、我が將士の質を擁して、以て之を誘降せんとす。我が將士一人の應ずる者なし。即ち盡く其の質を串殺す。嗣君之を聞いて哀痛す。

通釋 五年三月、嗣君は松平清善に西郡を攻めさせた。併し負けた。更に久松俊勝と松井忠次をして攻めさせた。忠次は有名な甲賀郡の間者十八人を召しよせて、城に潛り込んで、火をつけさせた。外の兵が之に應じて攻め寄せた。城將鵜殿長持は逃げ出した。又之を追つ掛けて其の二人の子供を生捕つた。そこで俊勝に命じて西郡を守らせた。すると駿河の兵が押し寄せて来て争つた。それで攻め取ることは出来なかつた。氏真はこちらの人質を殺さうと思つた。夫人の里方の關口親永が、勢力のある家柄であつたので、憚つて無暗に手出しをすることを控へて居た。石川數正は出かけて人質の人々を守護しようと思つた。嗣君は多分それを許さないだらうと考へたので、置手紙を出掛けた。所が氏真が鵜殿氏の二人の子供が生捕りにされたのを非常に残念がつて居ると聞き込んだので、親永に頼んで、人質を交換したいと申し出た。氏真は之を承知した。そこで急ぎ使の者を走らせてこのことを知らせた。嗣君は大層喜び鵜殿氏の二子を駿河に送り返した。そこで數正も夫人關口氏と世子の信康をつれて岡崎に歸つて来た。暫くすると氏真は之を後悔して、腹立ちの餘り親永を殺し、そしてこちらの將士連の人質を種にして、我が將士を誘ひ降さうとした。併し一人も之に應ずる將士はなかつた。早速其の人質を皆串刺しにして殺して終つた。嗣君は此の事を聞いて痛々しいまでに嘆き哀しんだ。

外家(勇)

四月、引間城背氏眞來降。七月、嵩山亦降。已而皆爲駿河兵所拔。九月、駿河將朝比奈泰長來襲五本松、殺其城主西郷正勝。正勝子元正在月谷、聞變馳援、見父已死、赴駿河軍、死。其弟清員爲泰長所捕、行歷萬丈谷、奮袂自投、遂脫歸。因菅沼定盈告狀。嗣君命承父兄後。辭曰、臣兄有遺孤。臣請佐焉。嗣君義而許之。嗣君自將攻板倉重定于佐脇。佐脇與牛窪、楡木合兵、距于坂井。我前軍敗走。渡部守綱、夏目正吉殿戰。嗣君聞敗、馳救、擊斬重定。拔佐脇八幡二寨。六年二月、遣松井忠次、攻拔岩略寨。三月、自將與駿河將小原鎮實戰于小坂井、破之。五月、放鷹近郊、至深溝。故松平好景子伊忠在焉、邀而饗之。賜之以鷹。曰、長澤要地也。武田信玄所窺、非汝莫以當之。乃徙守長澤。

訓讀 四月、引間城、氏眞に背いて來り降る。七月、嵩山も亦降る。已にして皆、駿河の兵の拔く所と爲る。九月、駿河の將朝比奈泰長、來つて五本松を襲ひ、其の城主西郷正勝を殺す。正勝の子元正月谷に在り。變を聞いて馳せ援け、父の已に死せしを見て、駿河の軍に赴いて死す。其の弟清員、泰長の捕ふる所と爲る。行くゆ

く萬丈谷を歴、袂を奮つて自ら投じ、遂に脱れ歸つて、菅沼定盈に因つて狀を告ぐ。嗣君、命じて父兄の後を承けしむ。辭して曰く「臣の兄に遺孤有り。臣請ふ、佐けん」と。嗣君、義として之を許す。嗣君自ら將として、板倉重定を佐脇に攻む。佐脇、牛窪・楡木と兵を合せて、坂井に距ぐ。我が前軍敗走す。渡部守綱・夏目正吉殿戦す。嗣君敗を聞いて馳せ救ひ、撃つて重定を斬り、佐脇・八幡の二寨を抜く。六年二月、松井忠次を遣はして、攻めて岩路寨を抜く。三月自ら將として、駿河の將小原鎮實と小坂井に戦つて、之を破る。五月、鷹を近郊に放ち、深溝に至る。故の松平好景の子伊忠焉に在り、邀へて之を饗す。之に賜ふに鷹を以てして曰く「長澤は要地なり。武田信立の窺ふ所、汝に非ざれば以て之に當る莫し」と。乃ち徙つて長澤を守らしむ。

通釋 四月、引間城は氏真に叛いて降服した。七月、嵩山も同じく降つた。けれども間もなく其れ等の城はいづれも駿河の兵に攻め落された。九月、駿河の大將朝比奈泰長が来て、五本松を攻め、其の城主西郷正勝を殺した。正勝の子の元正は、月谷に居て、此の變事を聞き、馳せて助けに向つたが、父が既に討ち死したのを見て、駿河の軍中に突き入つて戦死した。其の弟の清員は泰長の爲めに生捕りにされた。途中萬丈谷を通り過ぎる時、袂を振り切つて、谷へ飛び下り、遂に逃げ歸つて菅沼定盈を通じて有りし次第を申し上げた。嗣君は清員に命じて父と兄の後を嗣がせしめることにした。辭退をして曰ふには「私の兄には、忘れ形見があります。私はどうかそれを助けたいものです」と。嗣君は其れは義理に合つたことだと言つて許した。嗣君は自ら大將となつて、佐脇で板倉重定を攻めた。佐脇では牛窪や楡木と軍を合せて、坂井で防戦した。我が先鋒隊は敗けて逃げた。渡部守綱や夏目正吉が殿をしつゝ戦つた。嗣君は敗戦と聞いて、馳せて助けに向ひ、盛んに攻撃して重定を斬り殺し、そして佐脇・八幡の二つの壘を攻め落して終つた。六年二月、松井忠次をやつて、岩路の壘を陥れた。三月、嗣君自ら大將となつて駿河の將の小原鎮實と、小坂井で戦つて、之を破つた。五月、近郊で鷹狩をやつて、深溝まで行つた。故の松平好景の子の伊忠が此處に居て、喜び迎へて御馳走をした。此の人に鷹を與へて曰ふには「長澤は大切な土地である。武田信立が狙つて居る所だ。併し、お前の外には其處を守る適當な大將が居ない」と。そこで長澤に移らせて、そこを守らせることにした。

語釋 引間・嵩山(江遠) ○五本松・月谷・萬丈谷・阪井・八幡・岩路・小坂井・深溝・長澤(河)

十月、使菅沼定顯城于佐崎。糧儲未備。邑中有上宮寺。爲一向宗。頗饒資糧。定顯徴之。寺僧不聽。乃奪之。僧怒。檄同宗鍼崎野寺土呂三寺。合衆得千餘人。攻菅沼氏。劫剽而去。定顯訴之。乃命酒井正親捕其主謀。斬以徇。僧徒益怒。大招聚門徒。將士係其宗。若欲救親戚。修仇怨者。往往歸之。矢田作十郎馬場小平太。蜂谷貞次。渡部守綱。本多正信。其弟正重等數百人。吉良義諦。據東條。其弟賴持。據荒川。酒井忠尚。據上野。松平家次。據櫻井。夏目正吉。據野羽。一時竝叛。僧分之牌。書曰「進一步生極樂」。卻一步墮地獄」。刻日來攻。嗣君大驚。分兵守諸城。大久保忠俊。與從子忠世。忠佐以下。守輪田。酒井正親。守西尾。松平伊忠。守深溝。本多廣孝。松井忠次。守土井。松平清

善守竹谷松平家忠守形原松平信一守藤井松平親俊守福釜酒井忠次若于上野傍每賊出舉烽相報嗣君觀烽即馳救賊輒逃走

十月、菅沼定顯をして佐崎に城かしむ。糧儲未だ備らず。邑中に上宮寺あり。一向宗たり。頗る資糧饒し。定顯之を徴す。寺僧聽かず。乃ち之を奪ふ。僧怒り、同宗鍼崎野寺・土呂の三寺に檄し、衆を合せて千餘人を得、菅沼氏を攻め、劫剽して去る。定顯之を訴ふ。乃ち酒井正親に命じて其の主謀を捕へ、斬つて以て徇ふ。僧徒益々怒り、大に門徒を招聚す。將士の其の宗に係り、若しくは親戚を救つて仇怨を修めんと欲する者は、往々に歸す。矢田作十郎・馬場小平太・蜂谷貞次・渡部守綱・本多正信・其の弟・正重等數百人なり。吉良義諦は東條に據り、其の弟・頼持は荒川に據り、酒井忠尚は上野に據り、松平家次は櫻井に據り、夏目正吉は野羽に據つて一時に並び叛く。僧之に牌を分ち、書して曰く、「一步を進まば極樂に生じ一步を卻かば地獄に墮ちん」と、日を刻して來り攻めんとす。嗣君大に驚き、兵を分つて諸城を守らしむ。大久保忠俊は、從子忠世・忠佐以下と輪田を守り、酒井正親は西尾を守り、松平伊忠は深溝を守り、本多廣孝・松井忠次は土井を守り、松平清善は竹谷を守り、松平家忠は形原を守り、松平信一は藤井を守り、松平親俊は福釜を守る。酒井忠次は上野の傍に砦して、賊の出づる毎に烽を擧げて相報す。嗣君烽を觀て即ち馳救ふ。賊輒ち逃れざる。

十月、菅沼定顯に佐崎の城を築かせた。兵糧の貯がまだ充分でなかつた。其の村の中に、上宮寺といふ寺があつた。宗旨は一向宗であつた。糧食が非常に澤山あつた。定顯は之を取り上げようとした。寺の僧達は承知しなかつた。それで、之を奪ひ取つた。すると僧は腹を立て、鍼崎野寺・土呂の同宗の寺に廻し文を飛ばし、人々を合せて千餘の同勢が出來たので、菅沼氏を攻め、掠奪して立ち去つた。定顯が此の事を訴へて來た。そこで酒井正親に命じて、其の發頭人を捕へ之を斬り殺しとなへ示した。すると僧達は益々腹を立て、大に歸依者呼び集めた。將士の中でも其の宗旨の者、又は親戚を救つて仇を報いたいと思ふ人々は、往々にこれに味方するのがあつた。即ち矢田作十郎・馬場小平太・蜂谷貞次・渡部守綱・本多正信及び其の弟の正重等數百人である。又吉良義諦は東條に立て籠り、其の弟・頼持は荒川に、酒井忠尚は上野に、松平家次は櫻井に、夏目正吉は野羽に立て籠つて、同時に一緒に謀叛した。僧達は此の人々に位牌を配り、それにかう書いておいた。「一步でも進んで戦つたならば、極樂に往生が出来るが、反對に一步でも卻くならば地獄に落されるだらう」と。斯くて日取を定め、て攻め寄せようとして居た。嗣君は非常に驚き、兵を分けて諸城を守らせた。大久保忠俊は甥の忠世や忠佐其の他の者と輪田を守り、酒井正親は西尾を、松平伊忠は深溝を、本多廣孝と松井忠次は土井を、松平清善は竹谷を、松平家忠は形原を、松平信一は藤井を、松平親俊は福釜を守つた。そして酒井忠次は上野の近所に壘を作つて、敵が出る度に烽火を揚げてお互ひに知らせ合つた。嗣君は烽火の揚るのを見ると、直ぐ様馳せ向つて助けた。それですぐに賊は破られて逃げ走つた。

野羽・土井・竹谷・形原・藤井(參)

石川數正與諸公族攻上野土井兵攻東條藤井兵攻土呂鍼崎皆有功深溝兵攻野羽野羽城兵乙部某導而陷城擒正吉乙部請曰臣所以爲導者欲活正吉也伊

忠亦請之。嗣君終釋正吉、祿之。酒井忠次招戶田某、亦以為導、攻野寺、破其後門。

訓讀 石川數正は諸公族と上野を攻め、土井の兵は東條を攻め、藤井の兵は土呂、鉦崎を攻む。皆功有り。深溝の兵は野羽を攻む。野羽の城兵乙部某、導いて城を陥れ、正吉を擒にす。乙部請うて曰く「臣の導を爲す所以の者は、正吉を活さんと欲するなり」と。伊忠も亦之を請ふ。嗣君終に正吉を釋して、之を祿す。酒井忠次、戶田某を招き、亦以て導と爲して野寺を攻め、其の後門を破る。

通釋 石川數正は一族の人々と上野を攻め、土井を守つて居た兵は東條を攻め、又藤井に居た兵は土呂や鉦崎を攻めた。いづれも手柄があつた。深溝に居た兵が野羽を攻めた。野羽の城兵の乙部某といふ者が案内し、城を陥れ、又城將の夏目正吉を生捕つた。すると乙部が願つて曰ふには「私が案内をしたわけは、正吉を助け度い爲めです」と。松平伊忠も亦此の事を願ひ出た。嗣君は遂に正吉を許して扶持を與へた。酒井忠次は戶田某を呼んで、同じ様に案内として野寺を攻めて、其の後門を打ち破つた。

十一月、鉦崎賊攻輪田。忠俊邀戰于小豆坂。嗣君馳救、大破之。阿部忠政善射。渡部守綱與寛正重皆傷。水野忠重追蜂谷貞次。貞次揮槍返之。忠重卻。嗣君親進追之。貞次卻。松平金助追而誦之。貞次曰「吾畏主公。豈畏汝哉。」縱殪金助。將賊。嗣君呵之。貞次怖而走。寛正重追平岩親吉。射中其耳。將賊。又呵之。亦怖而走。忠俊進攻鉦崎。

陣于伊田。大久保忠世與本多正重以銃相擬。忠世先發。正重傷走。賊議曰「爭戰不決。宜分兵於妙國寺、扼其歸途、夾擊陷之。」渚中、蜂谷貞次、忠俊、堀也。痛其覆滅、獨騎低回寺前。忠俊悟之、引兵還輪田。十二月、嗣君攻佐崎、與矢田馬場戰、走之。天野康景斬馬場。閏月、本多重次、高力清長、攻土呂。本多廣孝、松井忠次、攻東條、皆有功。賞功分邑。賜忠次、松平氏。尋築砦于佐崎傍。

訓讀 十一月、鉦崎の賊、輪田を攻む。忠俊、小豆坂に邀へ戦ふ。嗣君馳せ救ひ、大に之を破る。阿部忠政善く射る。渡部守綱、寛正重と皆傷つく。水野忠重、蜂谷貞次を追ふ。貞次、槍を揮つて之に返す。忠重卻く。嗣君親ら進んで之に迫る。貞次卻く。松平金助、追うて之を誦る。貞次曰く「吾れ主公を畏る。豈に汝を畏れんや」と。鐵して金助を殪し、將に賊らんとす。嗣君之を呵す。貞次、怖れて走る。寛正重、平岩親吉を追ひ、射て其の耳に中つ。將に賊らんとす。又之を呵す。亦怖れて走る。忠俊進んで鉦崎を攻め、伊田に陣す。大久保忠世、本多正重と、銃を以て相擬す。忠世先づ發す。正重傷つて走る。賊、議して曰く「爭戰決せず。宜しく兵を妙國寺に分ち、其の歸途を扼し、夾撃して之を渚中に陥るべし」と。蜂谷貞次は忠俊の婿なり。其の覆滅を痛み、獨り騎して寺前に低回す。忠俊、之を悟り、兵を引いて輪田に還る。十二月、嗣君、佐崎を攻め、矢田、馬場と戦つて、之を走らす。天野康景、馬場を斬る。閏月、本多重次、高力清長は土呂を攻め、本多廣孝、松井忠次は

東條を攻め、皆功有り。功を賞し邑を分ち、忠次に松平氏を賜ふ。尋いで砦を佐崎の傍に築く。

通釋 十一月、鍼崎の敵が輪田を攻めた。忠俊は之を小豆坂に迎へて戦つた。嗣君が馳け附けて大に之を打ち破つた。阿部忠政は弓の名手であつた。賊將渡部守綱は寛正重など、一緒に皆負傷した。水野忠重は、蜂谷貞次を追ひ掛けた。貞次は槍を振り廻し乍ら引き返して來た。忠重は引き退いた。そこで、嗣君は自身で之に進み寄つた。今度は貞次の方が退いた。そこで松平金助が追ひ掛けて行つて、口きたなく之を罵つた。貞次が曰ふには「俺は主公を畏れる丈けである。どうして貴様などを畏れるものか」と、槍で金助を突き刺し首を掻き斬らうとした。併し嗣君が之を叱り飛ばした。それで怖がつて逃げて終つた。寛正重が平岩親吉を追うて、其の耳に矢を射當てた。其の首を將に斬り取らうとした。すると嗣君が又叱りつけた。これも怖れをなし逃げて行つた。忠俊は進んで鍼崎を攻撃し、伊田に兵を止めて居た。大久保忠世と敵將の本多正重とが、お互に鐵砲で狙ひ合つた。忠世の方が先づ發した。正重は傷を負うて逃げ出した。賊共は相談して曰ふには「戦の勝負は中々決らない。だからこれは妙國寺に兵を分け、敵の歸り途を堰き止めて、挟み撃ちにして泥の中に追ひ落すのが良い」と。蜂谷貞次は忠俊の婿であつた。參河方が賊の計に罹つて顛覆滅亡するのを心に病み、一人馬に乗つて寺の前を行きつ戻りつして居た。忠俊は之を見て、賊の謀を悟り、兵を引いて輪田に歸つた。十二月、嗣君は佐崎を攻めて、敵將の矢田や馬場等と戦ひ、之を走らせた。天野康景が馬場を斬り殺した。閏の十二月に、本多重次や高力清長は土呂を攻め、又本多廣孝・松井忠次は東條を攻めていづれも手柄を樹てた。其の手柄を賞めて土地を分ち與へ、忠次には松平の姓を賜つた。やがて佐崎の近傍に砦を築いた。

訓讀 低回(心ありげな態度を示して)立ち去らせらるるのである。

七年正月三日、水野信元來賀正會、佐崎、賊焚岡太平。嗣君望之、謝信元上馬而出。信元不忍去。以其卒從。嗣君使上輪田兵當鍼崎、而直出小豆坂、與賊遇。近藤新一射中嗣君轡。嗣君怒親陷賊陣、與信元兵合、擊斬其二將。土呂鍼崎野寺賊、合攻輪田。忠俊、忠世防戰被創。嗣君單騎赴援。踵馳者三十八騎、鵜殿康孝戰死。賊黨渡部守綱進逼。嗣君其甥内藤正成侍側呼曰、事已至此、不能恤私親。乃射仆之。賊兵豨突而進。嗣君甚危。賊黨土屋長吉謂其儕輩曰、吾以門徒故、敢敵主君。今不忍視其危。吾寧墮地獄矣。乃倒鋒當嗣君馬前、防賊戰死。會日暮、兩軍交綏。嗣君還、脫其甲、得二銃丸。命收長吉尸、葬于輪田。

訓讀 七年正月三日、水野信元來つて正を賀す。會、佐崎の賊、岡太平を焚く。嗣君、之を望み、信元に謝し馬に上つて出づ。信元去るに忍びず。其の卒を以て從ふ。嗣君、上輪田の兵をして鍼崎に當らしめ、而して直に小豆坂に出で、賊と遇ふ。近藤新一、射て嗣君の轡に中つ。嗣君怒り、親ら賊陣を陷る。信元の兵と合し、擊つて其の二將を斬る。土呂・鍼崎・野寺の賊、合して輪田を攻む。忠俊・忠世、防戦して創を被る。嗣君單騎赴き援く。踵いで馳する者三十八騎、鵜殿康孝戰死す。賊黨渡部守綱、進んで嗣君に逼る。其の甥内藤正成、側に

侍し、呼んで曰く「事已に此に至る、私親を恤ふる能はず」と。乃ち射て之を仆す。賊兵竊突して進む。嗣君甚だ危し。賊黨土屋長吉、其の儕輩に謂つて曰く「吾れ門徒の故を以て、敢て主君に敵す。今其の危きを視るに忍びず。吾れ寧ろ地獄に墮ちん」と。乃ち鋒を倒にして嗣君の馬前に當り、賊を防いで戦死す。會、日暮る。兩軍交綏す。嗣君還り、其の甲を脱すれば、二銃丸を得たり。命じて長吉の尸を收めて、輪田に葬らしむ。

通釋 七年正月三日、水野信元が来て、新年の挨拶を申し上げた。其の時丁度、佐崎の賊が岡太平を焚いた。嗣君は遠くからそれを見、信元に會釋して立ち上り、馬に乗つて出かけて行つた。信元は之を見て、歸る氣持になれない。自分の兵士を引きつれて、嗣君に從つた。嗣君は上輪田の兵をして鉞崎に當らせ、そして眞直に小豆坂に出て賊兵と會つた。近藤新一は嗣君の轡に射當つた。嗣君は怒つて自身で敵の陣を打ち破つた。信元の兵と合し、攻撃して二人の敵將を斬り捨てた。土呂・鉞崎・野寺の賊共は聯合して輪田に攻め寄せた。忠俊や忠世が防ぎ戦つて、負傷した。嗣君は只一騎助けに向つた。後に踵いて馳せ從ふ者が三十八騎あつたが、鶴殿康孝は戦死した。賊の大將渡部守綱は進んで嗣君の側に迫つて來た。其の甥の内藤正成が嗣君のお側について居たが、大聲に叫んで曰ふには「最早斯くなる上は、親類だと言つて容赦は出来ない」と。そこで守綱を射仆した。賊の兵は荒れ狂つた。猪の様に突き進んで來た。嗣君は頗る危くなつた。すると賊方の土屋長吉は仲間もの者どもに向つて曰ふには「我々は門徒宗であるところから、主君に敵對したのである。今主君の危いを見て居るわけにはゆかない。自分は寧ろ地獄に落ちて、此の場合主君を助けぬことは出来ない」と。そこで鋒先を向けかへて、嗣君を庇うて馬前に立ち塞がり賊を防ぎ、遂に戦死を遂げた。其の時丁度日が暮れた。兩軍共に引き退いた。嗣君は歸つてから、其の甲冑を脱いで見ると、二個の彈丸が出て來た。命じて長吉の死骸を取寄せ、輪田に埋葬させた。

語釋 竊突(竊は猛に同じ。猪の如く猛く進むこと。)

二月、西尾兵合水野氏援軍、戰于櫻井野寺、破之。嗣君自討野寺賊、設伏破之。數日、佐崎賊可三百、以矢田爲將、犯岡崎。嗣君密戒銃隊曰「賊所以困我者、以有矢田也。彼負勇、每先士卒、宜狙擊之。及戰交、矢田中丸斃。餘賊潰走。自是賊衆沮喪、互相悔責。勸本多正信、蜂谷貞次請降。貞次就大久保忠俊乞焉。忠俊因說嗣君曰「方今群雄務厲兵拓地、而我內變。國兵半爲仇讐。有如鄰國乘隙來侵、傾覆不旋踵。不若容其自新、使各效力。」嗣君聽之。

訓讀 二月、西尾の兵、水野氏の援軍と合して、櫻井野寺に戦ひ、之を破る。嗣君自ら野寺の賊を討ち、伏を設けて之を破る。數日にして佐崎の賊三百可り、矢田を以て將と爲し、岡崎を犯す。嗣君密に銃隊を戒めて曰く「賊我を困むる所以は、矢田有るを以てなり。彼れ勇を負み、毎に士卒に先んず。宜しく之を狙撃すべし」と。戦交ふるに及び、矢田、丸に中つて斃る。餘賊潰走す。是より賊衆沮喪し、互に相悔責し、本多正信・蜂谷貞次に勸めて降を請はしむ。貞次、大久保忠俊に就いて乞ふ。忠俊因つて嗣君に説いて曰く「方今、群雄務めて兵を厲し地を拓く。而るに我れ内變有り。國兵の半は仇讐と爲る。鄰國隙に乗じて來り侵すが如き有らば、傾覆踵を旋らさ

す其の自新を容れて、各々力を効さしむるに若かず」と。嗣君之を聽す。

通釋 二月、西尾の兵は、水野氏の援兵と聯合して、櫻井や野寺で戦ひ、其を打ち破つた。嗣君は自ら野寺の賊を討ちに出かけ、伏兵を設けて、之を破つた。數日後に佐崎の賊兵三百ばかりが、矢田を大將として岡崎に攻め寄せた。嗣君は密に鐵砲隊の者に注意を與へて曰ふには「賊がこちらを悩ますのは、矢田が居るからである。矢田は勇氣に任かせて、いつも士卒の先頭に立つて働いて居る。其處を狙打つが宜しい」と。戦争をやり出すと矢田は丸に當つて死んだ。其の他の賊共は總崩れとなつて逃げ走つた。これから後は、賊共は意氣が衰へて、お互に後悔したり責任をなすり合つたりして、本多正信や蜂谷貞次に勸めて降服を願ふ様にさせた。貞次は大久保忠俊の所へ行つて降服を願つた。そこで忠俊は嗣君に説いて曰ふのに「昨今諸方の英雄は一生懸命軍隊を練り、土地を廣くすることを計つて居ります。然るに我國には内亂があります。國中の半分は讐となつて居ります。此の時に、若し隣國などが其の隙に乗じて侵略する様なことがあれば、我が國の顛覆することは、瞬く間もないほど、早く定つて終ひませう、だから今は、彼等の後悔して改めた心を許してやつて、銘々に國家の爲めに盡力させるやうにするに越したことはありません」と。嗣君はそれを聞き入れた。

語釋 自新(前非を悔い行を改める)

貞次乃與衆議請三事曰將士復祿曰僧徒安堵曰渠帥滅死嗣君曰所請皆允獨渠帥不可赦忠俊泣諫曰去歲以來臣宗族幾殲公欲恤而賞之願賜此輩之命以爲前鋒攻吉良荒川立功償罪則疆土日拓矣水野信元亦以爲請嗣君勉從之召貞次守綱以下于輪田徵盟賜書焉使石川家成率鍼崎降將赴土呂呼而諭之賊投兵而降佐崎野寺相繼皆降乃逐正信等五人及諸惡僧以其餘爲先鋒攻東條荒川義諦賴持請降不許皆西走

訓讀 貞次乃ち衆と議し、三事を請ふ。曰く「將士は祿を復せん」。曰く「僧徒は安堵せん」。曰く「渠帥は死を滅せん」と。嗣君曰く「請ふ所皆允さん。獨り渠帥は赦すべからず」と。忠俊泣いて諫めて曰く「去歲以來、臣が宗族幾ど殲く。公恤んで之を賞せんと欲せば、願はくは此の輩の命を賜うて以て前鋒と爲し、吉良・荒川を攻め、功を立て、罪を償はしめよ。則ち疆土日に拓げん」と。水野信元も亦、以て請を爲す。嗣君勉めて之に従ひ、貞次・守綱以下を輪田に召し、盟を徵し書を賜ふ。石川家成をして、鍼崎の降將を率ゐて土呂に赴き、呼んで之を諭さしむ。賊、兵を投じて降る。佐崎・野寺、相繼いで皆降る。乃ち正信等五人及び諸惡僧を逐ひ、其の餘を以て先鋒と爲し、東條・荒川を攻めしむ。義諦・賴持降を請ふ。許さず。皆西走す。

通釋 貞次はそこで衆と相談し、降服するについて、次の三ヶ條を願ひ出た。即ち一つ、將士の扶持を前の通りにすること。一つ、僧侶は御咎めなく本寺に落ち着くことの出来るやうにすること。一つ、謀叛人の大將株は死刑を赦すこと。すると嗣君が曰ふには「願出のことは、皆聞き届ける。只大將株は許すことは出来ない」と。忠俊は泣いて諫めて曰ふのに「昨年以來といふもの、私の一族は殆んど死に絶えました。わが君が之を不惑に

思つて恩賞を下さらうと思はれるならば、どうか願はくは其の御心を以て、此れ等の人々の命をお與へ下され、そして前鋒として吉良や荒川を攻めさせ、手柄を立て、今迄の罪を償ふやうにさせて下さい。さすれば、國土は日々に大きくなるわけでございます。水野信元も亦助命のことを願つた。嗣君は蟲を抑へて其の意見に従ひ、貞次・守綱以下の面々を輪田に召し呼んで、誓文を取り、又本領安堵の墨附きを賜つた。石川家成をして鍼崎で降参した將士を率ゐさせ、土呂に行つて敵を呼び出して説きさとさせた。賊兵は兵器を投げ捨て、降参した。佐崎や野寺も續いて皆降参した。そこで賊の大將本多正信等五人の者と多くの悪僧共を逐ひ拂ひ、其餘の兵を先鋒として東條や荒川を攻めさせた。義諦と頼持は降参を願ひ出た。併し許さなかつた。それ故皆西の方に逃げ去つた。

吉良・荒川(吉良義諦 荒川頼持)

是役也、榊原康政先登於上野。康政之先曰仁木義長、居伊勢、榊原邑。其裔清長、徙參河、仕藏人親忠。康政其孫也。幼沈深喜書。是歲、甫十六。成瀬正義與弟正一、每戰有功。二人嘗獲罪、出奔甲斐。已而來歸。嗣君待之如故。二人感激、故戰最力。

是の役や榊原康政、上野に先登す。康政の先を仁木義長と曰ひ、伊勢の榊原邑に居る。其の裔清長、參河に徙り、藏人親忠に仕ふ。康政は、其の孫なり。幼より沈深にして書を喜む。是の歲、甫めて十六。成瀬正義、弟正一と、戰ふ毎に功有り。二人嘗て罪を獲て甲斐に出奔す。已にして來り歸す。嗣君之を待つこと故の如し。二人感激す。故に戰ふ最も力む。

通釋 此の戰爭に於て、榊原康政は、上野で魁の功名を立てた。康政の先祖は仁木義長と言つて、伊勢の榊原村に住んでゐた。其の子孫の清長の時になつて、參河に移り住み、藏人の親忠に仕へたのである。康政は其の清長の孫に當つて居る。少さい時から落着いた性質で讀書を好んだ。此の年やつと十六歳であつた。成瀬正義は弟の正一と戰爭に出る度に、いつも手柄を立てた。此の二人は或る時罪を犯したので、甲斐に逃げて行つた。間もなく又歸つて來た。嗣君は以前と同じ様に此の二人を待遇した。二人は深く心を動かしてそれに感じて居た。其の爲めに戰ふ時は最も力を盡したのであつた。

嗣君既定西參河、三月、出兵東參河。四月、小笠原康元以幡豆、牧野定成以牛窪、戶田重定以楡木、皆降。乃築砦于一宮、使本多信俊守之。以逼吉田・田原。五月、氏真將兵一萬、陣佐脇八幡二邑、分其五千攻一宮。信俊告急。嗣君自將二千人赴援。過二邑、間至本能原。部伍嚴整、兵鋒甚銳。氏真不敢犯。其兵圍一宮者、解退。信俊尾擊破之。明日、嗣君復逼氏真營前而還。氏真引去。自是不能復出。六月、嗣君使酒井忠次率牛窪・楡木・幡豆兵攻吉田。本多忠勝先登、蜂谷貞次戰死。城將小原鎮實終致城去。以賜忠次。本多廣孝攻田原、取其郭。城將朝比奈元智亦致城去。以賜廣孝。六月、

酒井忠尚復叛。命廣孝忠次討之。城兵醜其數。叛相率出降。忠尚奔駿河。尋死。是歲、攻御油寺部、皆取之。長篠・築手・段嶺、三邑皆降。

訓 嗣君、既に西參河を定め、三月、兵を東參河に出す。四月、小笠原康元は幡豆を以て、牧野定成は牛窪を以て、戸田重定は楡木を以て、皆降る。乃ち砦を一宮に築き、本多信俊をして之を守らしめ、以て吉田・田原に逼る。五月、氏眞、兵一萬に將として、佐脇・八幡の二邑に陣し、其の五千を分つて一宮を攻めしむ。信俊、急を告ぐ。嗣君、自ら二千人に將として赴き援け、二邑の間を過ぎて、本能原に至る。部伍嚴整、兵鋒甚だ鋭し。氏眞敢て犯さず。其の兵の一宮を圍む者解いて退く。信俊、尾撃して之を破る。明日、嗣君復氏眞の營前に逼つて還る。氏眞、引いて去る。是より復出づる能はず。六月、嗣君、酒井忠次をして、牛窪・楡木・幡豆の兵を率ゐて吉田を攻めしむ。本多忠勝先登し、蜂谷貞次戰死す。城將小原鎮實終に城を致して去る。以て忠次に賜ふ。本多廣孝田原を攻めて、其の郭を取る。城將朝比奈元智も亦城を致して去る。以て廣孝に賜ふ。六月、酒井忠尚復叛く。廣孝・忠次に命じて之を討たしむ。城兵、其の數、叛くを醜み、相率ゐて出で降る。忠尚、駿河に奔り、尋いで死す。是の歲、御油・寺部を攻めて皆之を取る。長篠・築手・段嶺の三邑皆降る。

通釋 嗣君は既に西參河を平定したので、三月、東參河に兵を出した。四月、小笠原康元は幡豆を以て、牧野定成は牛窪を以て、戸田重定は楡木を以て皆降参して來た。そこで一宮に砦を築き、本多信俊に其處を守らせ、そして吉田と田原に攻め寄せた。五月、駿河の氏眞が一萬の兵に大將となつて、佐脇と八幡の兩村に陣取り其の五千人を分けて、一宮を攻めさせた。信俊は一宮の危急を知らせた。嗣君は自ら二千人を率ゐて援けに驅け附け佐脇と八幡村との間を遁つて本能原に着いた。隊伍が嚴しく整ひ、兵の勢が非常に強かつた。氏眞は進んで戦はうとはしなかつた。其の一宮を圍んで居た兵も、圍みを解いて逃げ出した。信俊は追撃して之を破つた。翌日嗣君が再び氏眞の兵營の前まで攻め寄せて歸つて來た。氏眞は兵を引きつれて去つて行つた。此れ以來駿河方は二度と寄せて來ることとは出来なくなつた。六月、嗣君酒井忠次をして、牛窪・楡木・幡豆の兵を率ゐて、吉田を攻めさせた。其の時本多忠勝が眞先に敵の中へ踏み込み、蜂谷貞次は討死した。城將小原鎮實は遂に城を明け渡し、逃げて了。それで其の城は忠次に賜はつた。本多廣孝が、田原を攻めて、其の外廓を取つた。城將朝比奈元智も亦城を渡して逃けた。それでそのまゝ、其の城は廣孝に賜はつた。六月、酒井忠尚が再び叛いた。廣孝と忠次に命じて之を撃たせた。城の兵は忠尚が幾度も叛くのを憎んで、皆一緒に誘ひ合つて城を出で降参した。忠尚は駿河に逃げ走り、間もなく死んだ。又此の歲には、御油や寺部を攻めて皆占領した。長篠・築手・段嶺の三村も皆降参した。

語釋 幡豆・一宮・吉田・田原・本能原・長篠・築手・段嶺(河)

八年春、嗣君盡定參河。乃置奉行三人、掌國內政刑。以作左衛門本多重次、與左衛門高力清長、三郎兵衛天野康景充之。重次剛直、清長慈祥、康景沈重善謀。民爲之語曰、佛高力、鬼作左、彼此無偏。天三郎、先是嗣君既與今川氏絶。以元康之名義、元所命也。改名家康。取遠祖義家偏名也。鳥居忠吉爲嗣君奏京師、請襲先世官爵。九

年十二月、詔敕從五位下任參河守。

訓 八年春、嗣君盡く參河を定む。乃ち奉行三人を置いて、國內の政刑を掌らしむ。作左衛門本多重次與左衛門高力清長、三郎兵衛天野康景を以て之に充つ。重次は剛直、清長は慈祥、康景は沈重にして善く謀る。民之が語を爲して曰く「佛高力、鬼作左、彼此偏無きは天三郎」と。是より先き、嗣君既に今川氏と絶つ。元康の名は義元の命する所なるを以て、名を家康と改む。遠祖義家の偏名を取るなり。鳥居忠吉、嗣君の爲に京師に奏し、先世の官爵を襲がんと請ふ。九年十二月、詔して從五位下に敍し、參河守に任ぜらる。

通釋 八年春、嗣君は參河を全部平定した。そこで奉行と云ふ役人を三人置いて、國內の政治刑罰を取り扱はせた。本多作左衛門重次と高力與左衛門清長及び天野三郎兵衛康景の三人が之に當つた。重次は意志強く、正直で、清長は惠深いお人善しで、康景は落着いた性質で謀がうまかつた。人々は之を歌の文句にして曰ふには「佛高力鬼作左、彼此偏なきは天三郎」と。是より以前、嗣君は既に駿河の今川氏と交際を絶つた。元來元康といふ字は、遠い先祖源義家の家といふ一字を取つたのである。鳥居忠吉は嗣君の爲めに、朝廷に申し上げて、先代の官位や爵祿を繼承致し度いと願ひ出た。九年十二月、詔があつて、從五位下に敍せられ、參河守に任命された。
語釋 佛高力(慈悲深いか) ○鬼作左(剛強善く罵るか) ○參河守(これから以後は名を直書しないで參河守と稱し、左京大夫となると夫は例言に斷つてある書き方である)

十年五月、參河守爲世子信康、娶織田信長女。信長使佐久間信盛來送女參河守

之定國也、武田信玄使使修好。是歲、使其將山縣昌景來言曰「請戮力滅氏眞、我取大井河以東、公取大井河以西。」參河守許之。十一年正月、詔遷參河守爲左京大夫。三月、大夫出兵遠江、攻久能。使高力清長說城將宗能降之。松下二股、高敷、三族皆降。進攻堀川、拔之。遂取宇津山城。于見附。八月、織田信長西略近江、來乞援兵。大夫使松平信一以二千餘人往。信長將木下秀吉等攻箕作城。城固不拔。信一疾攻。冒矢石而進。大呼曰「參河人松平信一先登矣。」諸隊繼登。城遂陷。信長面褒信一曰「卿可謂膽生毛矣。」賜桐號、胴服。十二月、大夫入遠江、欲取井伊谷。谷中豪族伊井直親、以讒言爲氏眞所殺。其故部菅沼近藤鈴木三族皆屬大夫。大夫遂取刑部。

訓 十年五月、參河守世子信康の爲に、織田信長の女を娶る。信長佐久間信盛をして來つて女を送らしむ。參河守の國を定むるや、武田信玄使をして好を修めしむ。是の歲、其の將山縣昌景をして來り言はしめて曰く「請ふ力を戮せて氏眞を滅し、我は大井河以東を取らん、公は大井河以西を取れ」と。參河守之を許す。十一年正月、詔して參河守を遷して左京大夫と爲す。三月、大夫兵を遠江に出して、久能を攻む。高力清長をして、城將宗能に説いて之を降らしむ。松下二股、高敷の三族皆降る。進んで堀川を攻めて、之を抜き、遂に宇津山を取つて

見附に城く。八月、織田信長、近江を略し、來つて援兵を乞ふ。大夫、松平信一をして、二千餘人を以て往かしむ。信長の將木下秀吉等、箕作城を攻む。城固うして拔けず。信一疾く攻め、矢石を冒して進み、大に呼んで曰く「參河の人松平信一、先登す」と。諸隊繼いで登る。城遂に陥る。信長面のあたり信一を褒めて曰く「卿、膽に毛を生ずと謂ふべし」と。桐號の胴服を賜ふ。十二月、大夫遠江に入り、井伊谷を取らんと欲す。谷中の豪族伊井直親、讒言を以て氏眞の殺す所と爲る。其の故部菅沼・近藤・鈴木の三族、皆大夫に屬す。大夫遂に刑部を取

通釋 十年五月、參河守は世嗣信康の爲めに、織田信長の女を娶つた。信長は佐久間信盛をして、娘を送つて來させた。參河守が國を平定した時、武田信玄は使者を寄越して交際を求めさせた。此の年、信玄は、その部將の山縣昌景を遣はして曰はせるには「願はくは力を合せて氏眞を攻め滅し自分の方では大井河の東を取ります。貴公は大井河の西をお取りなされ」と。參河守は之を承知した。十一年正月、詔があつて、參河守の役を移して、左京大夫となされた。三月、左京大夫は遠江に出兵して久能を攻めた。高力清長をして城將宗能に説いて降參を奨めさせた。松下・二股・高敷の三族が皆降參した。進んで堀川を攻めて落し、遂に宇津山をも取つて、見附といふ處に城をこしらへた。八月、織田信長は西へ進んで近江を取らうと計り、援兵を出して、呉れると頼んで來た。大夫は松平信一をして二千人の兵を連れて行かせた。信長方の大將木下秀吉等が、箕作城を攻めた。けれども、城の守りが固くて攻め落すことが出来なかつた。すると松平信一はきびしく攻め寄せ矢や石彈を潜り抜けて進み、大聲に叫んで曰ふには「參河の住人松平信一が一番驅けをしたぞ」と。諸隊はその後から續いて城に登つた。城は遂に陥つた。信長は面前で信一を褒めて曰ふには「お身は所謂膽に毛を生ずると言ふ様な、恐ろしく膽力の

ある人だ」と。桐の紋のついた胴着を賜はつた。十二月、大夫は遠江に攻め入つて、井伊谷を取らうと思つた。すると其の谷中の豪族の伊井直親といふ者が讒言にあつて、氏眞の爲めに殺された。その爲めに伊井の故の組下であつた菅沼・近藤・鈴木の三族が皆氏眞に叛いて大夫に従つた。大夫は遂に刑部をも取つた。

語釋 久能(駿) ○堀川・宇津山・見附・井伊谷・刑部(遠) ○箕作(近) ○膽生(膽力の強)

先是、引間城主飯尾某、密通款於我。事覺被殺。其部下以城來降。又爭事相殺。於是大夫入引間、益其壘壁、立爲根據。遂招降馬伏高天神、二城。是時武田信玄已入駿河。逐氏眞。氏眞奔遠江。朝比奈泰能守掛川城、以迎之。三浦義鎮、小原資久、棄氏眞而獨保花澤。甲斐將秋山晴近、濟大井河、招久能。久能不下。奥平菅沼迎戰于見附。我兵不利。大夫使人謂晴近曰「汝何敢背約。不亟引去、我親出擊之。」晴近懼引去。大夫遂攻掛川。城險食足。不可輒拔。乃連砦備之。退陣見附。是歲、奏請復德川氏。十二年正月、詔報可。自是德川爲宗、松平爲族。

訓讀 是より先き、引間城主飯尾某、密に款を我に通ず。事覺れて殺さる。其の部下、城を以て來り降る。又事を争ひ相殺す。是に於て大夫引間に入り、其の壘壁を益し、立て、根據と爲す。遂に馬伏・高天神の二城を招降

す。是の時、武田信玄已に駿河に入り、氏眞を逐ふ。氏眞遠江に奔る。朝比奈泰能、掛川城を守り、以て之を迎ふ。三浦義鎮・小原資久、氏眞を棄て、獨り花澤を保つ。甲斐の將秋山晴近、大井河を濟つて、久能を招く。久能下らず。奥平・菅沼、迎へて見附に戦ふ。我が兵利あらず。大夫をして晴近を誚めしめて曰く「汝、何ぞ敢て約に背ける。亟に引き去らずば、我れ親ら出で、之を撃たん」と。晴近懼れて引き去る。大夫遂に掛川を攻む。城險にして食足る。輒く抜くべからず。乃ち砦を連ねて之に備へ、退いて見附に陣す。是の歳、奏して徳川氏に復せんと請ふ。十二年正月、詔して、報可す。是より徳川を宗と爲し、松平を族と爲す。

通釋 是より先きに、引間城主の飯尾某が、秘に我に内通した。其の事がばれて飯尾は殺された。飯尾の部下の兵が城を擧げて降参して來た。所がその部下同志が或る事で争をなし互に殺し合つた。そこで大夫は引間に入つて、城の壘壁を増築し、其處を根據地と定めた。そして遂に馬伏と高天神の二城を招き降した。此の時、武田信玄は既に駿河に侵入して氏眞を追つた。氏眞は遠江に逃げた。朝比奈泰能は掛川城を守つて居て氏眞を迎へ入れた。三浦義鎮と小原資久の二人は氏眞をふり棄て、獨り花澤を守つた。甲斐の大將秋山晴近は大井河を渡つて、久能を招き降さうとした、併し久能は降参しなかつた。奥平と菅沼の二將が之を見附に迎へて戦つた。併し我が兵は負け戦であつた。大夫は人をやつて晴近を責めて曰ふには「お前はどつして約束に背いたのか。大井河を越したから若しすぐにも兵をつれて去らないならば、余は自身撃ちに出掛けるぞ」と。晴近は畏れて引き去つた。大夫は遂に掛川を攻めた。掛川城は險阻で其の上に兵糧が充分だつた。それで簡單に之を落すことは出来なかつた。そこで砦を其の近所に列べ備へ、退いて見附に陣取つた。此の年朝廷に申上げて徳川の姓に復したいと願つた。十二年正月、詔があつてお許しが出た。此れから徳川を本家の姓とし、松平を一族の姓ときめた。

花澤(河)

是月、復攻掛川、使使謂信玄曰「掛川則僕力能舉之。前日之約如何。」信玄答曰「不敢渝。大夫乃徙陣于天王山、以逼掛川。氏眞啗久能、宗能父宗明以利欲夾擊我軍。宗明諾而告之。宗能不從。氏眞之使復至、戒期。宗明父子密謁大夫、告之。大夫使伴期焉、而夜伏兵城外、候敵出起鬪、獲其五將、尾而入城。城兵堅拒不得入。二月、退陣見附、降濱名都築二城。三月、復攻掛川。泰能等出戰于西宿、我諸將擊破之、追走至城、以竹楯環攻。城兵以舟師出我軍後、鳥居元忠、榊原康政等邀擊走之。大夫退入引間、使三奉行下令三條、禁鹵掠、按據士民、會氣賀、盜起遣兵誅其首謀、盡赦餘黨、遠江民歸心焉。

訓讀 是の月、復掛川を攻め、使をして信玄に謂はしめて曰く「掛川は則ち僕力もて能く之を擧げん。前日の約如何」と。信玄答へて曰く「敢て渝らず」と。大夫乃ち徙つて天王山に陣し、以て掛川に逼る。氏眞、久能の宗能の父宗明に啗すに利を以てし、我が軍を夾撃せんと欲す。宗明、諾して之を宗能に告ぐ。宗能從はず。氏眞の使復至つて期を戒む。宗明父子、密に大夫に謁して之を告ぐ。大夫伴り期せしめて、夜、兵を城外に伏せ、敵の

出づるを候ひ、起つて闘ひ、其の五將を獲、尾して城に入る。城兵堅く拒ぎ入るを得ず。二月、退いて見附に陣し、濱名、都築の二城を降す。三月、復掛川を攻む。泰能等出で、西宿に戦ふ。我が諸將、撃つて之を破り、走るを追うて城に至り、竹橋を以て環り攻む。城兵、舟師を以て我が軍後に出づ。鳥居元忠・榊原康政等、遂へ撃つて之を走らす。大夫、退いて引間に入り、三奉行をして、令三條を下さしめて、鹵掠を禁じ、士民を按據す。會、氣賀の盜起る。兵を遣はして其の首謀を誅し、盡く餘黨を赦す。遠江の民心を歸せり。

通釋 此の月、再び掛川を攻め、使を信立の所へやつて曰ふには「掛川は自分一人の力で、大丈夫取ることが出来る。前の約束はどうか」と、信立は答へて曰ふのに「決して約束は變へぬ」と。そこで大夫は天王山に移つて陣をかまへ、掛川に攻め寄せた。氏眞は久能宗能の父の宗明を利益でおびき出し我が軍を夾み撃ちしようと思つた。宗明は承知して此の事を宗能に知らせた。宗能は従はなかつた。すると氏眞の使がまた來て期日を約束した。しかし宗明父子は祕に大夫に面會して此のことを告げた。大夫は一計を授け、伴つて期日を約束させて置き夜城外に兵を伏せ、敵の出で來るのを候ひ、急に起き上つて戦ひ、敵の五人の大將を生捕り、敵の後をつけて城に入らうとした。しかし城の兵は極力防戦して、入ることは出来なかつた。二月、退いて見附に陣取り、濱名都築の二城を降参させた。三月、又々掛川を攻めた。泰能等は城を出て、西宿で戦つた。我が諸將は撃つて之を破り、逃げ走るのを追つかけて城まで來り、竹製の橋を以て矢彈を防ぎながら、城を取り巻き、攻め立てた。城兵は舟に乗つた兵を繰り出し我が軍の背後を衝いた。鳥居元忠や榊原康政等が迎へ撃つて之を走らせた。大夫は引き下つて引間城に入り、三人の奉行に命じて三ヶ條の命令書を出させ、物品をかすめることを禁じたり、又地方の人民を落着かせるやうにした。其の時丁度氣賀で一揆が起つた。兵をやつて其の發頭人を殺し他の殘黨の者は

全部罪を赦した。それで遠江の民は徳川氏に心を寄せた。

語釋 三奉行(高力・本多・天野) ○氣賀(遠江)

氏眞度掛川終不可守、欲走依北條氏康。氏康其舅也。乃因酒井正親石川家成乞和。大夫答曰「某幼爲尊翁所扶持、不敢失舊誼。讒者所間、以至構兵。今信玄欲併駿河、遠江公若以遠江見附某、某當與氏康謀、納公於駿河、因送誓書。五月、使松平家忠護送氏眞、至戸倉、授之於北條氏。」

訓讀 氏眞、掛川の終に守るべからざるを度り、走つて北條氏康に依らんと欲す。氏康は、其の舅なり。乃ち酒井正親、石川家成に因つて和を乞ふ。大夫答へて曰く「某幼にして、尊翁の扶持する所と爲る。敢て舊誼を失はず。讒者に間せられて、以て兵を構ふるに至る。今、信立、駿河・遠江を併せんと欲す。公若し遠江を以て某に附せらるれば、某、當に氏康と謀り、公を駿河に納るべし」と。因つて誓書を送る。五月、松平家忠をして氏眞を護送せしめ、戸倉に至つて、之を北條氏に授く。

通釋 氏眞は掛川を到底守り終うせないかと考へたので、北條氏康の許に走り、頼らうと思つた。氏康は氏眞の妻の父に當つて居る。そこで氏眞は酒井正親と石川家成を通じて和睦を乞うた。大夫が答へて曰ふのに「私は幼少の時、御尊父のお世話を受けた。強ひて昔の恩義を忘れようとは思はない。併し、讒言する者に離間されて

兵を構へ、戰爭するやうになつたのである。今甲斐の武田信玄が、駿河と遠江を取らうとして居る。貴下が若し私に遠江を預けられるならば、私はきつと氏康と相談して貴下を駿河にお届け申さう」と。そこで誓文を書き送つた。五月、松平家忠に氏眞を戸倉まで護送させ、北條氏に引き渡させた。

【語釋】 戸倉(豆伊)

大夫於是取遠江、以掛川賜石川家成、自從五百人、巡視郡縣。甲斐將山縣昌景將兵三千、自駿府至金谷、遇大夫、下馬而拜、觀我寡、單心動、託忿爭、反襲之。大夫走就險隘、擊斬其前鋒八騎。昌景引去。大夫大怒、遣兵攻駿府。昌景棄壘走。乃使使氏康、謀復氏眞。氏眞舊臣岡部正綱等、修府城守之。六月、以天方飯田不奉我令、攻取之。十一月、信玄與氏康戰、勝之。降正綱、取駿河、分兵據小山。大夫使松平眞乘援掛川、以攻小山。

【訓讀】 大夫是に於て遠江を取り、掛川を以て石川家成に賜ひ、自ら五百人を從へ、郡縣を巡視す、甲斐の將山縣昌景、兵三千に將として、駿府より金谷に至り、大夫に遇ふ。馬を下つて拜し、我が寡單を觀て心動き、忿爭に託して反り之を襲ふ。大夫、走つて險隘に就き、擊つて其の先鋒八騎を斬る。昌景引き去る。大夫、大に怒り兵を遣はして駿府を攻む。昌景、壘を棄て、走る。乃ち使を氏康に使し、氏眞を復するを謀る。氏眞の舊臣岡部

正綱等府城を修めて之を守る。六月、天方飯田、我が命を奉ぜざるを以て攻めて之を取る。十一月、信玄、氏康と戰つて之に勝ち、正綱を降し、駿河を取り、兵を分つて小山に據る。大夫、松平眞乘をして掛川を援け、以て小山を攻めしむ。

【通釋】 大夫はこゝで遠江を手中に收め、掛川を石川家成に與へ、自ら五百人の士卒を從へて、地方郡縣を見廻りに出掛けた。其の時、甲斐の大將の山縣昌景は、三千の兵を率ゐ駿府から金谷へやつて来て、大夫と出會つた。昌景は馬を下りて大夫に禮をしたが、我が兵の小勢で且つづく者のない有様を見て、遽に討ち取らうといふ心が動き、喧嘩に言ひがりをつけて、引返して不意に襲撃した。大夫は走つて險しい狭い所に依つて、敵の前鋒の八騎を斬り捨てた。昌景は兵を引いて去つた。大夫は此の事から非常に立腹して、兵を遣はして駿府を攻撃させた。昌景は城壘を捨て、逃げ出した。そこで使を氏康の所へやつて、氏眞を呼び戻すことを相談した。氏眞の元の家來であつた岡部正綱等が駿府の城を修繕して守つてゐた。六月、天方や飯田が我が命令に従はないので、之を攻め取つた。十一月、武田信玄は氏康と戰つて勝ち、正綱を降参させて駿河を占領し、兵士を分けて小山に立て籠つた。大夫は松平眞乘に命じて、掛川を援助して、小山を攻めさせた。

【語釋】 金谷・天方・飯田・小山(江邊)

元龜元年正月、以遠江既定、徙居引間、改名濱松。使世子居岡崎、以撫參河。大夫威名大振、稱爲海道第一。是月、信玄攻拔花澤、小原資久、三浦義鎮、奔高天神。城主小

笠原長忠與之有故。而知大夫深惡二人。斬獻其首。大夫不賞。二月、信長使人來賀。二國平定。且請援兵。擊朝倉義景。三月、信長先入京師。大夫將兵一萬繼之。四月、將軍足利義昭、饗信長及大夫。遂赴越前。信長自近江、大夫自若狹、會于敦賀。攻拔手筒。遂下金崎。會淺井長政。叛應義景。欲夾擊信長。信長危懼。問大夫曰。爲之何如。大夫曰。公第馳入京師。長政見事遲矣。必未扼歸路。至如義景。則留一猛將與某合力。必不能尾也。信長乃留羽柴秀吉。而夜走京師。數日、大夫與秀吉殿而退。信長將丹羽長秀、明智光秀在若狹。不能歸。大夫分兵救之。皆達于朽木。行擊土寇而入京師。五月、歸岡崎。

訓讀 元龜元年正月、遠江、既に定るを以て、徙つて引間に居り、名を濱松と改む。世子をして岡崎に居り以て參河を撫せしむ。大夫の威名、大に振ふ。稱して海道第一と爲す。是の月、信長、攻めて花澤を抜く。小原資久、三浦義鎮、高天神に奔る。城主小笠原長忠、之と故あり。而して大夫の深く二人を惡むを知り、斬つて其の首を獻す。大夫賞せず。二月、信長、人をして來つて二國の平定を賀せしむ。且つ援兵を請うて朝倉義景を撃つ。三月、信長、先づ京師に入る。大夫、兵一萬に將として之に繼ぐ。四月、將軍足利義昭、信長、及び大夫を饗す。

遂に越前に赴く。信長は近江より、大夫は若狹より、敦賀に會し、攻めて手筒を抜き、遂に金崎を下す。會、淺井長政、叛いて義景に應じ、信長を夾撃せんと欲す。信長、危懼し、大夫に問うて曰く「之を爲す何如」と。大夫曰く「公第馳せて京師に入れ。長政、事を見るに遅し。必ず未だ歸路を扼せし。義景の如きに至つては、則ち一猛將を留め、某と力を合せば、必ず尾する能はざるなり」と。信長乃ち羽柴秀吉を留めて、夜、京師に走る。數日、大夫、秀吉と殿して退く。信長の將丹羽長秀、明智光秀、若狹に在り。歸る能はず。大夫、兵を分つて之を救ひ、皆朽木に達す。行くゆく土寇を撃つて京師に入る。五月、岡崎に歸る。

通釋 元龜元年正月、遠江が既に平定したので、移つて引間に來り、地名を濱松と改めた。世子の信康をして岡崎に住ませて參河國を治めさせた。其の頃大夫の威力聲望が非常に振つて來た。東海道筋第一の大將と言はれた。同じ正月に、武田信玄は花澤を攻めて陥れた。小原資久と三浦義鎮の二人は高天神へ遁れた。其の城主の小笠原長忠は以前此の二人と縁故があつた。併し大夫が二人を深く惡んで居るのを知つて居たので、其の舊好を捨て、二人を斬り殺し首を大夫に奉つた。大夫は此の行ひを褒めなかつた。二月、織田信長が、人を遣はして遠參二國の平定したことの祝ひを送つた。又別に援兵を頼んで朝倉義景を撃つた。三月、信長が先づ京師に入つた。大夫は一萬の兵を率ゐて其の後についで入浴した。四月、將軍足利義昭が信長と大夫とを御馳走した。遂に越前に攻め入ることになつた。信長は近江から、大夫は若狹から進んで、敦賀で會ひ攻めて手筒城を陥れ、遂に金崎をも降参させた。其の時丁度淺井長政が叛いて義景に味方し、信長を夾み撃ちしようとした。信長は危み懼れ、大夫に問うて曰ふにはどうしたらよいらう」と。大夫が曰ふには「公は只だ急いで京都へ行かれよ。長政は軍の機を見るのに手ぬるい男です。きつとまだ歸り路を防ぎ止めては居りますまい。又義景などの如きは、

一人の強い大将を殺して私と力を合せて防げば、きつと公を追撃することなどは出来ません」と。そこで信長は羽柴秀吉を留めて、夜、京都へ向つて急いだ。数日後に大夫は秀吉と一緒に殿して引き退いた。信長の將丹羽長秀と明智光秀は、若狭に居た。それが歸ることが出来なくなつて終つた。そこで大夫は兵を分けて之を救ひ出し、一同朽木といふ所に到着した。又其の途々百姓一揆を平らげながら京都に入つた。五月、大夫は岡崎に歸つた。

語釋 元龜(正親町天皇の年號)

六月、信長擊淺井長政。復來乞援。大夫將兵赴之。朝倉義景使族景健援長政。信長兵三萬五千、大夫兵五千、陣于龍鼻。長政兵八千、景健兵一萬五千、陣于大寄。信長夜議戰。大夫曰「某年少、不喜混戰。願當一面。」信長曰「然則當長政。願公兵寡。我當分兵援之。」大夫曰「某領小國、慣用寡兵。且縱賜援兵、非素撫循、何爲用乎。」信長曰「使公獨當敵、吾將爲天下笑。請附一隊將。誰可者。」大夫乃請稻葉通朝。信長召通朝曰「汝爲德川所識、拔榮莫大焉。」因取一槍贈大夫。大夫曰「相傳是爲鎮西八郎、箭鏃公源氏、胤胤詰朝、其以此指麾。」大夫喜而受之。於是分兵爲四。酒井忠次等爲前鋒、石川數正

等爲次隊、大夫自爲中軍、榊原康政、本多廣孝爲左右翼、稻葉通朝爲後拒。

訓讀 六月、信長、淺井長政を撃つ。復來つて援を乞ふ。大夫、兵に將として之に赴く。朝倉義景、族景健をして長政を援けしむ。信長の兵三萬五千、大夫の兵五千、龍鼻に陣す。長政の兵八千、景健の兵一萬五千、大寄に陣す。信長、夜、戰を議す。大夫曰く「某は年少、混戰を喜ばず。願はくは一面に當らん」と。信長曰く「然らば則ち長政に當れ。願ふに公の兵寡し。我れ當に兵を分つて之を援くべし」と。大夫曰く「某は小國を領し、寡兵を用ふるに慣る。且つ縱ひ援兵を賜ふも、素より撫循せるに非ざれば、何ぞ用を爲さんや」と。信長曰く「公をして獨り敵に當らしめば、吾れ將に天下の笑と爲らんとす。請ふ、一隊將を附せん。誰か可なる者ぞ」と。大夫乃ち稻葉通朝を請ふ。信長、通朝を召して曰く「汝、德川の識拔する所と爲る。榮、これより大なるは莫し」と。因つて一槍を取つて大夫に贈つて曰く「相傳ふ、是れ鎮西八郎の箭鏃なり」と。公は源氏の胤胤なり。詰朝、其れ此を以て指麾せよ」と。大夫喜んで之を受く。是に於て兵を分つて四と爲す。酒井忠次等前鋒と爲り、石川數正等次隊と爲り。大夫自ら中軍と爲り、榊原康政、本多廣孝、左右の翼と爲り、稻葉通朝、後拒と爲る。

通釋 六月、信長は淺井長政を撃つた。再び援兵を頼んで來た。大夫は兵を率ゐ、自ら大将となつて行つた。朝倉義景は一族の景健といふ者をして長政を援けさせた。此の時信長の兵は三萬五千人、大夫の兵は五千人で龍鼻といふ所に陣取つた。敵方長政の兵は八千、景健の兵は一萬五千で、大寄に陣取つた。信長は夜、戦ひの相談を開いた。大夫が曰ふには「私はまだ年が若いから、諸兵が入り亂れて戦ふといふことは好みません。出来るなら一方面を引き受けて戦ひたいものです」と。信長が曰ふには「それでは長政の軍に當つて貰ひませう。併し思

ふに貴公の兵は少い。私は兵を分けて貴公の方を援けねばならん」と。大夫が曰ふのに「私は小國を持つて居て小勢の兵を動かすのに慣れて居ます。又若し援兵を貸して下さるといふことになつても、前々から目をかけて馴らして置いたのでなければ、どうして役に立ちませうや」と。信長が曰ふに「貴下に、只獨りで敵に當らせたならば私は天下の物笑ひとなるだらう。どうか一人の隊將をつけることだけは承知して下されよ。ハテ誰がよいだらうか」と。そこで大夫は、稻葉通朝を指名した。信長は通朝を呼び寄せて曰ふのに「お前は徳川殿からえらび出された。こんな名譽なことはないぞ」と。そして一本の槍を取り出して大夫に與へて曰ふには「此れは鎮西八郎のやじりだと代々傳へて居る。貴公は源氏の血筋である。明朝は此れを以て軍を指圖せられよ」と。大夫は喜んで此れを貰つた。そこで兵を分けて四隊とした。酒井忠次等が前軍、石川數正等が次の軍となり、大夫は自ら中軍を引き受け、又榊原康政と本多廣孝とは左右の翼となり、そして稻葉通朝が後備の軍となつた。

且日、長政自東、景健自西來至姉川。信長又使人來謂曰「吾深憎長政、欲甘心焉。願公當景健」大夫曰「諾」忠次諫曰「我所嚮已定、乃易之部伍必亂」大夫曰「西衆而強、東寡而弱、舍東取西、吾所願已」乃引兵而西、與景健夾姉川而陣。景健縱兵百餘先濟。本多忠勝在中軍、請曰「彼欲擊我、我當逆戰」大夫曰「善」命忠勝馳擊。大久保忠隣、安藤直次、踵馳擊走之。景健以全軍進。我前鋒卻。次隊承之、戰于河中。犬塚又內攬敵、槍相挽、遂奪而殺之。內藤正貞遺槍敵中、回馬取之。松平忠次爲敵射矢貫左手、拔矢反射殪之。次隊卻。敵進、直逼麾下。麾下將士拒戰不決。大夫怒、奮槍指麾、縱左右翼夾擊、大破之。願見信長軍敗沿川而東、與後拒俱擊。長政又大破之。追北至大寄而還。信長大賞大夫功、目以武門棟梁。本田正信渡部守綱等亡在越前、悔而來歸、是役從有首功。

訓讀 且日、長政は東より、景健は西より來つて姉川に至る。信長、又人をして來り謂はしめて曰く「吾れ深く長政を憎み、甘心せんと欲す。願はくは公、景健に當れ」と。大夫曰く「諾」と。忠次諫めて曰く「我れ嚮ふ所已に定る。乃ち之を易へば、部伍必ず亂れん」と。大夫曰く「西は衆にして強く、東は寡にして弱し。東を捨てて西を取るは、吾が願ふ所のみ」と。乃ち兵を引いて西し、景健と姉川を夾んで陣す。景健、兵百餘を縱つて先づ濟る。本多忠勝、中軍に在り。請うて曰く「彼れ我が横を撃たんと欲す。我れ當に逆へ戦ふべし」と。大夫曰く「善し」と。忠勝に命じて馳せ撃たしむ。大久保忠隣・安藤直次、踵いで馳せ、撃つて之を走らす。景健、全軍を以て進む。我が前鋒卻く。次隊之を承け、河中に戦ふ。犬塚又内、敵の槍を攬つて相挽き、遂に奪つて之を殺す。内藤正貞、槍を敵中に遺し、馬を回して之を取る。松平忠次、敵に射られ、矢左手を貫く。矢を抜き反し射て之を殪す。次隊卻く。敵進み直に麾下に逼る。麾下の將士拒き戦つて決せず。大夫怒り、槍を奮つて指麾し、

左右の翼を縦つて夾撃し、大に之を破る。顧みて信長の軍敗るを見、川に沿うて東し、後拒とも長政を撃ち又大に之を破る。北ぐるを追ひ大奇に至つて還る。信長大に大夫の功を賞し、目するに武門の棟梁を以てす。本田正信・渡部守綱等、亡げて越前に在り。悔いて來り歸し、是の役に從つて首功あり。

通釋 翌日、長政は東の方から、又景健は西の方から攻め寄せて姉川に到着した。すると信長は再び人を寄越して曰ふには「自分は長政を深く憎んで居るから、今度こそ思ふ存分に打ち砕いてやりたいと思ふ。だから貴公はどうか景健に當つて下されよ」と。大夫は「承知しました」と答へた。忠次が諫めて曰ふには「我が軍の向ふ所はちやんと定つて居るのです。今こゝでこれを變へたなら兵の配置がきつと亂れるでせう」と。大夫が曰ふのに「西の軍は兵力が多くて強いが、東の方は兵も少なくて弱い。だから弱い東をやめて強い西の軍に當るといふことは却つて自分の願ふ所だ」と。そこで兵を引ききまゝとめて西に向つて進み、景健の軍と姉川を夾んで對陣した。景健が先づ百人餘りの兵を出して川を渡つた。本多忠勝は中軍に從つて居た。願ひ出て曰ふのに「彼は我が軍の側面を攻撃しようとして居ります。私は是非共此奴を迎へて戦ひませう」と。大夫が曰ふのに「よろしい」と。忠勝に命じて馳せ撃たしめた。大久保忠隣と安藤直次が又其のあとから續いて馳せ撃つて、敵を追ひ散らした。景健は全軍をつれて進み出た。我が軍の前鋒隊が引き下つた。すると次に控へた隊が引受けて河の中で戦つた。犬塚又内は敵の槍を握つて、引張り合ひをやつたが其の槍を奮ひ取つて敵を突き殺した。内藤正貞は槍を敵軍の中に落したが、馬を反して其れを取り戻した。又松平忠次は敵に射られて矢が左の手を貫いた。すぐその矢を抜き取つて射かへして敵を打取つた。次隊も引き下つた。敵は進んで直に旗本に逼つて來た。そこで大將直屬の將士どもは懸命に防ぎ戦つたが、中々勝負が附かない。大夫は腹を立て、例の槍を振り廻して下知し、左右兩翼の控への

兵を動かして夾み撃ち敵を破つた。振り返つて見ると信長の方は敗軍であつたので、川岸を傳つて東へ進み後備軍の稻葉通朝と一緒に長政を攻撃して又散々に之を打ち破つた。そして逃げる敵兵を追つかけて大奇まで行つて引き返して來た。信長は大に大夫の手柄を褒め、武家の旗頭と稱した。本田正信と渡部守綱は罪を獲て越前に逃げて居つた。後で自分の罪を悔い新めて歸參し、此の時の戦には第一番の手柄を樹てた。

語釋 姉川・大奇(近)

八月、大風傷稼。我國最甚。命三奉行賑恤之。九月、信長攻一向、賊于攝津。淺井・朝倉、六角氏竝起、絶其歸路。大夫使酒井忠次・石川家成赴救、數撃六角氏。事平乃歸。是時、信長已取近畿十餘州、而大夫僅得定參河、遠江、以與強敵接壤也。

訓讀 八月、大風、稼を傷る。我が國最も甚し。三奉行に命じて之を賑恤せしむ。九月、信長一向の賊を攝津に攻む。淺井・朝倉・六角氏竝び起つて、其の歸路を絶つ。大夫、酒井忠次・石川家成をして赴きて救はしめ、數、六角氏を撃つ。事平きて乃ち歸る。是の時、信長已に近畿十餘州を取。而るに大夫は僅に參河・遠江を定むるを得たり。強敵と壤を接するを以てなり。

通釋 八月、大風が吹いて農作物を害した。其の時遠江・參河の徳川の領分内が最もひどくやられた。三奉行に命じて之を救恤させた。九月、信長は一向宗の一揆を攝津に攻めた。淺井・朝倉・六角の諸氏は一時に立つて、其の歸り路を絶ち切つた。大夫は酒井忠次と石川家成をやつて救けさせ、度々六角氏を攻撃した。騒ぎが全く収

まつてから歸つて來た。此の時分信長はすでに近畿地方の十餘國を占領して居た。而るに大夫は未だ僅かに參河と遠江の二ヶ國を平定し得たに過ぎない。これは強敵と領地が隣合つて居たが爲めである。

日本外史新釋 卷十九

德川氏正記

德川氏二

初信長深畏武田信玄事之甚謹。而信玄常欲西其兵。議曰：信長使家康當我。而自取易取之地。以致强大。今先獲家康。則信長隨手而亡。當是時。與信玄勁敵者。唯有北條氏康。及越後國主上杉謙信。是歲冬。氏康卒。子氏政立。請和於信玄。信玄以其庇今川氏真難之。使氏政殺之。以表意。氏真懼。航海來奔。大夫給以邑。善遇之。氏真素與謙信通好。勸大夫修幣焉。謙信喜答之。約夾攻信玄。大夫異父弟久松義勝。質駿河數年。爲信玄所奪。幽于甲斐。至是逃。出踏雪而歸。足指皆墮。大夫厚視之。信玄

於是決意絶我。而德川氏與武田氏始構難矣。

訓 初め信長深く武田信玄を畏れ、之に事ふること甚だ謹む。而して信玄常に其の兵を西せんと欲し、議して曰く「信長は家康をして我に當らしめ、而して自ら取り易きの地を取つて、以て強大を致す。今先家康を獲ば、則ち信長は手に隨つて亡びん」と。是の時に當り、信玄と勁敵たる者、唯だ北條氏康及び越後の國主上杉謙信あり。是の歳冬、氏康卒し、子氏政立つ。和を信玄に請ふ。信玄其の今川氏眞を庇ふを以て之を難じ、氏政をして、之を殺して以て意を表せしむ。氏眞懼れ、海に航して來り奔る。大夫、給するに邑を以てして善く之を遇す。氏眞素より謙信と好を通ず。大夫に幣を修むるを勸む。謙信喜んで之に答へ、夾んで信玄を攻めんと約す。大夫の異父弟久松義勝、駿河に質たること數年。信玄の奪ふ所と爲り、甲斐に幽せらる。是に至つて逃れ出で、雪を踏んで歸る。足指皆墮つ。大夫厚く之を視る。信玄是に於て意を決して我と絶つ。而して德川氏、武田氏と始めて難を構ふ。

通釋 初め信長は深く武田信玄を恐れ、その意に逆らはぬ様、非常に注意して下手に交つてゐた。所で信玄は始終自分の軍隊を西に向けようとする希望を持つてゐたので、相談して曰ふには「信長は家康を己の方に當らせおいて、自分は取り易い土地を占領し、その結果今日の強大を來したのだ。だから先づ家康を討ち取れば、信長は直ぐ様亡びて終ふに違ひない」と。當時信玄に取つて手剛い敵は、北條氏康と越後の國主たる上杉謙信のみであつた。此の年の冬、氏康は死に、子の氏政が立つた。氏政は信玄に和睦を求めた。信玄は氏政が今川氏眞を助けてゐるといふ理由でそれを承諾せず、氏政に、氏眞を殺して誠意を表明することを迫つた。氏眞はそれを聞

いて恐ろしくなり、海を渡つて(德川方へ)逃げて來た。大夫は領地を興へて手厚く待遇した。所が氏眞は元々謙信と友好關係にあつた。大夫に勸めて、謙信に進物を贈り、交を結ぶやうにさせた。謙信は喜んで之に應じ、信玄を夾み討ちしようとして約束した。大夫の異父弟の久松義勝は數年の間駿河の今川氏の人質になつてゐた。この義勝は信玄に奪はれて甲斐に押込められてゐた。それがこの時に逃げ出し、雪の中を歩いて歸つて來た。その爲め足の指は皆落ちて絶つた。大夫は丁寧之を介抱してやつた。そこで信玄は決心して我が德川氏と斷絶した。德川氏と武田氏はこゝに始めて兵亂を起すことゝなつたのである。

語釋 是歲(元龜元年) ○異父弟(所生の母水野氏が久松氏に再嫁して生んだ弟)

二年正月、大夫進從五位上、遷侍從。二月、信玄入遠江、三月攻高天神。小笠原長忠堅守。乃引兵去、令其將秋山晴近侵東參河、招降三族。獨菅沼定盈不降。四月、參河諸城多陷。我民叛應信玄、欲襲岡崎。侍從遣青山忠門擊平之。忠門戰死。侍從出陣于吉田、遣兵擊信玄、將山縣昌景走之。信長聞我與信玄交兵甚危之、而不敢來援。使人來言曰「聞信玄數侵貴國、某當赴援以報去歲之勞。而以西事殷、未之果也。願濱松當敵衝、宜避徙岡崎。」侍從謝曰「某請徐計之。」使者出。侍從笑謂近臣曰「吾而去此、當蹋折刀劍不復用焉。信玄何足畏哉。」十二月、信玄、兵侵吉田、榆木。侍從自將距

之不敢戰而罷。三年正月、侍從入駿河。三月、上杉謙信將兵入信濃、以爲我聲援。

訓讀 二年正月、大夫從五位上に進み、侍從に遷る。二月、信玄遠江に入り、三月、高天神を攻む。小笠原長忠堅く守る。乃ち兵を引いて去り、其の將秋山晴近をして東參河を侵さしめ、三族を招降す。獨り菅沼定盈降らす。四月、參河の諸城多く陷る。我が民叛いて信玄に應じ、岡崎を襲はんと欲す。侍從、青山忠門を遣はし、撃つて之を平く。忠門戰死す。侍從出で、吉田に陣し、兵を遣はして信玄の將山縣昌景を撃ち、之を走らす。信長我の信玄と兵を交ふるを聞き、甚だ之を危む。而れども敢て來り援けず。人をして來り言はしめて曰く「聞く、信玄數、貴國を侵すと。某當に赴き援け以て去歲の勞に報ゆべし。而るに西事殷なるを以て、未だ之を果さず。願ふに濱松は敵の衝に當る。宜しく避けて岡崎に徙るべし」と。侍從謝して曰く「某請ふ、徐に之を計らん」と。使者出づ。侍從笑ひ近臣に謂つて曰く「吾にして此を去らば、當に刀劍を踏折して復用ひざるべし。信玄何ぞ畏るゝに足らんや」と。十二月、信玄の兵吉田・楡木を侵す。侍從自ら將として之を距ぐ。敢て戰はずして罷む。三年正月、侍從駿河に入る。三月、上杉謙信兵に將として信濃に入り、以て我が聲援を爲す。

通釋 二年正月、大夫は從五位上に進み、侍從の役に遷つた。二月、信玄は遠江に入り、三月、高天神を攻めた。所が小笠原長忠が堅く守つて屈しない。兵を引き上げ、その將の秋山晴近に東參河を侵略させて、長篠城主菅沼道壽と親戚關係にある三家を招き降した。その中の菅沼定盈のみが降伏しなかつた。四月、參河の諸城は多く陷つた。我が領民は叛いて信玄に味方して岡崎を襲はんとした。侍從は青山忠門を遣はしてそれを平定せしめた。所が忠門はその戰で討ち死をした。侍從は吉田に出陣し、兵を出して信玄の將山縣昌景を撃つて走らせた。

信長は、我が軍が信玄と交戦中と聞いてひどく不安心に思つた。さりとて援けに來ようとはしなかつた。人をして言はせるには「聞く所によれば信玄が度々貴國を侵す相だ。拙者は早速お助けに行き、去年のお骨折に報ゆべきであります。併し何分西の方の近畿のことが非常に忙しいので未だ果さずに居ります。考へて見るのに濱松は敵の打ち出る道筋に當つてゐます。こゝは避けて岡崎に移つた方が宜しいと思考します」と。侍從は禮を述べて曰ふには「ゆるゝと考へさせて戴きませう」と。使者が立ち出た。侍從は笑ひ乍ら近臣に向つて曰ふには「吾が輩が此の地を去る位ならば、刀を踏み折つて、もう使はぬことにする方がましだ。信玄などちつとも恐ろしいことはない」と。十二月、信玄の兵が吉田・楡木に攻め入つた。侍從は自身兵を率ゐてそれを防いだ。無理に戰をせず罷めた。三年正月、侍從は駿河に攻め入つた。三月、上杉謙信は兵を率ゐて信濃に入り、我が軍に應援をした。

語釋 三族(菅沼の一族である松下・二股・高敷。) ○去歲之勞(姉川の戰)

十月、信玄將兵三萬餘來侵、拔鞞飯田二城、陣于袋井・見附。内藤信成・大久保忠世將四千人至西島、與信玄遇。信玄曰「敵兵輕出、勿使一人還。磨兵來逼。信成曰「濱松八千之兵、其半在於此。而衆寡不敵。一敗塗地、何以再戰。乃退。侍從聞前鋒危、自出陣馬籠、使本多忠勝率精騎往援之。忠勝至一言坂。信成等欲退。甲斐兵尾之、結而

不解。忠勝善用槍。所愛一槍名曰截蜻蛉。於是忠勝戴鹿角冑提截蜻蛉單騎馳入兩軍之間。兩軍乃開。終收兵而退。命卒積薪坂頭而伏銃其側。敵至銃發火起。敵不能復尾。時我兵多蒙唐首。信長所貽也。甲斐人爲之語曰「家康有過分者二。唐首也。平八也。」

訓 十月、信玄兵三萬餘に將として來り侵し、韃、飯田の二城を抜き、袋井・見附に陣す。内藤信成・大久保忠世四千人に將として西島に至り、信玄と遇ふ。信玄曰く「敵兵輕しく出づ。一人をして還らしむる勿れ」と。兵を磨いて來り逼る。信成曰く「濱松八千の兵、其の半は此に在り。而して衆寡敵せず。一敗地に塗れば何を以て再戦せん」と。乃ち退く。侍從、前鋒の危きを聞き、自ら出で、馬籠に陣し本多忠勝をして精騎を率ゐ、往いて之を援けしむ。忠勝、一言坂に至る。信成等退かんと欲す。甲斐の兵之に尾し、結んで解けず。忠勝善く槍を用ふ。愛する所の一槍、名づけて截蜻蛉と曰ふ。是に於て、忠勝、鹿角冑を戴き、截蜻蛉を提げ、單騎馳せて兩軍の間に入る。兩軍乃ち開く。終に兵を收めて退き、卒に命じて薪を坂頭に積み、而して銃を其の側に伏す。敵至る。銃發し火起る。敵、復尾する能はず。時に我が兵多く唐首を蒙る。信長の貽る所なり。甲斐の人、之が語を爲して曰く「家康、分に過ぐる者二有り。唐首なり、平八なり」と。

通釋 十月、信玄は兵三萬餘を率ゐて侵入し來り、韃、飯田の二城を陥れて袋井・見附に陣取つた。内藤信成と大久保忠世は四千人を率ゐて西島まで來て信玄と遭遇した。信玄が曰ふには「敵兵は輕率に出て來た。一人も

残らず討ち取つて終へ」と。軍を指揮して押し寄せて來た。信成が曰ふには「濱松城の八千の兵の半分は此處に居るわけだ。多勢に無勢で勝敗は明である。この大事な戦争で一旦敗けたならば次の戦が非常に困難になる」と。そこで退却をした。侍從は前鋒の危いことを聞いて、自ら馬籠まで出陣し、本多忠勝をして精銳な騎兵を率ゐて援けに行かせた。忠勝が一言坂まで行つた。その時信成達が退却をしかけた。甲斐の兵が後をつけるので兩軍の戦はこぢれて定りが付かなかつた。忠勝は槍が上手であつた。截蜻蛉といふ槍を大事にしてゐた。この時鹿の角の前立の冑を戴き、この截蜻蛉を提げ、唯だ一騎馳せて兩軍の間に飛び込んで行つた。それが爲めに兩軍の間が切れた。それで忠勝は兵を引上げて退却し、兵卒に命じて薪を坂の上に積み上げさせ、鐵砲をその横に隠しておいた。其處へ敵がやつて來た。鐵砲を放し、その火で薪が燃え出した。敵はそれ以上後をつけることが出來なかつた。その當時、我が兵は唐首の冑を冠つてゐるものが多かつた。これは信長の贈つたものである。甲斐の人はその噂をして曰ふには「家康に過ぎたるものが二つある。唐首の首。本多平八」と。

語釋 韃・西島・馬籠(江) ○一言坂(見附の西) ○兩軍之間(武田徳川) ○唐首(長毛を朱又は黒に染め、冑の上につけて四方に垂らし、代の初め、鞍牛の尾毛を珍重して唐首の首と言つた) ○唐首(飾とするものである。鞍牛の尾を以て製する。戰國時が後略して單に唐首といふ様になつたのであらう)

已而信玄遣其子勝頼等攻二股馬場信房備我援路。侍從赴援渡天龍河不敢戰。歸敵結筏河上以絶城汲道。守將致城收入濱松。我諸城多叛降信玄。信玄合兵逼濱松。乃令松平清善往距宇津山濱松諸將勸請援於織田氏。侍從不欲之。諸將曰

「信長、富五倍於我。而連請我援。我以二國抗強敵。未嘗請援。今而一請。何不可也。」侍從從之。十一月、信長乃遣佐久間信盛、平手汎秀等來援。相持踰月。十二月、信玄部兵四萬陣于三形原。縱火濱松城外。侍從怒、欲出擊之。信盛牽其衣諫曰、「寡君戒臣等曰、信玄老將也。其兵精強、天下無敵。德川欲出戰、汝當固止之。」侍從曰、「嚮信玄入小田原、旌摩其門。而氏康不出。世傳以嗤之。今敵踏藉我城下。而不敢發一矢。非丈夫也。果然、則吾當削髮被緇耳。」諸將固諫而止。

訓讀 已にして信玄其の子勝頼等を遣はして二股を攻め、馬場信房をして我が援路に備へしむ。侍從、起き援け、天龍河を渡り、敢て戦はずして歸る。敵、筏を河上に結び、以て城の汲道を絶つ。守將、城を致し、收めて濱松に入る。我が諸城多く叛いて信玄に降る。信玄、兵を合せて濱松に逼る。乃ち松平清善をして、往いて宇津山に距がしむ。濱松の諸將、援を織田氏に請ふを勸む。侍從之を欲せず。諸將曰く、「信長の富、我に五倍す。而して連に我に援を請ふ。我れ二國を以て強敵に抗し、未だ嘗て援を請はず。今にして一たび請ふ。何ぞ不可ならんや」と。侍從之に従ふ。十一月、信長乃ち佐久間信盛、平手汎秀等を遣はして來り援けしむ。相持して月を踰ゆ。十二月、信玄、兵四萬を部し、三形原に陣し、火を濱松の城外に縱つ。侍從怒り、出で、之を撃たんと欲す。信盛其の衣を牽き諫めて曰く、「寡君、臣等を戒めて曰く、信玄は老將なり。其の兵精強、天下に敵なし。德川出で

戦はんと欲せば、汝當に固く之を止むべし」と。侍從曰く、「嚮に信玄、小田原に入り、旌其の門を摩す。而して氏康出でず。世傳へて以て之を嗤ふ。今、敵、我が城下を踏藉す。而して敢て一矢を發せざるは丈夫に非ざるなり。果して然らば、則ち吾れ當に髮を削り緇を被るべきのみ」と。諸將固く諫めて止む。

通釋 そのうちに信玄は子の勝頼等をやつて二股城を攻めさせ、馬場信房をして德川軍の援兵の來る道を防がせた。侍從はそれを救ひに行つて天龍河を渡つたが、無理な戦をせずに戻つて來た。敵は川上に筏をつないで城の汲水道を絶つた。守將(中根正照)は城を明け渡し、兵を引上げて濱松に入つた。我が諸城の中、叛いて信玄に降るものが随分有つた。信玄は諸軍を合せて濱松に押寄せ來た。そこで松平清善をして宇津山を防ぎに行かせた。濱松の諸將は織田氏に救を求めらるやうに勧めた。侍從はそれを欲しなかつた。諸將が曰ふには「信長の富は當家の五倍も有る。それにも拘らず、始終こちらに救を求めて來ます。當家は僅か二箇國の兵力を以て強敵に及向ひながら、まだ一度も救を求めたことはありません。今この場合に一度だけ頼むのであります。それに何の差支へが有りませう」と。侍從はそれを承知した。十一月、德川から頼んで來たので、信長は佐久間信盛と平手汎秀等を救によこした。兩軍相對陣して月を越した。十二月、信玄は兵四萬を分けて、三形原に陣取り、濱松城外に火をつけた。侍從は立腹し、城を出てそれを撃たうとした。信盛は侍從の着物を引きとめ、諫めて曰ふには「私共の君が我々を戒めて曰はるゝに、信玄は老將である。軍隊もよりすぐりの強い兵士共で、天下に敵に立つものはない。德川殿が出て戦はうとする際には、貴様達は固く止めよ、と言ひ附かりました」と。侍從が曰ふには「以前信玄は小田原に攻め入つた、その旗は城門の間際まで、立つ程であつた。併し氏康は城を出ないでちつとしてゐた。これは世間で言ひ傳へて笑ひ草になつてゐる。今敵は我が城下を踏み荒らしてゐる。然るに思ひ切つ

て一本の矢も飛ばさないう様では男とは言はれぬ。そんな意氣地なならば私は髪を剃り、墨染の衣を着て坊主に
ならねばならぬ」と。諸將は固く諫めて止めた。

二國(遼江) ○三形原(遼江の北) ○寡君(信長を)

二十二日、信玄退入井伊谷。侍從遂北出陣三形原。日已晡。分兵八千爲九隊。遣鳥居忠廣往視敵狀。返報曰「信玄返軍而來。陣堅勢銳。戰必不利。請速收兵。侍從不聽。更使渡部守綱往。亦報曰「勿與戰。侍從叱曰「人入我陣。蹴我枕。猶有臥而不較者哉。」命大久保忠佐・柴田康忠往挑戰。守綱止之。不肯而馳。與石川數正・本多忠勝・榊原康政共擊敵將小山田昌行。走之。侍從以麾下與酒井忠次・大須賀康高擊山縣昌景。亦走之。追北而進。勝頼與馬場信房自傍進。逼我麾下。昌景・昌行皆返之。信玄自縱奇兵。橫擊我軍。軍亂。信玄乃鼓全軍而徐進。山岳爲震。我軍終大敗。信盛走。汎秀死。數正與松平家忠止戰。不支。侍從切齒。口出沫。厲衆返擊。成瀬正義・本多忠真・安藤基能・鳥居忠廣等死者凡二百餘人。敵兵益逼。

二十二日、信玄退いて井伊谷に入る。侍從遂に北に出で、三形原に陣す。日已に晡。兵八千を分つて九

隊と爲し、鳥居忠廣を遣はして往いて敵狀を視はしむ。返り報じて曰く「信玄、軍を返して来る。陣堅く勢銳し。戦必ず利あらず。請ふ速に兵を收めよ」と。侍從聽かず。更に渡部守綱をして往かしむ。亦報じて曰く「與に戦ふ勿れ」と。侍從、叱して曰く「人、我が陣に入つて我が枕を蹴る。猶ほ臥して較せざるものあらんや」と。大久保忠佐・柴田康忠に命じて、往いて戦を挑ましむ。守綱、之を止む。肯んぜずして馳す。石川數正・本多忠勝・榊原康政と、共に敵將小山田昌行を撃つて之を走らす。侍從、麾下を以て酒井忠次・大須賀康高と山縣昌景を撃つて亦之を走らせ、北ぐるを追うて進む。勝頼、馬場信房と、傍より進み、我が麾下に逼る。昌景・昌行、皆之に返す。信玄自ら奇兵を縱ち、横に我が軍を撃つ。軍亂る。信玄乃ち全軍を鼓して徐に進む。山岳爲に震ふ。我が軍終に大に敗る。信盛は走り、汎秀は死す。數正、松平家忠と止り戦ふ。支へず。侍從切齒し、口沫を出だし、衆を厲まして返り撃つ。成瀬正義・本多忠真・安藤基能・鳥居忠廣等、死する者凡そ二百餘人。敵兵益々逼る。

通釋 二十二日、信玄は退陣して井伊谷に入った。侍從はいよいよ此に出で三形原に陣取つた。日は早や申刻(午後四時)になつてゐた。八千の兵を九隊に分け、鳥居忠廣を敵狀視察に遣はした。忠廣は歸つて報告して曰ふには「信玄は軍勢を引き返して來ました。その陣は堅固で、勢も非常に強い様であります。これと戦つては到底勝目は有りません。どうぞ早速軍をお引き下さい」と。侍從は承知しなかつた。又渡部守綱に行かせた。所が守綱も報告した上で、曰ふには「彼と戦ひなさらぬやう」と。侍從は叱りつけて曰ふのに「他人が己の臥室に入つて自分の枕を蹴つてゐる。それでも臥たまゝで立ち合はぬ者があるか」と。大久保忠佐と柴田康忠に命じて敵に戦をしかけさせた。守綱はそれを止めた。併し承知しないで馬を飛ばせた。石川數正・本多忠勝・榊原康政と共

に敵將小山田昌行を撃つて走らせた。侍従は旗下の兵を引きつれ、酒井忠次・大須賀康高と共に山縣昌景を撃つて之れをも走らせ、逃げるのを追ひかけて進んだ。勝頼は馬場信房と共に側から進み我が旗下に攻めよせた。一度逃げた昌景と昌行も共にそこへ軍を返して迫つて来た。信玄は自分の手下から奇兵を出して横合から我が軍を撃つた。我が軍は亂れ足になつた。そこで信玄は大鼓を鳴らして全軍に命令を傳へ、靜かに進軍を始めた。その軍聲に山岳も打ち震ふ位であつた。我が軍は遂に大敗北した。信長の援兵の中信盛は敗走し、汎秀は討死した。數正は松平家忠と共に止まつて戦つた。併し支へ切れずに退いた。侍従は齒を喰ひしぼり、口からは泡を吹き、無我夢中に部下を激勵して返り撃つた。成瀬正義・本多忠真・安藤基能・鳥居忠廣等、討死するものが二百餘人もあつた。敵兵は益々攻め寄せて来た。

侍従自度不脱欲返決死。士多喪馬步從。夏目正吉在濱松聞急馳至、諫曰「勝敗常事耳。此非大將授命之日。君第速走。臣請代焉。乃扣其馬南向以槍鐵策馬馬走。正吉呼畔柳武重曰「子以我君免武重欲止共死。正吉揮而去之。自奮槍拒敵苦戰而死。侍從得間而走使忠世樹旗于犀崖以收敗軍。敵以為大將爭赴之。侍從因得達城。城門闔武重大呼曰「君歸矣。盍開闢而入。一城聞敗大擾。高木廣正得一髡首而還。侍從命貫之刀鋒。徇曰「兩軍鬪亂吾獲信玄矣。衆乃定。

侍従自ら脱せざるを度り、返りて死を決せんと欲す。士多く馬を喪ひ歩して從ふ。夏目正吉濱松に在り。急を聞いて馳せ至り、諫めて曰く「勝敗は常事のみ。此れ大將、命を授くるの日に非ず。君、第速に走れ。臣請ふ代らん」と。乃ち其の馬を扣へて南向に槍鐵策を以て馬を策つ。馬走る。正吉、畔柳武重を呼んで曰く「我が君を以て免れよ」と。武重止つて共に死せんと欲す。正吉揮して之を去らしめ、自ら槍を奮ひ敵を拒ぎ、苦戦して死す。侍従、間を得て走り、忠世をして旗を犀崖に樹て以て敗軍を收めしむ。敵以て大將と爲し争つて之に赴く。侍従因つて城に達するを得たり。城門闔つ。武重、大に呼んで曰く「君歸れり。盍ぞ開かざる」と。開いて入る。一城、敗を聞き大に擾る。高木廣正、一髡首を得て還る。侍従命じて之を刀鋒に貫き、徇へて曰く「兩軍鬪ひ亂れ、吾れ信玄を獲たり」と。衆乃ち定る。

侍従は自分でも最早脱れぬ所と思ひ、敵中に返り討つて命を的の決戦をしようとした。部下の士は大部分馬を失つて徒歩でお供をしてゐた。夏目正吉は濱松に居つた。急を聞いて飛んで来て諫めて曰ふには「勝敗は兵家の常であります。今は大將が討死をなさる時ではありません。君には他の事に構はず、直ぐお逃げ下さい。臣がお身代りを致します」と。さう言つて侍従の乗馬を捉へて南に向け、槍の石突で馬をひつばたいた。馬は走り出した。正吉は畔柳武重を呼んで曰ふには「そなたは我が君をお連れして逃げてくれ」と。武重は止まつて一緒に死に度いと思つた。正吉は指圖をして無理に行かせ、自身槍を振りまはして敵を防ぎ、苦戦をして討死した。侍従はその隙に逃れ、忠世をして旗を犀崖に立て、敗れた軍勢を纏めさせた。敵は忠世を大將と思つて我勝ちにその方へ向つた。侍従はそのお蔭で濱松の城に達することが出来た。すると城門が閉つてゐた。武重は大聲で怒鳴つて曰ふには「我が君のお歸りなるぞ。何故門を開かぬか」と。城門が開いて主従は中に入つた。城中の者は

敗戦を聞いて皆騒ぎ亂れた。そこへ高木廣正が一箇の坊主首を取つて歸つて來た。侍従は彼に命じてそれを刀の先に突き通して觸れ廻させるには「兩軍の戦は混亂して、俺は遂に信玄の首を討取つた」と。一同はそれを聞いて漸く落着いた。

侍従下馬杖槍、慨然謂從者曰、「吾恨爲尾張人所沮、戰失其時、乃取此挫衄矣。取腰間扇、以賜武重。都築秀綱、妻豫養粥、以犒士卒。賜之衣服。時已昏、或請關門。侍従曰、「後者安歸、且示敵怯、非計也。」命開諸門、篝火而自飽食酣睡。鼻息如雷。敵方追北逼城。見門開、恐其有伏兵、不敢入。鳥居元忠、渡部守綱等三百人、出門而戰。敗兵自敵軍後、諜而還。信玄乃退舍。忠世、康政行、破敵兵入城。本多重次、喪馬、殪敵一騎、奪其馬還。初、重次多儲糧仗。於是衆賴以安焉。

訓讀 侍従、馬を下り槍を杖つき、慨然として從者に謂つて曰く「吾れ恨むらくは、尾張人の沮む所と爲り、戰其の時を失ひ、乃ち此挫衄を取れり」と。腰間の扇を取つて、以て武重に賜ふ。都築秀綱の妻、豫め粥を煮て以て士卒を犒ふ。之に衣服を賜ふ。時已に昏し。或ひと門を關せんと請ふ。侍従曰く「後る、者安に歸らん。且つ敵に怯を示すは、計に非ざるなり」と。命じて諸門を開かしめ、火を篝して自ら飽食酣睡す。鼻息雷の如し。敵、方に北ぐるを追うて城に逼る。門開けるを見て其の伏兵あるを恐れ、敢て入らず。鳥居元忠・渡部守綱等

三百人、門を出で、戦ふ。敗兵、敵軍の後より諜して還る。信玄乃ち退き舍す。忠世・康政、行々敵兵を破つて城に入る。本多重次は馬を喪ひ、敵の一騎を殪し、其の馬を奪つて還る。初め重次、多く糧仗を儲ふ。是に於て、衆頼つて以て安んず。

通釋 侍従は馬を下り、槍を杖つて慨然として從者に向つて曰ふには「余は殘念なことに尾張の奴等(佐久間信盛・平手汎秀を指す)に邪魔をされて戰の時期を誤つた爲めに今日の敗北を招いた」と。腰に挿んだ扇を抜き取つて武重に賜はつた。都築秀綱の妻は前以て粥を煮ておいて士卒に振舞つた。それで之に衣服を賜はつた。その時分はもう夕暮になつてゐた。或る者が城門を閉めるように願つた。侍従が曰ふには「そんなことをしたらば後から歸つて來る者はどこに行くといふのだ。それ計りではない、敵にこちらの臆病を見せることになり、好い策ではない」と。命令を下して諸門を開いた儘にさせ、篝火をばたき、自分から鱈腹食べてぐうぐう寐て終つた。その軒が雷の様であつた。敵はこちらの逃げるのを追つかけて城の側まで攻め寄せて來た。城門の開いてゐるのを見て、伏兵があるかと恐れて敢て入つて來なかつた。鳥居元忠・渡部守綱等三百人が門を出て戰つた。味方の敗兵はその敵軍の後方から大聲にわめきながら戻つて來た。そこで信玄は退いて宿營した。忠世や康政は途々敵兵を破つて城に歸つて來た。本多重次は馬を失つたので、敵の騎馬武者を一人殺し、その馬を奪つて戻つて來た。重次は前に兵糧武器を澤山に藏つて置いた。それで一同の者はこの兵糧武器に依頼して安心をした。

侍従召諸將議守禦。忠世曰、「敵新勝、當挫其鋒、以振我軍氣。」侍従然之、收城內銃手、得二十六人、以忠世及天野康景將之。五更登犀崖、亂射甲斐營。亂多、陷谷死。信玄

曰「家康、兵何強項也。會、石川家成自掛川入援。我軍稍振。侍從上城樓望甲斐軍。顧富永某曰「汝以爲敵去留何如。對曰「軍無輜重、竈不見烟。是必去矣。明日、信玄果去。陣刑部馬場信房謂之曰「臣檢敵屍、北首者俯、南首者仰。可以見家康訓練矣。向使主公與家康和、結以婚姻、以爲先鋒、則天下何足圖乎。」

訓讀 侍從、諸將を召して守禦を議す。忠世曰く「敵、新に勝つ。當に其の鋒を挫き以て我が軍氣を振はすべし」と。侍從、之を然りとし、城内の銃手を收めて十六人を得、忠世及び天野康景を以て之に將とし、五更犀屋に登り、甲斐の營を亂射す。營亂れ、多く谷に陥つて死す。信玄曰く「家康の兵、何ぞ強項なるや」と。會、石川家成、掛川より入り援く。我が軍稍、振ふ。侍從、城樓に上り、甲斐の軍を望み、富永某を顧みて曰く「汝、以て敵の去留何如と爲す」と。對へて曰く「軍に輜重なく、竈に烟を見ず。是れ必ず去らん」と。明日、信玄果して去り、刑部に陣す。馬場信房之に謂つて曰く「臣、敵屍を檢するに、北首の者は俯し、南首の者は仰ぐ。以て家康の訓練を見るべし。向に主公をして家康と和し、結ぶに婚姻を以てし、以て先鋒と爲らしめば、則ち天下何ぞ圖るに足らんや」と。

通釋 侍從は諸將を召して防禦の手段を相談した。忠世が曰ふには「敵はこんど勝つた計りであります。我が軍は是非共その鋒先を凹まして軍氣を煽り立てなくてはなりません」と。侍從はそれに賛成し、城内の銃手を集めて十六人となつたので、忠世と天野康景に之を指揮させて五更(午前四時)犀屋に登つて甲斐の陣屋を亂射させ

た。甲斐の陣屋が亂れてその兵は澤山谷に落ち込んで死んだ。信玄が曰ふには「家康の兵は何といふ負けず嫌ひだらう」と。丁度その時、石川家成が掛川から援けに來た。我が軍は幾らか勢が付いた。侍從は城の櫓に上つて甲斐の軍勢を遠く見渡し、富永某を振り向いて曰ふには「お前は、この氣勢を見て敵の動きがどうなるか分るか」と。富永某が答へて曰ふには「軍勢の中に輜重隊がなく、竈から烟が上つて居りませぬ。是れはきつと退却のしるしでありませう」と。翌日、その言葉の通りに信玄はそこを去つて刑部に陣取つた。馬場信房が信玄に向つて曰ふには「私は敵の死骸を檢べて見た所、北向きに倒れてゐる者は俯伏しになり、南向きの者は仰のいて居ります。これを見ても家康の平常の訓練の如何を知ることが出來ます。若しも前に御主人公が家康と和睦をして婚姻關係で固く聯合し、家康を先鋒にしてゐられたら、天下を取ることには難作のないことではたらう」と。

語釋 北首南首(甲斐軍は北、信玄軍は南、丸に中つて死ぬる者は仰のけに倒れるか、うつ伏しに倒れる。信玄軍は皆北に向つて) 背を敵に見せぬから、うつ伏しに倒れるときは首は北に向ひ、仰のけに倒れる時は首が南に向く譯である)

天正元年正月、將軍足利義昭下教信玄、使與信長及侍從和。信玄不肯引兵攻野田。菅沼定盈與援將松平正堅守。敵蒙竹楯、用龜甲車。外城陷、乃退保内城。敵環鹿砦、鑿地道以絕井泉。侍從自將救之。甲斐軍不可犯。退次吉田。馳使乞援於信長。信長不敢出。城中有善笛者村松、善銃者鳥居。村松夜上樓吹笛。敵數騎來城外聽之。標竿而去。鳥居晨起、見之曰「聞信玄喜音、得非是乎。密定準安銃、逮夜使村松復

吹笛。敵復來聽。銃發墮一騎。旦日、敵中傳言、信玄有疾。來諭致城。定盈・忠正請出城自殺。以免士卒。信玄許之。比出城、伏起、被虜。囚于長篠。誘降之。二人不屈。初、奥平道文・菅沼正員・菅沼刑部置質於濱松。而叛降甲斐。於是請歸二人。以易其質。信玄乃使人來言、侍從許之。嘉二人守節、加其采邑。

訓讀 天正元年正月、將軍足利義昭、敵を信玄に下し、信長及び侍從と和せしむ。信玄肯んぜず。兵を引いて野田を攻む。菅沼定盈、援將松平忠正と堅く守る。敵、竹楯を蒙り、龜甲車を用ふ。外城陥る。乃ち退いて内城を保つ。敵、鹿砦を環し、地道を鑿り以て井泉を絶つ。侍從自ら將として之を救ふ。甲斐の軍犯すべからず。退いて吉田に次し、使を馳せて援を信長に乞ふ。信長敢て出でず。城中、笛を善くする者村松、銃を善くする者鳥居有り。村松、夜、樓に上つて笛を吹く。敵の數騎、城外に來つて之を聴き、竿を標して去る。鳥居、晨に起き、之を見て曰く「聞く、信玄、音を喜ぶと。是に非ざるを得んや」と。密に準を定めて銃を安き、夜に逮び村松をして復笛を吹かしむ。敵復來り聽く。銃發し一騎を墮す。旦日、敵中に傳言す、信玄疾有りと。來つて城を致すを諭す。定盈・忠正、城を出で自殺し以て士卒を免さんことを請ふ。信玄之を許す、城を出づる比伏起り、虜へられて、長篠に囚はる。誘つて之を降さんとす。二人屈せず。初め奥平道文・菅沼正員・菅沼刑部、質を濱松に置く。而れども、叛いて甲斐に降る。是に於て、二人を歸し以て其の質を易へんと請ふ。信玄乃ち人をして來り言はしむ。侍從之を許す。二人の節を守るを嘉し、其の采邑を加ふ。

通釋 天正元年正月、將軍足利義昭は信玄に命令を下して、信長並びに侍從と和睦せよとした。信玄はそれを承諾しなかつた。兵を率ゐて野田を攻めた。城主の菅沼定盈は援將の松平忠正と共に堅固に守つた。敵信玄方は竹の楯をさしかざし、龜甲車を使用して攻め立てた。外ぐるわが陥つた。そこで退いて本丸を守つた。所が敵は逆度木を立て廻し、地道を掘つて水脈を破壊し、城中の井戸や泉の水を絶やした。侍從は自ら兵を率ゐて救ひに赴いた。甲斐の陣は堅くて手を付けることも出来なかつた。退いて吉田に宿り、使を飛ばして信長に救を求めた。併し信長は警戒して出なかつた。城中に笛の上手な村松といふ者と、鐵砲の巧い鳥居といふ者が居つた。村松がある晩、樓に上つて笛を吹いてゐた。敵の數騎が城外に來てそれを聴き、竿をしるしに立て、立ち去つた。鳥居は朝になつてそれを見て曰ふには「信玄は音楽が好きだと聞いてゐる。信玄が聴きに來たのではあるまいか」と。そつと覗を定めて銃を据ゑておき、夜になつてから復村松に笛を吹かせた。敵がまた聴きに來た。發砲して一騎を射落した。明るる日、敵中で信玄が病氣になつたと噂が立つた。使をよこして城を明け渡すやうに申入れて來た。定盈と忠正とが自分達は城を出て自殺するから、城内の士卒の命を助けて呉れと頼んだ。信玄はそれを許した。二人が城を出た時に伏兵が起り、捕虜となつて長篠に押し込められた。信玄方では誘つて降伏させようとした。二人は屈服しなかつた。初め奥平道文・菅沼正員・菅沼刑部の三人は濱松に人質を置いてゐた。併し徳川に叛いて甲斐に降参した。此の時、定盈と忠正の二人を歸して、自分達の人質と交換して貰ひ度いと願ひ出た。信玄は使をよこしてその旨を言はせた。侍從はそれを許した。そして二人が節義を固く守つたことを賞讃して領地を増してやつた。

語釋 龜甲車(十六卷朝鮮征伐) (鹿砦(枝のついてゐる樹木を植て作つ) 枝が角のやうに見える)

二月、信玄病創分兵而去、使我叛將守七城、以逼濱松。侍從曰、「可使敵在我近郊哉。」三月、使世子信康、石川家成、平岩親吉、久野宗能復其五城。餘皆解走。四月、信玄創復發、歸國。途卒。勝頼當國、祕不發喪。五月、侍從徇駿河。六月、巡二股、壁于城山。七月、攻菅沼正員于長篠、以火箭焚其城。正員退保子城。乃築壘熊山、留兵而還。八月、勝頼來援、攻熊山。侍從自將邀戰。甲斐諸將退保險阻。侍從伏兵而佯遁。敵不敢出。遂去。城陷。正員出奔。甲斐敵將還助之。成鳳來寺。又助奥平道文、成築手。

訓讀 二月、信玄病を創み、兵を分つて去り、我が叛將をして、七城を守り、以て濱松に逼らしむ。侍從曰く、「敵をして我が近郊に在らしむべけんや」と。三月、世子信康・石川家成・平岩親吉・久野宗能をして、其の五城を復せしむ。餘は皆解き走る。四月、信玄、創復發し、國に歸る。途に卒す。勝頼國に當る。祕して喪を發せず。五月、侍從駿河を徇ふ。六月、二股を巡り、城山に壁す。七月、菅沼正員を長篠に攻め、火箭を以て其の城を焚く。正員退いて子城を保つ。乃ち壘を熊山に築き、兵を留めて還る。八月、勝頼來り援け熊山を攻む。侍從自ら將として邀へ戦ふ。甲斐の諸將、退き險阻を保つ。侍從、兵を伏せて佯り遁る。敵敢て出でず。遂に去る。城陷る。正員出で、甲斐に奔る。敵將還つて之を助け、鳳來寺を成る。又奥平道文を助けて築手を成る。

通釋 二月、信玄は病が惡くなり、兵を手分けして引き上げ、徳川に叛いた大將共をして七城を守らせ、進んで濱松に迫らせた。侍從が曰ふには「我が近在に敵を居らせてはならんぞ」と。三月、世子信康・石川家成・平岩親吉・久野宗能をして七城の内五つ城を取り戻させた。餘の城も皆守備を解いて逃げ走つた。四月、信玄は創が再發した爲め國に向けて立つた。その途中で死んだ。勝頼が國事を掌ることになつた。併し父の死を隠して喪を發表しなかつた。五月、侍從は駿河を觸れ下した。六月、二股を巡視して城山に城を築いた。七月、菅沼正員を長篠に攻め、火矢でその城を焼き拂つた。正員は退却して出丸を守つた。それで壘を熊山に築いて、それに兵を留めて引き揚げた。八月、勝頼が助けに来て熊山の壘を攻めた。侍從は自ら兵を率ゐて迎へ戦つた。甲斐の諸將は退却して險阻な陣地を守つた。侍從は伏兵を置いて故意に逃げて見せた。敵もさる者で容易に出て來なかつた。遂にそこを引き揚げた。斯くて城は陥つた。正員は甲斐に出奔した。敵將は返つて來てそれを助け、鳳來寺を守つた。それから又、奥平道文を助けて築手を守つた。

熊山(河)

道文之叛也、其子貞能諫之。及信玄去、道文危疑。貞能子信昌略涉書志、爲篋之。繇曰、「蛇年之人死。」道文謂信玄生歲辛巳、必既死也。遂決意歸款。勝頼在黑瀬、徵質於貞能。貞能不能拒遣其少子。或告貞能有異心。武田信豐召之。貞能即往。戒從者曰、「未見我首、勿動。」入見信豐。信豐詰之。貞能笑曰、「公莫信反間。」信豐意解、與之圍碁。畢

局^ヲ而出^ツ。勝頼^ノ軍監城道壽^ヲ招^ヒ之^ヲ飲^マス。又往^ク。道壽^ハ使^メ人出^テ呼^ビ曰^ク「奥平氏^ハ被^レ誅^ス。從者^ハ不^レ動^カ。貞能^ハ出^テ而歸^ル。城^ニ乃^チ舉^リ族^ヲ來^リ奔^ル。甲斐^ノ成將^ヲ追^フ之^ヲ。侍從^ハ遣^ハ本多廣孝^ト松平伊忠^ト迎^ヘ之^ヲ。瀧山^ニ擊^テ破^リ。追兵^ヲ進^メ戰^シ。築手^ノ下^ニ又^チ破^レ之^ヲ。勝頼^ハ怒^リ。殺^ス其^ノ質^ヲ。十月^ニ勝頼^ハ遣^ハ諸將^ヲ擣^ツ濱松^ヲ。留守本多重次^ハ迎^テ擊^テ卻^ル之^ヲ。侍從^ハ乃^チ還^ル。勝頼^ハ出^テ陣^ヲ見^テ附^ク不^レ戰^シ而去^ル。

訓讀 道文^ノの叛^クくや、其^ノ子^ノ貞能^ノ之^ヲを諫^ムむ。信立^ハ去^ルるに及び、道文^ハ危疑^ス。貞能^ノ子^ノ信昌^ハ、略^シ書志^ニ涉^ルる。爲^メに之^ヲを筮^ス。繇^ニ曰^ク「蛇牛^ノ人^ハ死^ス」と。道文^ハ謂^フ「信立^ノ生^ハ辛巳^ニ、必^ズ既^ニ死^セるなり」と。遂^ニ意^ヲを決^シて款^ヲを歸^スる。勝頼^ハ、黒瀬^ニ在^リ。質^ヲを貞能^ニに徵^ス。貞能^ハ拒^ムむ能^ハはず、其^ノ少子^ヲを遣^ハはす。或^ヒと、貞能^ハ異心^{アリ}と告^グ。武田^ハ信豊^ノ之^ヲを召^スす。貞能^ハ即^チ往^ク。從者^ヲを戒^メて曰^ク「未^ダ我が首^ヲを見^ザれば動^ク勿^レれ」と。入^リつて信豊^ヲを見る。信豊^ハ之^ヲを詰^ルる。貞能^ハ笑^ツて曰^ク「公^ハ、反間^ヲを信^スずる莫^クれ」と。信豊^ハ意^ヲ解^ケ、之^ヲと碁^ヲを圍^ミ、局^ヲを畢^ヘて出^ヅ。勝頼^ノ軍監城道壽^ヲ、之^ヲを招^ヒて飲^マス。又往^ク。道壽^ハ人^ヲをして出^テ呼^バしめて曰^ク「奥平氏^ハ誅^スせらる」と。從者^ハ動^カず。貞能^ハ出^テ、城^ニ歸^ル。乃^チ舉^リ族^ヲ來^リ奔^ル。甲斐^ノ成將^ヲ之^ヲを追^フ。侍從^ハ、本多廣孝^ト松平伊忠^トを遣^ハはし、之^ヲを瀧山^ニ迎^ヘ、追兵^ヲを擊^チ破^リ。進^ムで築手^ノ下^ニに戰^ヒ又^チ之^ヲを破^ル。勝頼^ハ怒^リ、其^ノ質^ヲを殺^スす。十月^ニ勝頼^ハ諸將^ヲを遣^ハはして濱松^ヲを擣^ツかしむ。留守本多重次^ハ迎^テ擊^テて之^ヲを卻^ク。侍從^ハ乃^チ還^ル。勝頼^ハ出^テ、見^テ附^ク陣^ヲ。戰^ハはずして去^ルる。

通釋 道文^ハが德川氏^ニに叛^キいた時^ニ、その子^ノ貞能^ハがそれを諫^メたことがある。信立^ハが引^キ揚げた時^ニ、道文^ハは危^カぶみ

疑^フて來^タ。貞能^ノ子^ノ信昌^ハは幾^カらか書物^ヲを讀^ムんであつた。そこで祖父^ノ爲^メに卜^ツつて見た。判斷^ノ言葉^ニ曰^フに「蛇牛^ノ人^ハが死^スぬ」と。道文^ハは信立^ノ生^ハ辛巳^ニだからきつともう死^ンだに違^ハないと思^フつた。遂^ニに決心^シて德川方^ニに好^ムを通^ジた。勝頼^ハは黒瀬^ニ居^リつた。貞能^ハに人質^ヲを求^メた。貞能^ハは斷^ルることが出来^なかつたので、下^ノ子^ヲを遣^ハはした。或^ハる者^ハが、貞能^ニは反心^ヲが有^ルと告^ゲた。武田^ハ信豊^ハ彼^ヲを召^スした。貞能^ハは直^ニに出^テ懸^ケて行^クつた。從者^ニに注意^シして曰^フには「本當^ニに俺^ノ首^ヲを見^ない中に騒^ギ出してはならぬ。尊位^ニで騒^ギ出すと却^テ大變^ナることになる。」と。入^リつて信豊^ニ會^フつた。信豊^ハが聞^クいたことを貞能^ニに詰^ルつた。貞能^ハは笑^ツて曰^フのに「貴方^ハは敵^ノ廻^シ者^ノの計略^ヲなどを信用^シしてはなりません」と。信豊^ハは心^ハが解^ケ、貞能^ト碁^ヲを圍^ミ、貞能^ハ勝負^ヲを濟^メして退出^シした。勝頼^ノ軍目付^ノ城道壽^ハが酒盛^ニに彼^ヲを招^ヒいた。又出^テ行^クつた。道壽^ハ人^ヲを外^ニに出^シて、「奥平氏^ハが誅^セられた」と怒^ラせられた。併^シし從者^ハは(貞能^ノの言^ヲを守^ツて)決^シして騒^ギ立てなかつた。貞能^ハは無事^ニ出^テ來^テ築手^ノ城^ニに歸^リつた。そこで一族^ノ者^ハが全部^ヲそこへ逃^ゲて來^タ。甲斐^ノ守將^ハはそれ^ヲを追^ヒかけた。侍從^ハは本多廣孝^ト松平伊忠^トをやつて彼等^ヲを瀧山^ニ迎^ヘ、追^ウて來^ル兵^ヲを擊^チ破^リ、進^ムで築手^ノ城^下で又^チそれ^ヲを破^ツつた。勝頼^ハは怒^ツつて貞能^ノ人質^ヲを殺^スした。十月^ニ勝頼^ハ諸將^ヲを派^シ遣^シて濱松^ヲを攻^メさせた。留守番^ノ本多重次^等が迎^ヘうつてそれ^ヲを退^ケた。侍從^ハはそこで返^ツつて來^タ。勝頼^ハは自^ラ出^テ見^テ附^ク陣^ヲ取^ツつた。併^シし戰^ハふに及^ばずして走^ツつた。

語釋 瀧山(江邊)

二年正月、侍從進^ム正五位上^ニ。三月、上杉氏^ハ來^リ修^ム好^ヲ。侍從^ハ修^ム長篠城^ヲ復^ス諸亡地^ヲ。四月、攻^ム乾城^ヲ、遇^テ雨^ニ引^キ還^ル。城兵^ハ尾擊^シ、殿軍^ハ多^ク死者^シ。五月、勝頼^ハ大舉^シ來^リ攻^ム野田^ヲ。城壁^ハ未^ダ修^ラ。菅沼定

盈棄城退。六月、勝頼進攻高天神。侍從乞援於信長。信長聞信玄定死、乃肯來援。勝頼疾攻、以利誘降城將小笠原長忠。長忠遂降。信長聞之、止次吉田。侍從赴謝。信長亦謝其扞信玄之勞、贈黃金二袋而去。侍從以長忠邑賜大須賀康高、使守馬伏壘。九月、勝頼將兵二萬來侵。侍從將兵七千陣于天龍河。我兵分爲二、一在上流、一在下流。欲俟敵渡、夾擊之。甲斐諸將視我陣不可犯、勸勝頼退去。

訓讀 二年正月、侍從正五位上に進む。三月、上杉氏來つて好を修む。侍從、長篠城を修め、諸の亡地を復す。四月、乾城を攻め、雨に遇つて引き還る。城兵尾撃し、殿軍に死する者多し。五月、勝頼大舉し來り野田を攻む。城壁未だ修らず。菅沼定盈城を棄て、退く。六月、勝頼進んで高天神を攻む。侍從、援を信長に乞ふ。信長、信玄の定めて死するを聞き、乃ち肯て來り援く。勝頼疾く攻め、利を以て城將小笠原長忠を誘降す。長忠遂に降る。信長之を聞き、止つて吉田に次す。侍從赴き謝す。信長も亦其の信玄を扞ぐの勞を謝し、黄金二袋を贈つて去る。侍從、長忠の邑を以て大須賀康高に賜ひ、馬伏の壘を守らしむ。九月、勝頼兵二萬に將として來り侵す。侍從兵七千に將として天龍河に陣す。我が兵分れて二と爲り、一は上流に在り。一は下流に在り。敵の渡るを俟つて之を夾撃せんと欲す。甲斐の諸將我が陣の犯すべからざるを視、勝頼に勸めて退き去る。

通釋 二年正月、侍從は正五位上に進んだ。三月、上杉氏が交誼を修めに來た。侍從は長篠城を修繕し、諸所の失つた土地を取り戻した。四月、乾城を攻めたが、雨に降られて立ち歸つた。すると城兵はそれを追撃して來

て味方の殿軍には討死した者が澤山出た。五月、勝頼が大兵を引きつれて來て野田を攻めた。城壁はまだ修繕が出来上つてゐなかつた。菅沼定盈は城を見棄て、退却した。六月、勝頼は進んで高天神を攻めた。侍從は信長に援軍を求めた。信長は信玄が確かに死んだことを聞いたので、漸く承知して援けに來た。勝頼は激しく攻め立て一方利益を餌にして城將の小笠原長忠に降伏を誘ひにかけた。長忠は遂に降伏した。信長はそれを聞いて、止つて吉田に宿した。侍從はそこへ出向いて禮を述べた。信長も、侍從は信玄を防いでくれた骨折を謝し、黄金二袋を贈つて歸つた。侍從は長忠の領地を大須賀康高に賜はつて、馬伏の壘を守らせた。九月、勝頼は二萬人の兵を率ゐて侵略して來た。侍從は兵七千を率ゐて天龍河に陣取つた。我が兵は二隊に分れ、一隊は上流に在り、一隊は下流に居つた。敵が川を渡るのを待つて之を夾み撃ちにしよと思つた。甲斐の諸將は我が軍の陣形の嚴重なのを見て勝頼に勸めて退き去つた。

語釋 乾城(江邊)

三年正月、天野康景有吉夢。以爲克甲斐之兆。獻之。二十日、因命連歌會、著爲恒例。二月、侍從出獵城下、見一女童、容貌秀俊、問之。對曰、井伊直親孤子、名直政、幼字萬千代。育於繼父松下清景。侍從曰、仕我否。直政曰、奉命乃載歸、遂賜其舊邑井伊谷。統故部曲。是月、以長篠賜與平信昌、井伊氏與平氏皆南朝時屬官軍者也。侍從知信昌可用、使松平伊昌助之、益修守禦、以備勝頼。

訓讀 三年正月、天野康景吉夢有り。以爲へらく、甲斐に克つる兆と。之を獻す。二十日、因つて連歌會を命じ、著して恒例と爲す。二月、侍従、城下に出獵して一成年を見る。容貌秀俊。之を問ふ。對へて曰く「井伊直親の孤子、名は直政、幼字は萬千代。繼父松下清景に育せらる」と。侍従曰く「我に仕へんや否や」と。直政曰く「命を奉せん」と。乃ち載せて歸り、其の舊邑井伊谷を賜ひ、故の部曲を統べしむ。是の月、長篠を以て奥平信昌に賜ふ。井伊氏・奥平氏は、皆南朝の時官軍に屬せし者なり。侍従、信昌の用ふべきを知り、松平伊昌をして之を助けしめ、益々守禦を修めて、以て勝頼に備ふ。

通釋 三年正月、天野康景は芽出度い連歌の夢を見た。甲斐に勝つ前兆と考へた。それで此の夢を奉つた。そこで、二十日連歌會を開かせ、それを行事の中に書き著して以後毎年の例とした。侍従は城下に狩に出て十五六の子供を見つけた。顔付が人並秀れて立派である。誰かと訊ねて見た。答へて曰ふには「井伊直親の孤子で名は直政、幼名は萬千代と云ひます。繼父、松下清景に養育されてをります」と。侍従が曰ふには「私に仕へる氣があるか、どうだ」と。直政が曰ふには「仰せに従つてお仕へ申します」と。そこで車に載せてつれ歸り、やがて井伊氏の舊領井伊谷を賜はつて、昔の部曲を支配させた。この月、長篠を奥平信昌に賜はつた。井伊氏・奥平氏は皆南北朝時代に官軍に従つた者である。侍従は信昌が役に立つ男であると知つて、松平伊昌に援助をさせ、愈々防備を固めて勝頼に對する守りとした。

吉夢 (康景の婢が連歌の發句を夢み、) 成童 (十五歳位) その詞に吉兆があつたのである。

四月、勝頼侵宇理。我吏人大賀彌四郎者、以文無害起岡崎胥徒、至司二十餘邑、稅

務竊懷異圖、與其黨小谷倉地山田三人謀、通款甲斐。曰「臣掌岡崎管鑰、城之所有、世子與諸將質耳。請啓大師、挾質以臨濱松、無不降矣。」勝頼大喜、刻期來襲。山田中悔、自首世子。世子使人伏其臥内、聽之、盡得其實、急報之濱松。倉地小谷知事覺、逃捕斬倉地、終執大賀、窮治服罪。乃反接馬上、徇之二城、先磔其妻子。然後生理之地、而鋸其首。勝頼潛兵至榆木、聞大賀敗、轉掠榆木牛窪。侍従距吉田、世子距法藏寺、擊卻之。

訓讀 四月、勝頼、宇理を侵す。我が吏人大賀彌四郎なる者、文無害を以て岡崎の胥徒より起り、二十餘邑の稅務を司るに至る。竊に異圖を懷き、其の黨小谷・倉地・山田の三人と謀り、款を甲斐に通ず。曰く「臣、岡崎の管鑰を掌る。城の有する所は、世子と諸將の質とのみ。請ふ、大師を啓かん。質を挾み以て濱松に臨まば、降らざるなからん」と。勝頼大に喜び、期を刻し來り襲はんとす。山田、中ごろ悔いて世子に自首す。世子人をして其の臥内に伏して之を聽かしめ、盡く其の實を得、急に之を濱松に報ず。倉地・小谷、事覺る、を知つて逃る。捕へて倉地を斬り、終に大賀を執へ、窮治罪に服せしむ。乃ち馬上に反接し、之を二城に徇へ、先づ其の妻子を磔し、然る後に之を地に生理して、其の首を鋸す。勝頼、兵を潛め榆木に至り、大賀の敗を聞き、轉じて榆木・牛窪を掠む。侍従は吉田に距ぎ、世子は法藏寺に距ぎ。擊つて之を卻く。

通釋 四月、勝頼は宇理を侵略した。我が徳川氏の役人で大賀彌四郎といふ者が、法の處置が大層公平であるといふので、岡崎の人夫から身を起して、二十餘ヶ村の税取立の役を司るまでになつた。此の男が人知れず謀叛心を懷き、仲間の小谷・倉地・山田の三人と相談して、甲斐に内通した。曰ふには「私は岡崎城の鍵を預かつてをります。此の城に居る者は、世子と、諸將の人質だけです。一つ軍勢を御案内致させて下さい。この人質を捕へて行つて、濱松にお向ひなさるなら間違つても降参せぬことはありません」と。勝頼は大層喜んで、期日を定めて攻め込む手筈にした。所が山田は中途で後悔して世子に自首して出た。世子は人をやつて大賀の寢所に隠れて話を聞き取らせ、すつかり事實を知つて、急いで濱松に報告した。倉地・小谷は事が露見したと知つて逃げた。先づ倉地を捕へて斬り、終に大賀をも捕へ、厳しく責めて罪を白状させた。そこで馬上に後手に縛り上げ、岡崎・濱松の兩城を引き廻し、先づその妻子を磔刑に處し、それから彼を地中に生埋にして、その首を鋸で引き切つた。勝頼は兵を人に知れぬやうに率ゐて榎木まで来たが、大賀の失敗を聞いて、方向をかへて榎木と牛窪を掠奪した。侍従は之を吉田に距き、世子は法藏寺に距いで、撃ち退けた。

(濱松・岡崎)

語釋 文無害(よく文法に則つて、人に傷害なきことをいふ。取崩) ○胥徒(小) ○臥内(山田の殿) ○反接(後ろ手に縛り) ○二城

五月、勝頼大舉攻長篠、築壘于鳶巢山、分兵絕其饒道。信昌與伊昌厲衆堅守。侍従使小栗大六乞援於信長。信長不果出。奥平貞能自往固請。信長許之。未至。信昌出

戰卻敵焚其竹楯。勝頼攻奪其甕城、益修攻具、鑿地道環塹柵、攻擊連晝夜。信昌謂其衆曰「孰能出促援兵者」鳥居勝高素倔强、稱強右衛門。進曰「臣請往矣」信昌許之。夜縋而出。至侍従營、致信昌命曰「城兵未疲、鉛硝亦具。所缺者糧耳。不急救之、則信昌自殺、以免士卒」侍従召見、慰勞之曰「信長既在途、吾亦將以明日出。因留勝高自從辭曰「城中延領遲報、臣不忍留也」即夜馳歸、將踰柵入城、爲敵邏兵所執。勝頼命解縛諭之曰「汝往語城兵、信長家康不能來、宜速出降也。則吾厚賞汝矣」勝高曰「諾」。乃使甲士十餘人露刃擁之、至于城下。勝高仰城大呼曰「諸君努力、大兵來援、不出三日言未畢、刃叢而死。勝頼益嚴防備、張索濠上、以防城兵逃出。

訓讀 五月、勝頼大舉して、長篠を攻め、壘を鳶巢山に築き、兵を分ち其の饒道を絶つ。信昌、伊昌と衆を厲して堅く守る。侍従、小栗大六をして援を信長に乞はしむ。信長出づるを果さず。奥平貞能、自ら往いて固く請ふ。信長之を許す。未だ至らず。信昌出で戦つて敵を卻け、其の竹楯を焚く。勝頼攻めて其の甕城を奪ひ、益々攻具を修め、地道を鑿ち、塹柵を環し、攻撃晝夜に連る。信昌、其の衆に謂つて曰く「孰か能く出で、援兵を促す者ぞ」と。鳥居勝高、素より倔强、強右衛門と稱す。進んで曰く「臣請ふ、往かん」と。信昌、之を許す。夜、

縋して出で、侍従の營に至り、信昌の命を致して曰く「城兵未だ疲れず。鉛硝も亦具る。缺くる所の者は糧のみ。急に之を救はずんば、則ち信昌自殺して以て士卒を免れしめん」と。侍従、召見し、之を慰勞して曰く「信長既に途に在り。吾れ亦、將に明日を以て出でんとす」と。因つて勝高を留めて自ら從へんとす。辭して曰く「城中、領を延べて報を遅つ。臣、留るに忍びざるなり」と。即夜馳せ歸り、將に柵を踰え城に入らんとす。敵の邏兵の執ふる所と爲る。勝頼命じて縛を解き、之を諭して曰く「汝往いて城兵に語げよ。信長、家康、來る能はず。宜しく速に出で降るべし」と。則ち吾れ厚く汝を賞せん」と。勝高曰く「諾」と。乃ち甲士十餘人をして刃を露し之を擁し、城下に至らしむ。勝高、城を仰ぎ、大に呼んで曰く「諸君、努力せよ。大兵來り援くる、三日を出でず」と。言未だ畢らざるに、又叢つて死す。勝頼、益々防備を嚴にし、索を濠上に張り以て城兵の逃を防ぐ。

通釋 五月、勝頼は大軍を率ゐて長篠を攻め、鳶巢山に壘を築き、部隊を分けて長篠城の糧道を斷ち切つた。信昌は伊昌と兵を督勵して固く守つた。侍従は小栗大六をして援を信長に頼ませた。併し信長は來るかと思つたら出では來なかつた。奥平貞能が自分で出懸けて行つて是非にと頼んだ。信長は之を許した。けれどもまだ來なかつた。信昌は城を出て戰つて敵を退け、その竹の柵を燒いた。勝頼は攻めよせてその外城を奪ひ、益々攻め道具を整へ、地道を掘り濠や柵を圍らし、晝夜連續して攻撃した。信昌は其の部下の衆に向つて曰ふには「誰か出かけて行つて援兵を催促して來る者はあるまいか」と。鳥居勝高は元來利かぬ氣の男で強右衛門と稱してゐた。進み出て曰ふのに「私に行かせて下さい」と。信昌はそれを許した。強右衛門は夜繩に縋つて城を出で侍従の陣屋に行つて信昌の命令を傳へて曰ふには「城兵はまだ疲れて居りません。火藥もたつぷり有ります。不足なものは糧食だけです。直ぐに救つて下さらなければ、信昌が自殺して士卒の命を免れるやうにすることにせう」と。

侍従は彼を召しよせて會ひ、慰勞して曰ふには「信長は最早出發して途中に居る。余も明日には出發しようとしてゐる」と。そこで勝高を留め自分のお供に加へんとした。勝高は辭退して曰ふのは「城中では首を長くして返事を待つてをります。私はここに留まつて安閑としてゐるに忍びません」と。すぐその晩馳せ歸り、すでに武田方の柵を越えて城に入らうとした。敵の巡廻の兵に捕はれた。勝頼は命じて縛を解き諭して曰ふには「お前は向ふへ行つて城兵にかう返事をせよ。信長も家康も來ることが出来ない。早く城を出て降参するが宜いと。さうすれば余はお前に手厚い褒美を取らせるであらう」と。勝高が曰ふには「承知しました」と。そこで鎧武者十餘人に刀の鞘を拂ひ、勝高を城下まで連れて行かせた。勝高は城を見上げ、大聲に叫んで曰ふのに「諸君努力し給へ。大軍が援けに來るのは三日以内だ」と。その言葉を言ひ切らぬ中に澤山の刀が集つて突き刺されて死んだ。勝頼は益々防備を嚴重にし、索を濠の上に張つて城兵の逃げ出るのを防いだ。

語釋 襄城(貳城、俗に)

十八日、侍従以騎卒二萬先進、陣高松。信長與長子信忠、合五萬衆、陣設樂。信昌望見之作書曰「城猶足堅守。請勿輕進。損兵敵若急攻。當鳴鐘報之。」使鈴木金七齎往。夜踰濠、以短刀截索、洎而來達。侍従獲書以告信長。信長甚憚。甲斐人植重柵穿塹、守以鳥銃。使侍従亦倣之。大久保忠世其弟忠佐奉命以銃手三百爲先鋒。

訓讀 十八日、侍従、騎卒二萬を以て先づ進み、高松に陣す。信長、長子信忠と、五萬の衆を合せ設樂に陣す。

信昌、之を望見し、書を作つて曰く「城猶堅守するに足る。請ふ、輕しく進みて兵を損する勿れ。敵若し急に攻めば、當に鐘を鳴して之を報ずべし」と。鈴木金七をして齎し往かしむ。夜、濠を踰え、短刀を以て索を截り、濠いで來り達す。侍従、書を獲、以て信長に告ぐ。信長甚だ甲斐の人を憚り、重柵を植て、塹を穿ち、守るに鳥銃を以てし、侍従をして亦之に倣はしむ。大久保忠世其の弟忠佐、命を奉じ、銃手三百を以て先鋒と爲る。

十八日、侍従は騎兵、歩兵二萬人を率ゐて先づ進み、高松に陣取つた。信長は長子信忠と五萬の兵を合せ、設樂に陣取つた。信昌は遙にそれを見、手紙に書いて曰ふには「城はまだ固く守つて行くに充分であります。どうぞ輕率に進んで兵力をお損じにならぬやう。敵がもし急に攻めて來ましたら、鐘を鳴らしてお知らせすることに致します」と。鈴木金七に此の書を持つて行かせた。鈴木は夜濠を越え、短刀で索を切り、泳いで行き着いた。侍従は手紙を見て、以上の内容を信長に知らせた。信長は甲斐の兵にひどくおびえてゐて、幾重も柵を立て、濠を堀り、鳥銃でそれを守り、侍従にもその通りに眞似をさせた。大久保忠世とその弟の忠佐が命をかしこんで銃手三百人を率ゐて先鋒となつた。

參河卒小栗某、奔在甲斐。於是爲勝頼使上國而還、竊懷歸志、過本多忠勝。忠勝攜謁。侍従授之密謀、使歸告勝頼、以援軍易與狀。勝頼大喜、欲戰。將佐皆諫、弗聽。乃分兵當城、使武田信實守鳶巢山、而自進瀧澤、勒兵爲十三隊。本多廣孝、酒井忠次、相謂曰「我誘敵入死地矣。成瀨正一嘗在甲斐、記敵旗幟。侍従召之、指甲斐軍、問曰

「左者爲誰」曰「山縣昌景也。問其右者」曰「馬場信房也。問其中者」曰「公族也。忠次因說曰「敵鋒嚮我、銳甚。請分兵遶出其背、焚鳶巢壘、使敵顧後、則克矣。侍従曰「善。未告信長。信長數發候騎、候敵。皆曰「兵衆而整、不可犯也。一軍失色。」

訓讀 參河の卒小栗某、奔つて甲斐に在り。是に於て、勝頼の爲めに上國に使用して還り、竊に歸志を懷き、本多忠勝に謁する。忠勝携へて謁す。侍従、之に密謀を授け、歸つて勝頼に告ぐるに、援軍易し易きの狀を以てせしむ。勝頼、大に喜び、戰はんと欲す。將佐皆諫む。聽かず。乃ち兵を分ち城に當り、武田信實をして鳶巢山を守らしめ、而して自ら進んで瀧澤を渡り、兵を勒して十三隊と爲す。本多廣孝、酒井忠次、相謂つて曰く「我れ敵を誘つて死地に入れん」と。成瀨正一、嘗て甲斐に在り。敵の旗幟を記す。侍従、之を召し、甲斐の軍を指して、問うて曰く「左の者を誰と爲す」と。曰く「山縣昌景なり」と。其の右なる者を問ふ。曰く「馬場信房なり」と。其の中なる者を問ふ。曰く「公族なり」と。忠次因つて説いて曰く「敵鋒、我に嚮ひ、銳甚し。請ふ、兵を分ち遶つて其の背に出で、鳶巢の壘を焚き、敵をして後を顧みしめば則ち克たん」と。侍従曰く「善し」と。未だ信長に告げず。信長、數、候騎を發し敵を候ふ。皆曰く「兵衆くして整ふ。犯すべからざるなり」と。一軍、色を失ふ。

通釋 參河の兵卒の小栗某といふものが、出奔して甲斐に居つた。この時、勝頼の爲めに上方に使に行つて歸つて來たが、内々歸參の心を起し、本多忠勝の營に顔を出した。忠勝は之をつれてお目通りをした。侍従はこの

者に秘密の計略を授け、歸つて勝頼に、援軍の織田勢は恐るゝに足らぬといふことを言はせた。勝頼は大層喜んで戦はうと思つた。大將參謀達は皆之を諫めた。併し聞き入れなかつた。そこで兵を分けて城に當り、武田信實をして鳶巢山を守らせ、そして自分は進んで瀧澤を渡り、兵を手分けして十三隊とした。本多廣孝と酒井忠次は話し合つて曰ふのに「我々は敵を誘ひ出して、どうしても助からないやうにしてやらう」と。成瀬正一は以前甲斐に居つたことがある。敵の旗説しを憶えてゐた。侍従は之を呼びよせ甲斐の軍を指さし問うて曰ふのに「左の方にあるのは誰であるか」と。曰く「山縣昌景です」と。その右の方は誰であるかと問うた。馬場信房ですと。答へた。真中は誰かと問ふ。「一門の人です」と答へた。そこで忠次が説いて曰ふのに「敵の鋒先が味方に向つてゐて非常に勢が強い。一つ兵を分け、ぐるりその背後に出て、鳶巢の壘を焼き、敵をして後を振り返らせるやうにしたら勝てるでせう」と。侍従が曰ふのに「それは好い計略だ」と。信長にはまたそのことを知らせなかつた。信長は度々斥候の騎兵を出して敵状を偵察した。皆報告して曰ふには「兵數は多いし、よく整つてゐます。之を犯すことは不可能です」と。全軍恐怖して顔色を變へた。

二十日、信長召諸將問計。諸將氣沮、莫敢言者。忠次進曰「臣使入間視敵兵寡贏。敗兆皆備。請明日決戰。」信長曰「汝之勇果如所聞。因命酒觴。」忠次使傳之。信忠曰「聞汝善撈蝦舞。爲我一爲之。」忠次起舞。衆敲箴和之。舞畢復議戰。忠次復進曰「是役係寡君國事。臣不敢辭讓。因進襲鳶巢之策。」信長心善之。而恐其漏泄。佯叱斥忠次。忠次弗憚罷。已而信長陰召還之。附兵五千使往。侍從命松平伊忠。其子家忠。本多廣孝。菅沼定盈。阿部定次。與平貞能。率三千人助忠次。約曰「至則舉燧。忠次不歸舍而發。乘夜踰險。五更達壘下。」伊忠謂家忠曰「我必戰死。汝全軀以事主公。」家忠泣請共死。伊忠叱曰「國恩未報。又絕先祀。忠孝安在。」乃分兵附之。訣飲而去。

二十日、信長諸將を召し計を問ふ。諸將氣沮み、敢て言ふ者なし。忠次進んで曰く「臣、人をして敵兵を間視せしむるに、寡贏なり。敗兆皆備る。請ふ、明日決戦せん」と。信長曰く「汝の勇果して聞く所の如し」と。因つて酒を命じ忠次に賜し、之を信忠に傳へしめて曰く「聞く、汝、撈蝦舞を善くすと。我が爲に一たび之を爲せ」と。忠次起つて舞ふ。衆、箴を敲き之に和す。舞ひ畢り、復戦を議す。忠次復進んで曰く「是の役は寡君の國事に係る。臣敢て辭讓せず」と。因つて鳶巢を襲ふの策を進む。信長、心に之を善しとす。而れども其の漏泄を恐れ、佯り叱し忠次を斥く。忠次憚らず。罷む。已にして信長陰に之を召還し、兵五千を附し往かしむ。侍従、松平伊忠、其の子家忠、本多廣孝、菅沼定盈、阿部定次、與平貞能に命じ、三千人を率ゐ忠次を助けしむ。約して曰く「至れば則ち燧を舉げよ」と。忠次、舍に歸らずして發し、夜に乘じ險を踰え、五更、壘下に達す。伊忠、家忠に謂つて曰く「我れ必ず戦死せん。汝、軀を全くし以て主公に事へよ」と。家忠、泣いて共に死せんと請ふ。伊忠、叱して曰く「國恩未だ報せず。又先祀を絶つ。忠孝安に在る」と。乃ち兵を分ち之に附し、訣飲して去る。

通釋

二十日、信長は諸將を召して計略を尋ねた。諸將は皆意氣沮喪して進んで口を切る者としてゐなかつた。

忠次は進み出て曰ふに「私は人をやつて敵兵を偵察させました所、兵數も少ないしそれに疲れてゐます。敗ける兆しがすつかり揃つてゐます。どうぞ明日は決戦を致し度いものです」と。信長が曰ふのに「お前の勇氣は果して聞いてゐた通りである」と、そこで酒を用意させ、忠次に「盃を與へ、それを信忠に廻させて曰ふには「聞く所によると、お前は蝦すくひの舞が巧いさうだ。私の爲めに一度やつて見せてくれよ」と。忠次は立ち上つて舞をした。一同は箏を敲いて之に調子を合せた。舞ひ終つてから、又戦争の相談をした。忠次は又進み出て曰ふには「此の度の戦は我が君の國事に關係することでありませぬ」と。さう斷つて、鷲巢を襲ふ計略を進言した。信長は心中にそれを好いと思つた。併し外に漏れるのを恐れ、表面わざと叱り付けて忠次を退けた。忠次は不愉快な面持で退つた。その會議はそれでお終ひになつた。その中に信長は人に知れぬ様に忠次を呼び歸し、兵五千人を付けて出立させた。侍従は松平伊忠・其の子家忠・本多廣孝・菅沼定盈・阿部定次・奥平貞能に命じて三千人を率ゐて忠次を助けさせた。約束を定めて曰ふには「鷲巢に着いたら、のろしを打ち上げろ」と。忠次は自分の宿所にも歸らずに出發し、夜の間に乘じ、險阻な所を踏み越え午前四時頃に壘の下に達した。伊忠は家忠に向つて曰ふには「私はこんどはきつと戦死するだらう。お前は生き長らへて主公に仕へてくれよ」と。家忠は泣いて一緒に死に度いと願つた。伊忠は叱りつけて曰ふのに「未だ國恩にも報いてゐない。祖先の祭も絶つことになる。そんなことで忠孝の道は一體どこにあるか」と。そこで兵を分けて家忠に付けてやり別れの酒をくみ交して立ち去つた。

語釋 擄蝦舞(方今の踊すくひに類)

味爽、忠次舉燧、大喊逼壘。信實惶遽出距。伊忠力戰死之。終破殺信實、遂焚諸砦。甲斐軍驚動。我兵觀燧大喜。織田氏將挑戰。忠佐謂忠世曰「我主彼客、使彼先戰、我之恥也。」忠世曰「然乃共出柵外、誘敵左陣、突騎三千先縱。我銃隊擊卻之。敵中軍繼至。忠世忠佐周馳健闘。信長望其背、旗徽號、使人來問曰「一人以蝶爲徽、一人以鏡爲徽。其督衆也、如臂使指。敵乎、我乎。」侍從對曰「蝶爲兄、鏡爲弟。皆僕家舊臣也。」信長歎曰「德川氏何多佳士也。」當是時、爲二人所擊破者、皆轉赴信長。前軍敵、右軍亦冒銃直進。信長前軍走入柵內。柵殆破。敵逼其麾下。侍從馳騎告信長曰「公令諸隊齊發。銃我軍用槍橫擊、可以克也。」信長傳令敵兵大沮。本多忠勝、松平忠正、鳥居元忠、榊原康政等、攢槍接戰。甲斐諸軍遂大潰。信昌、伊昌、出長篠夾擊、幾獲勝。賴勝、賴僅免。

訓讀 味爽、忠次、燧を擧げ、大に喊して壘に逼る。信實、惶遽出で距ぐ。伊忠、力戰して之に死す。終に信實を破殺し、遂に諸砦を焚く。甲斐の軍驚動す。我が兵、燧を觀て大に喜ぶ。織田氏將に戰を挑まんとす。

忠佐・忠世に謂つて曰く「我は主、彼は客。彼をして先戦はしむるは、我の恥なり」と。忠世曰く「然り」と。乃ち共に柵外に出で敵を誘ふ。敵の左陣の突騎三千先縦つ。我が銃隊、撃つて之を卻く。敵の中軍繼ぎ至る。忠世・忠佐、周馳健闘す。信長、其の背旗の徽號を望み、人をして來り問はしめて曰く「一人は蝶を以て徽と爲し、一人は鏡を以て徽と爲す。其の衆を督するや、臂の指を使ふが如し。敵か、我か」と。侍従、對へて曰く「蝶は兄たり。鏡は弟たり。皆僕が家の舊臣なり」と。信長、歎じて曰く「徳川氏何ぞ佳士多きや」と。是の時に當り、二人の撃破する所と爲る者、皆轉じて信長の前軍に赴く。敵の右軍も亦銃を冒して直進す。信長の前軍、走つて柵内に入る。柵殆ど破る。敵、其の麾下に逼る。侍従、騎を馳せ信長に告げて曰く「公、諸隊をして齊しく銃を發せしめよ。我が軍、槍を用ひて横撃せば、以て克つべきなり」と。信長令を傳ふ。敵兵、大に沮む。本多忠勝・松平忠正・鳥居元忠・榊原康政等、槍を擡めて接戦す。甲斐の諸軍遂に大に潰ゆ。信昌・伊昌、長篠を出で、夾撃し、幾ど勝頼を獲んとす。勝頼僅に免る。

通釋 夜の引き明けに忠次は烽を上げ、盛んに関を造つて壘に攻めよせた。信實は恐れあはて、城から出て防いだ。伊忠は奮戦して討死した。終に信實を打ち敗り殺して終ひ、その勢で諸所の砦を焼いた。甲斐の軍は驚いて動揺した。我が軍は烽の上つたのを見て大喜びであつた。織田氏方でも戦をしかけようとした。忠佐が忠世に向つて曰ふには「こちらは主軍で、こちらは客軍だ。向ふに先に戦はせるのは、我々の耻辱だ」と。忠世も曰ふのに「その通りだ」と。そこで一緒に柵の外に出で敵を誘ひかけた。敵の左陣の突撃騎が三千人、先づ飛び出して來た。味方の鐵砲組がそれを撃ち卻けた。續いて敵の中軍がやつて來た。忠世と忠佐はぐるぐる馳廻つて、自覺ましい戦をした。信長はその指物の紋を打ち眺め、人を寄越して問はせて曰ふのに「一人は蝶を紋所

にし、一人は鏡を紋所にしてゐる。その部下を指揮することは、臂が指を使ふやうに自在を極めてゐる。敵方の者ですか、味方の者ですか」と。侍従は答へて曰ふのに「蝶の方が兄で、鏡の方は弟であります。何れも私の古くからの家來で御座います」と。信長は感歎して曰ふには「徳川氏には何んと立派な武士の多いことではある」と。この時この二人にうち破られた者は、皆向きを變へて織田氏の前軍にかつて來た。敵の右軍も銃丸を冒して直進して來た。信長の前軍は走つて柵の中に逃げ込んだ。その柵も殆んど破れた。敵は旗下まで攻め寄せて來た。侍従は騎馬を飛ばせて信長に告げさせて曰ふには「貴公は諸隊に命じて一齊に銃を發射させて下さい。そして我軍が槍を用ひて側面から撃つてかゝりますと、確に勝利を得ることが出來ます」と。信長はその通り一齊射撃の命令を傳へた。敵はひどく勢を殺がれた。本多忠勝・松平忠正・鳥居元忠・榊原康政等が槍先きを揃へて接戦した。甲斐の諸軍は遂に大に潰滅した。信昌と伊昌は長篠城を出て夾み撃ちにして、殆んど勝頼を虜にしよつとした。勝頼は危く逃れた。

是日、自卯至午、戰凡五十八合、斬首一萬餘級。武田氏宿將精兵略殲於此。侍従往説信長曰「今乘大勝之威、長驅追北、則甲斐・信濃可一舉取也。羽柴秀吉從在軍中。亦勸之。信長弗聽而去。侍従見信昌賞其堅守、加賜采邑、許以女妻之。遂大賞將士。數日親往岐阜謝。信長亦謝曰「卿之君臣、以寡擊衆、爲吾扞東面數年矣。不則吾安得定京畿哉。今勝頼一敗、褫氣不能復出頭。卿宜取駿河、遂及甲斐・信濃。吾亦當相

助焉。因見扈從將士曰「長髯將何不來。」蓋謂忠世也。忠佐在扈從。對曰「家兄有故、不得拜趨。」信長曰「吾子兄弟、長篠之戰、可謂絕類逸群矣。」手賜衣服、又賞忠次功、賜薙刀。侍從辭歸。

訓讀 是の日、卯より午に至り、戰凡て五十八合、斬首一萬餘級。武田氏の宿將、精兵、略此に殲く。侍從、往いて信長に説いて曰く「今、大勝の威に乗じ、長驅して北ぐるを追は、則ち甲斐、信濃、一擧して取るべきなり」と。羽柴秀吉、從つて軍中に在り。亦之を勸む。信長聽かずして去る。侍從、信昌を見て、其の堅守を賞し、采邑を加賜し、女を以て之に妻はすを許し、遂に大に將士を賞す。數日にして親ら岐阜に往き謝す。信長も亦謝して曰く「卿の君臣、寡を以て衆を撃ち、吾が爲に東面を打ぐこと數年なり。不らざれば則ち吾れ安んぞ京畿を定むるを得んや。今勝頼、一敗氣を觸れ、復頭を出だす能はず。卿宜しく駿河を取り、遂に甲斐・信濃に及ぶべし。吾れも亦當に相助くべし」と。因つて扈從の將士を見て曰く「長髯の將、何ぞ來らざる」と。蓋し忠世を謂ふなり。忠佐、扈從に在り。對へて曰く「家兄、故有り、拜趨するを得ず」と。信長曰く「吾子の兄弟、長篠の戰に、絶類逸群と謂ふべし」と。手づから衣服を賜ひ、又忠次の功を賞し、薙刀を賜ふ。侍從辭して歸る。

通釋 この日は午前六時頃から午まで合戦は全部で五十八回、斬首一萬餘級。武田氏の譜代の將と精銳な兵隊とはこの戦争で殆んど盡きた。侍從は信長の所に出かけて説いて曰ふには「今、大勝の勢に乗じて、遠く敵を追ひかけて行つたら、甲斐と信濃は一度に攻め取ることが出来ませう」と。羽柴秀吉も從軍してゐた。秀吉も亦

それを勧めた。併し信長は承知しないで歸り去つた。侍從は信昌にあつて、彼がよく城を守つたことを賞し、領地を増加し、自分の娘を妻にやることを許した。それから將士共に盛んに褒美をやつた。數日たつてから岐阜に出かけてお禮を述べた。信長も禮を言つて曰ふには「貴公の君臣は小勢で多勢を撃ち、余のために東の方面を數年の間防いで下さつた。そうでなかつたならば余はどうして京畿地方を平定することが出来たでせう。今勝頼は一度の敗軍ですつかり意氣沮喪して、早頭をのし上げることは出来なくなりました。貴公は駿河を取り、その上甲斐・信濃を攻め取られたら宜いでせう。余も屹度御援助致すでせう」と。そしてお供の將士を見て曰ふには「あの頼賢の長い大將はどうして來なかつたか」と。これは忠世のことを謂つたのである。弟の忠佐がお供の中にゐた。返事をして曰ふには「兄は差支があつて參ることが出来ませんでした。信長が曰ふには「お前達兄弟が長篠の戰での手柄は誠に拔群と謂ふべきぢや」と。手づから衣服を賜ひ、又忠次の功を賞して薙刀を賜はつた。そこで侍從は暇を告げて歸つた。

六月、侍從攻二股。使忠世守蜷原。若以當之。轉至掛川。攻光明城。使諸將逼其前。而自潛兵襲其後。下之。七月、與世子信康攻諏訪原。至八月、下之。城在田中高天神之間。難其守。松平忠次請守。乃賜偏諱。改名康親。稱周防守。名城曰牧野。以武田氏比殷紂也。自是勝頼數出。遂不能深入。侍從遂攻小山。酒井忠次曰「我已得二城。師暴

兵疲不可不戢。勝頼慄悍過父。我攻小山必來援之。前有堅城。後有強敵。取敗之道也。康親勸往。遂往。

六月、侍從、二股を攻む。忠世をして蜷原の砦を守り以て之に當らしめ、轉じて掛川に至り、光明城を攻め、諸將をして其の前に逼らしめ、而して自ら兵を潛め其の後を襲つて之を下す。七月、世子信康と諏訪原を攻め、八月に至り之を下す。城は田中・高天神の間に在り。其の守を難んず。松平忠次守らんと請ふ。乃ち偏諱を賜ひ、名を康親と改め、周防守と稱せしめ、城を名づけて牧野と曰ふ。武田氏を以て殷紂に比するなり。是より勝頼、數、出づるも、遂に深く入る能はず。侍從、遂に小山を攻む。酒井忠次曰く「我れ己に二城を得、師暴し兵疲る。戢めざるべからず。勝頼、慄悍父に過ぐ。我れ小山を攻めば、必ず來つて之を援けん、前に堅城あり。後に強敵あり。敗を取るの道なり」と。康親往くを勸む。遂に往く。

六月、侍從、二股を攻めた。忠世をして蜷原の砦を守つてそれに當らせ、自分は轉じて掛川に至り光明城を攻め、諸將をして前方に肉迫させ、自分は潛かに兵を率ゐて、後方を襲ひ撃つて下した。七月、世子信康と諏訪原を攻め、八月に入つて之を下した。この城は田中と高天神(共に武田方の城)の間に在つて、非常に守備の困難な所であつた。松平忠次が守ることを願ひ出た。そこで本名の一字を賜はつて名を康親と改め、周防守と稱へさせ、城を牧野と名づけた。(牧野は周の武王が殷の紂王を亡ぼした所である)武田氏を殷の紂王に比したのである。この後勝頼は度々出て來たが、何時でも深く攻め込むことが出来なかつた。さて侍從は進んで小山を攻めようとした。酒井忠次が曰ふには「我が軍はすでに光明城・諏訪原の二城を陥れ、軍隊は風雨にさらされ疲勞を

してゐます。ひと先づ戈をさめなければなりません。勝頼は素早く荒つぽいこと、父信玄以上です。今我が軍が小山を攻めたなら必ず援けに來るでせう。すると我が軍は前には堅固な城を控へ、背後に強敵を受けることになりまます。これは敗戦の憂目を見る仕方では御座います」と。康親は進み攻めることを勧めた。遂に小山に向つて進軍した。

語釋 蜷原(江邊) ○堅城(小山を)

九月、勝頼募兵二萬陣大井河上。侍從曰「果如忠次言。乃循河班師。城兵出躡。世子信康殿而退。勝頼不敢逼。自是世子常從軍。十月、使大久保忠世・榊原康政攻二股。元通岩村欲殺之。信元懼來奔。侍從固請宥之。信長弗聽。遂賜死。使信盛取其邑。盡逐信元族人。獨其季子留匿參河。

九月、勝頼、兵二萬を募り、大井河の上に陣す。侍從曰く「果して忠次の言の如し」と。乃ち河に循ひ師を班す。城兵出で、躡す。世子信康、殿して退く。勝頼敢て逼らず。是より世子、常に軍に従ふ。十月、大久保忠世・榊原康政をして、二股を攻めしむ。月を踰えて之を下し、遂に伯耆塚・八荒山を取る。信長復岩村を下す。佐久間信盛、水野信元と御あり。信元岩村に通ずと譖し、之を殺さんと欲す。信元懼れて來り奔る。侍從固く之

を宥さんと請ふ。信長聽かず。遂に死を賜ひ、信盛をして其の邑を取らしめ、盡く信元の族人を逐ふ。獨り其の季子、留つて參河に匿る。

通釋 九月、勝頼は兵二萬を募り、大井河の附近に陣取つた。侍従が曰ふのに「やはり忠次の言つた通りであつた」と。そこで河に沿つて軍隊を返した。小山の城兵が出て来て後を追ひかけた。世子信康が殿をして退いた。勝頼は思ひ切つて攻め寄せなかつた。これからは世子は何時も從軍した。十月、大久保忠世と榊原康政に二股を攻めさせた。翌月に入つて之を陥れ、續いて伯耆塚と八荒山を取つた。信長は又岩村を陥れた。佐久間信盛は水野信元と仲違ひであつた。信盛は信元が岩村と内通してゐると讒言して之を殺さうと計つた。信元は恐れて侍従の方へ逃げて來た。侍従は彼を赦免して貰ひ度いと固く請うた。信長は許さなかつた。遂に自殺を命じ、信盛をしてその領地を取らせ、又信元一族を全部追放した。その末子が唯だ一人參河に留まつて隠れてゐた。

諸釋 伯耆塚・八荒山(遠)

四年春、侍従築城横須賀、使大須賀康高守焉、以久世廣宣・坂部廣勝・渥美勝吉屬之。勝頼納糧于高天神。侍従自出、相距芝原、欲戰。内藤信成諫而止。乃交綏。上杉謙信出兵上野、遙爲應援。勝頼不敢南出。侍従乃納今川氏眞於駿河、使松平康親・松平家忠並視其政。八月、自將拔樽井、若使安倍光眞守之。五年八月、侍従入山梨、擊

甲斐、將穴山信良破之。甲斐兵又攻樽井。光眞擊卻之。十月、侍従修築濱松城。十二月、侍従進從四位下、遷右近衛少將。

訓讀 四年春、侍従、城を横須賀に築き、大須賀康高をして守らしめ、久世廣宣・坂部廣勝・渥美勝吉を以て之に屬す。勝頼、糧を高天神に納る。侍従自ら出で、芝原に相距ぎ、戰はんと欲す。内藤信成諫めて止む。乃ち交綏す。上杉謙信、兵を上野に出だし、遙に應援を爲す。勝頼敢て南に出ず。侍従乃ち今川氏眞を駿河に納れ、松平康親・松平家忠をして、並に其の政を視しむ。八月、自ら將として樽井の砦を抜き、安倍光眞をして之を守らしむ。五年八月、侍従、山梨に入り、甲斐の將穴山信良を撃つて、之を破る。甲斐の兵、又樽井を攻む。光眞撃つて之を卻く。十月、侍従、濱松城を修築す。十二月、侍従、從四位下に進み、右近衛少將に遷さる。

通釋 四年春、侍従は横須賀に城を築き、大須賀康高をして守らせ、久世廣宣・坂部廣勝・渥美勝吉の三人をその配下につけた。勝頼は高天神城に兵糧を運び入れた。侍従は自ら出陣して芝原に相對峙し、戰はうと思つた。内藤信成が諫めて之を止めた。そこで兩軍互に引き退いた。上杉謙信が上野に軍隊を出して遙に徳川氏の應援をした。勝頼は敢て南に出ては來なかつた。そこで侍従は今川氏眞を駿河に入れ、松平康親と松平家忠の兩人をして政治の後見をさせた。八月、自ら兵を率ゐて、樽井の砦を陥れ、安倍光眞をして之を守らせた。五年八月、侍従は山梨に入り、甲斐の大將の穴山信良を撃つて之を破つた。甲斐の兵が、今度は樽井を攻めて來たが、守將の光眞がそれを撃ち退けた。十月、侍従は濱松城を修築した。十二月、侍従は從四位下に進み、右近衛少將に遷された。

六年三月、少將徇駿河、攻田中。井伊直政從軍、每戰先衆、與諸將破其外郭而還。八月、大須賀康高破甲斐兵于國安河。少將侵掠駿河、至持舟而還。過田中、恐其兵出尾、爲攻城狀。敵不敢出。我兵乃還。十一月、勝頼陣小山。少將陣馬伏、徙于總社。世子夜潛濟水、視敵營歸、欲擊之。少將曰、據險之敵、不可輕擊。復交綏。七年正月、勝頼又入遠江。聞少將出乃去。四月、三子長丸生于濱松。母西郷氏。以故水野信元、孤子土井利勝爲其侍臣。利勝從其母、依土井氏、遂冒之也。

訓讀 六年三月、少將、駿河を徇へ、田中を攻む。井伊直政、軍に従ひ、戦ふ毎に衆に先んず。諸將と其の外郭を破つて還る。八月、大須賀康高、甲斐の兵を國安河に破る。少將、駿河を侵掠し、持舟に至つて還り、田中を過ぐ。其の兵の出で尾するを恐れ、城を攻むるの状を爲す。敵敢て出でず。我が兵乃ち還る。十一月、勝頼、小山に陣す。少將、馬伏に陣し、總社に徙る。世子、夜、潛に水を濟り、敵營を視ひ歸り、之を撃たんと欲す。少將曰く「險に據るの敵は、輕しく撃つべからず」と。復交綏す。七年正月、勝頼又遠江に入る。少將の出づるを聞いて乃ち去る。四月、三子長丸、濱松に生る。母は西郷氏。故の水野信元の孤子土井利勝を以て其の侍臣と爲す。利勝、其の母に従つて土井氏に依り、遂に之を冒せるなり。

通釋 六年三月、少將は駿河を觸れ降し、田中を攻めた。井伊直政は軍に従つてゐたが、戦鬪の度びに先陣を

なした。諸將と共に田中城の外郭を破つて還つた。八月、大須賀康高は甲斐の兵を國安河で破つた。少將は駿河に侵入して掠奪し、持舟まで行つて引き返し、田中を通つた。その城兵が出て來て追撃するのを恐れ、城を攻めるやうな様子を見せた。それで敵も思ひ切つて出なかつた。そこで我が軍は無事に歸つた。十一月、勝頼は小山に陣取つた。少將は馬伏に陣取り、總社に移つた。世子は夜、こつそり河を渡り、敵の陣屋を覗つて歸り、之を攻めようと思つた。少將が曰ふには「要害な場所に據つてゐる敵は輕率に討つてはならぬ」と。此の度も兩軍互に兵を引いた。七年正月、勝頼は又遠江に攻め入つた。少將が出陣したと聞いたので立ち去つた。四月、三男の長丸が濱松で生れた。母は西郷氏である。故水野信元の孤子の土井利勝をお附きとした。利勝は父の死後母に従つて土井氏に頼り、遂にその姓を名乗ることになつたのである。

初世子信康爲人剛厲、至手刃近臣。酒井忠次・大久保忠世數諫、不聽。所生關口氏以妬悍被廢、居岡崎。其婦織田氏亦妬而無男。又爲姑氏所離間、憤怨。是歲七月、織田氏遂作書以姑氏陰事告信長。因疏世子十二罪。會忠次赴安土。信長示而問之。對曰「信信長怒、使歸告少將。關口氏與勝頼通、欲除卿以立世子。遂滅我也。卿其亟計之。」忠次過岡崎不入。世子憂悸。

訓讀 初め世子信康、人と爲り性剛厲、近臣を手刃するに至る。酒井忠次・大久保忠世、數諫む。聽かず。所

生關口氏、妬悍を以て廢せられ、岡崎に居る。其の婦織田氏も亦妬にして男なし。又姑氏の離間する所と爲り、憤怨す。是の歳七月、織田氏遂に書を作り、姑氏の陰事を以て信長に告げ、因つて世子の十二罪を疏す。會忠次、安土に赴く。信長、示して之を問ふ。對へて曰く「信なり」と。信長怒り、歸つて少將に告げしむ「關口氏勝頼と通じ、卿を除き以て世子を立て、遂に我を滅さんと欲するなり。卿其れ亟に之を計れ」と。忠次、岡崎を過ぎて入らず。世子、憂悸す。

通釋 初め、世子信康は性質が剛情で荒つぱく、近臣を手にかけて斬る様なことまであつた。酒井忠次・大久保忠世が度々諫めた。併し聽き入れなかつた。實母の關口氏は嫉妬深く執念深い性質であつたので、夫人を廢めさせて岡崎にゐた。その嫁(信康の妻)の織田氏(信長の娘)も情氣深くて男の子が無かつた。これが又姑の爲めに伸を割かれて怒り怨んでゐた。此の年の七月、この織田氏は、遂に父信長に手紙を書いて、姑の秘密を知らせ、因つて夫たる世子の十二の悪事を箇條書にして述べ立てた。丁度その時、忠次が安土に行つた。信長はその手紙を見せて尋ねた。忠次が答へて曰ふには「本當の事です」と。信長は立腹し、歸つて少將に次のやうに告げさせた。「(世子の實母)關口氏は勝頼と内通し、其方を除いて世子を立て、その上私をも滅ぼさうと思つてゐます。其方は直ぐ様適當な處置をなされるがよい」と。忠次は歸途、(世子の居城なる)岡崎を通つたが、城に寄らなかつた。世子は爲めに非常に氣をもんで恐れた。

語釋 姑氏陰事(關口氏、甲斐の醫某と姦し、遂に禍心を起し、世子を立て、好みを甲斐に通じ、共に信長を滅さんと謀る。) 某甲斐に行き勝頼に請ふ。勝頼大に悦び之を許す。侍女某之を織田氏に漏らす。織田氏之を信長に知らす。

八月、少將至岡崎、放世子于大濱、使俟後命。其明、世子親來哀訴、不聽。平岩親吉爲

傳。請曰「世子材武。今遽殺之後必悔焉。臣爲傳母狀。願斬臣首以謝信長。少將泣曰「喪我良臣、而兒終不免、悔更甚矣。數日、遷世子于堀江、遂遷二股、令忠世護焉。誅關口氏。信長意未解。九月望、終使世子自殺。年二十一。世咎忠世輩不曉少將意也。初少將、姬人永見氏孕而獲罪、出產於其郷。世子潛舉之、呼荻丸。三年而見之。少將不子也。本多重次抱持而賀曰「酷肖君。君處戰國、宜多子矣。臣請育焉。世子卒。時荻丸甫六歲。而立長丸爲世子。」

訓讀 八月、少將岡崎に至り、世子を大濱に置き、後命を俟たしむ。其の明、世子親ら來つて哀訴す。聽かず。平岩親吉傳たり。請うて曰く「世子材武。今遽に之を殺さば、後必ず悔いん。臣、傳と爲つて母狀なり。願はくは臣の首を斬り以て信長に謝せよ」と。少將泣いて曰く「我が良臣を喪つて、而して兒終に免れずば、悔更に甚だしからん」と。數日にして世子を堀江に遷し、遂に二股に遷し、忠世をして護らしめ、關口氏を誅す。信長、意未だ解けず。九月望、終に世子をして自殺せしむ。年二十一。世、忠世の輩、少將の意を曉らざるを咎む。初め少將の姫人永見氏、孕んで罪を獲、出で、其の郷に産す。世子、潛に之を擧げ、荻丸と呼ぶ。三年にして之を見らる。少將、子とせざるなり。本多重次、抱持して賀して曰く「酷だ君に肖たり。君、戰國に處る。宜しく子多かるべし。臣請ふ、育せん」と。世子、卒す。時に荻丸甫めて六歳。而して長丸を立て、世子と爲す。

八月、少將は岡崎に赴き、世子を大濱に置いて、後命を待たせた。その翌日、世子は自身で出かけて来て歎き訴へた。併し許さなかつた。平岩親吉は世子の附人であつた。願ひ出て曰ふには「世子は秀れた武勇有る方であります。今急いで殺して終つたなら、後日必ず悔いる日が参りませう。私はお附人となつてゐて不始末で御座いました。どうぞ私の首を斬つて、信長にお詫びをして下さい」と。少將は涙を落して曰ふには「今私の良臣(平岩を指す)を失ひ、そして子供も結局助からぬことになつたならば、悔は一層甚しいわけだ」と。數日経つて世子を堀江に移し、それから又二股に移し、忠世をして監督させ、そして關口氏を誅した。併し信長の心はまだ解けなかつた。九月十五日、遂に世子をして自殺せしめた。年二十一である。世人は忠世等が、子を殺させまいと苦慮した少將の意中を覺らなかつたのを非難した。これより前、少將の妾の永見氏が懐胎中、咎を蒙り、里方、歸つて出産した。世子がこつそり引き取つて、萩丸と名を付けてゐた。三年経つてその子を少將に見せた。少將は自分の子として取り扱はなかつた。本多重次がそれを抱きかへて祝を述べて曰ふには「大層我が君に似てゐられます。主君は戦國の世にをらるゝのである。御息は多い方が宜しう御座います。この御子は私がお育て申し上げませう」と。さて世子が亡くなつた。その時萩丸は漸く六歳であつた。そして三子の長丸を世子に立てた。

語釋 大濱・堀江(遠)

先是、上杉謙信卒、義子景虎、與從子景勝爭國。景勝賂武田勝頼、合攻殺景虎。景虎北條氏政弟也。氏政怒、絕勝頼、遂來修好。於是、三國交盟、約曰、武田侵伊豆、則德川

出兵駿河、侵遠江、則北條出兵上野、侵美濃、則德川北條並向甲斐、使織田母東顧也。是月、勝頼氏政相持于黃瀬河。少將聞之、自將入駿河。酒井忠次諫曰、踰險深入、其危不測。少將曰、約不可違。且二人相持、而我乘其弊、必有利矣。使忠次留陣瀬戸、而進過田中城、攻持舟、拔之、縱火至由井。勝頼引兵來迎。氏政不敢尾。少將欲逆擊之。諸將諫曰、勝不可必、而敵城在背、乃還。忠次爲殿。十一月、松平家忠伏兵瀧坂、擊破甲斐兵。

一訓讀 是より先、上杉謙信卒し、義子景虎、從子景勝と國を争ふ。景勝、武田勝頼に賂ひ、合せ攻めて景虎を殺す。景虎は、北條氏政の弟なり。氏政怒り勝頼に絶ち、遂に來つて好を修む。是に於て、三國交盟約して曰く「武田、伊豆を侵さば、則ち德川、兵を駿河に出さん。遠江を侵さば、則ち北條、兵を上野に出さん。美濃を侵さば、則ち德川、北條、並に甲斐に向ひ、織田をして東顧するなからしめん」と。是の月、勝頼氏政、黃瀬河に相持す。少將之を聞き、自ら將として駿河に入らんとす。酒井忠次諫めて曰く「險を踰え深く入る、其の危きこと測られず」と。少將曰く「約違ふべからず。且つ二人相持す。而して我れ其の弊に乗ぜば、必ず利あらん」と。忠次をして、留つて瀬戸に陣せしめ、而して進んで田中城を過ぎ、持舟を攻めて之を抜き、火を縱ち由井に至る。勝頼、兵を引いて來り迎ふ。氏政敢て尾せず。少將、之を逆へ撃たんと欲す。諸將諫めて曰く「勝必ずべからず。

而して敵城、背に在り」と。乃ち還る。忠次、殿と爲る。十一月、松平家忠、兵を瀧坂に伏せ、甲斐の兵を撃破す。

通釋 これより以前、上杉謙信が歿して、養子の景虎が謙信の甥の景勝と相續争ひをした。景勝は武田勝頼に賄賂を送り、兩方から攻めて景虎を殺した。景虎は元、北條氏政の弟である。氏政は立腹して勝頼と絶交し、その上、徳川方に來つて交を結んだ。そこで(織田、徳川、北條の三國は相互に盟約を結んで曰ふのに)「武田が伊豆に侵入したなら、其の時徳川は駿河に出兵する。遠江を侵して來たなら、北條は上野に出兵をする。美濃を侵したなら、徳川・北條何れも甲斐に向ひ、織田をして東方を心配させないやうにしよう」と。この月、勝頼と氏政が黄瀬河(伊豆)に對陣した。少將はそれを聞いて、自身兵を率ゐて駿河に入らうとした。酒井忠次が諫めて曰ふには「(箱根)の險阻を越えて敵地深く入るのは、誠に危険千萬です」と。少將が曰ふには「約束は背くわけに行かぬ。又二人が對陣してゐるのだ。自分がその弱味につけ込んだら、きつとうまい事が有るだらう」と。忠次をして瀨戸に留まつて陣取らせ、自分は進んで田中城を通り過ぎ、持舟を攻めて之を陥れ、火を放ち、由井まで來た。勝頼は伊豆の兵を引きつれて來り迎へた。氏政は思ひ切つて追うては來なかつた。少將は之を逆へ撃たうとした。諸將が諫めて曰ふのに「必ず勝つとは決まつてゐません。それに敵の城(田中)が背後にあります」と。そこで引き返した。忠次が殿になつた。十一月、松平家忠は瀧坂に伏兵を設けて、甲斐の軍を撃ち破つた。

八年正月、少將進從四位上。三月、攻高天神、連若逼之。五月、攻田中、侵掠而還。持舟兵出躡之。返戰大破之。七月、復攻田中。岡田元次曰「天將雨。大井必漲。請速收兵。」少

將乃濟河而還。其夜果雨。勝頼聞我攻田中、疾驅而至。河漲不得濟。九年二月、高天神兵、力屈而逃。我兵邀擊、斬守將岡部與行。初、小笠原氏叛降甲斐。我監軍大河内政局不從。武田氏以利誘降。政局唾罵不顧。幽于石窟。八年、至此得出。痿不能起。少將賞賜之。

訓讀 八年正月、少將從四位上に進む。三月、高天神を攻め、砦を連ね之に逼る。五月、田中を攻め、侵掠して還る。持舟の兵出で、之を躡す。返り戦ひ大に之を破る。七月、復田中を攻む。岡田元次曰く「天將に雨ふるんとす。大井必ず漲らん。請ふ、速に兵を收めよ」と。少將乃ち河を濟つて還る。其の夜果して雨ふる。勝頼、我が田中を攻むると聞き、疾驅して至る。河漲つて濟るを得ず。九年二月、高天神の兵、力屈して逃る。我が兵、邀へ撃ち、守將岡部與行を斬る。初め小笠原氏叛いて甲斐に降る。我が監軍大河内政局従はず。武田氏、利を以て誘ひ降さんとす。政局、唾罵して顧みず。石窟に幽せらるゝこと八年、此に至り出づるを得。痿して起つ能はず。少將、之を賞賜す。

通釋 八年正月、少將は從四位上に進んだ。三月、高天神を攻め、砦を並べ連ねて之に迫つた。五月、田中城を攻め、侵し掠めて還つた。持舟の兵が出て來て、その後をつけた。我が軍は引き返して戦ひ、大に之を破つた。七月、また田中を攻めた。岡田元次が曰ふには「此の天氣では大雨になりさうです。すると必ず大井川に水が出るでせう。どうぞ直ぐ軍をお收め下さい」と。そこで少將は川を渡つて引き返した。その夜果して雨が降つた。

勝頼は我が軍が田中を攻めると聞いて、馬を飛ばせてやって来た。川が出水してゐて渡ることが出来なかつた。九年二月、高天神の守備軍が、愈々閉口して逃げ出した。我が兵は之を迎へ撃つて、守將の岡部與行を斬つた。以前、小笠原氏が叛いて甲斐に降つたことがある。その時軍目付の大河内政局は従はなかつた。武田氏は利益を餌にして誘ひ降さうとした。政局は悪口雜言してそれを顧みなかつた。(それが爲め)岩窟に幽閉されること八年であつた。此の時に漸く出ることが出来た。あしなえになつて起つことが出来なかつた。少將は物を賜つて之を賞した。

少將遂與織田氏議、大舉攻甲斐。十年二月、信長遣信忠將前軍入信濃、而自繼之。少將將騎卒三萬五千入駿河、陣牧野、分兵攻遠目、鞠子、持舟、久能、諸城、皆陷之。甲斐、將穴山信良在江尻。少將遣長坂血槍、說降之。信良潛來謁、走還其邑。乃進陣江尻。遣人降田中守將依田信蕃。不肯。乃使信良以書諭之。三月、信蕃致城而去。府中守將武田信龍棄守遁。少將以信良爲鄉導、自市川入甲斐。所過毫毛不犯。沿道望風歸降。當是時、信忠已下信濃、諸城進入甲斐、古府、北條氏政以兵三萬臨境上。勝頼逃無所之。乃以殘兵棲天目山。織田氏兵逼殺之、獻首信長。信長罵曰、豎子使乃

公不得高枕數年矣。今果何狀也。傳至我營。少將下胡床、加禮曰、公以五州主將、而遂至於此。豈非天哉。甲斐、信濃、士民聞之、皆竊歸心於德川氏。

訓讀 少將遂に織田氏と議し、大舉して甲斐を攻む。十年二月、信長、信忠を遣はし、前軍に將として信濃に入らしめ而して自ら之に繼ぐ。少將、騎卒三萬五千に將として駿河に入り、牧野に陣し、兵を分つて遠目、鞠子、持舟、久能の諸城を攻め、皆之を陷る。甲斐の將穴山信良、江尻に在り。少將、長坂血槍を遣はし、説いて之を降す。信良、潛に來り謁し、走つて其の邑に還る。乃ち進んで江尻に陣し、人を遣はして田中の守將依田信蕃を降す。肯んせず。乃ち信良をして書を以て之を諭さしむ。三月、信蕃城を致して去る。府中の守將武田信龍、守を棄て、遁る。少將、信良を以て郷導と爲し、市川より甲斐に入る。過ぐる所、毫毛も犯さず。沿道、風を望んで歸降す。是の時に當り、信忠已に信濃の諸城を下し、進んで甲斐の古府に入る。北條氏政、兵三萬を以て境上に臨む。勝頼逃れ、之く所なし。乃ち殘兵を以て天目山に棲む。織田氏の兵逼つて之を殺し、首を信長に獻ず。信長罵つて曰く「豎子、乃公をして枕を高くするを得ざらしむること數年なり。今果して何の狀ぞや」と。傳へて我が營に至る。少將、胡床を下り、禮を加へて曰く「公、五州の主將を以てして、遂に此に至る。豈に天に非ずや」と。甲斐・信濃の士民之を聞き、皆竊に心を德川氏に歸す。

通釋 少將は遂に織田氏と相談し、大軍を出して甲斐を攻めた。十年二月、信長は信忠を遣つて前軍の大將として信濃に入らせ、そして自分はその後に續いた。少將は、騎兵歩卒三萬五千に將となつて駿河に入り、牧野に陣取り、兵を分けて遠目・鞠子・持舟・久能の諸城を攻めて、皆これ等を陥れた。甲斐の大將穴山信良は江尻に居

つた。少將は長坂血槍を遣つて、之に説いて降伏させた。信長は人知れず来て少將に目通りをし、走つて自分の領地に歸つた。そこで少將は進んで江尻に陣取り、人を遣はして田中の守將、依田信蕃を降さんとした。依田は承諾しない。そこで信長をして手紙で諭させた。三月、信蕃は城を開け渡して去つた。府中城の守將、武田信龍も守を捨て、逃れた。少將は信長を道案内と爲し、市川から甲斐に入つた。その途中、通る所は塵一本も犯し取らなかつた。沿道の者共はその威風を望んでなづき降つた。此の時、信忠はすでに信濃の諸城を降し、進んで甲斐の古府に入つた。北條氏政が兵三萬を率ゐて國境附近に出た。勝頼は逃げ出したが、行くべき先きも無い。殘兵を引きつれて天目山に籠つた。織田氏の兵が攻め寄せて之を殺し、首を信長に獻じた。信長は罵つて曰ふやう「小僧、貴様は乃公に枕を高くして安眠させなかつたこと數年に及んだ。今となつては何んたる態だ」と。その首が我が軍の陣屋まで送られて来た。少將は床几から下り、禮を爲して曰ふには「貴公は五ヶ國の總大將の身を以て、遂にこんな有様になられた。誠に天命如何とも爲し難いことである」と。甲斐・信濃の士民はこの話を聞いて、皆、ひそかに徳川氏の方に心を傾けた。

語釋 遠目・鞠子・江尻(駿河) ○五州(甲信濃)

信長初誘武田氏諸將使叛及勝頼死皆誅之。下令逮捕期無遺類。少將潛庇之。多
 得免者。依田信蕃久守田中以抗我兵。少將最嘉之。收隸部下。於是少將會信長于
 諏訪賀戰捷。信長曰「長篠之戰奪其爪牙。今日固易爲力。皆卿之力也。」遂分武田氏

地使少將取駿河。少將曰「今川氏眞寓居僕所。願割其半予之。」信長不許曰「子以兵
 力取駿河。何分之一寓公平乎。」遂割甲斐一郡。賜穴山信良使我統屬之。置瀧川一益
 于上野。經略關東。置河尻鎮吉于甲斐。森長可等于信濃。皆使受我節度。四月、信長
 焚惠林寺。廬其僧徒。遂自海道西歸。少將供給甚豐。

訓讀 信長、初め武田氏の諸將を誘ひ叛かしめ、勝頼の死するに及び皆之を誅す。令を下して逮捕し、遺類なきを期す。少將潛に之を庇ひ、免るを得たる者多し。依田信蕃、久しく田中を守り以て我が兵に抗す。少將最も之を嘉し、收めて部下に隸す。是に於て、少將、信長に諏訪に會し、戰捷を賀す。信長曰く「長篠の戰に其の爪牙を奪ふ。今日固より力を爲し易し。皆卿の力なり」と。遂に武田氏の地を分ち、少將をして駿河を取らしむ。少將曰く「今川氏眞、僕の所に寓居す。願はくは其の半を割いて之に予へん」と。信長許さずして曰く「子、兵力を以て駿河を取る。何ぞ之を一寓公平に分たんや」と。遂に甲斐の一郡を割き穴山信良に賜ひ、我をして之を統屬せしむ。瀧川一益を上野に置き、關東を經略せしめ、河尻鎮吉を甲斐に、森長可等を信濃に置き、皆我が節度を受けしむ。四月、信長、惠林寺を焚き、其の僧徒を廬にし、遂に海道より西歸す。少將、供給甚だ豊なり。

通釋 信長は初め、武田氏の諸將を誘つて武田氏から叛かせて置いて、勝頼が死するや、皆彼らを誅殺した。又令を下して武田方の者を捕へ、同類の一人も無いやうにしようとして心に期した。少將はひそかにそれを庇つて、その爲めに信長の手から免れ得た者も多かつた。依田信蕃は久しい間、田中城を守つて我が軍に抵抗した。少將